

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII-3

1985

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII-3

1985

滋賀県教育委員会
監 観 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9分冊に分けて刊行するものであります。

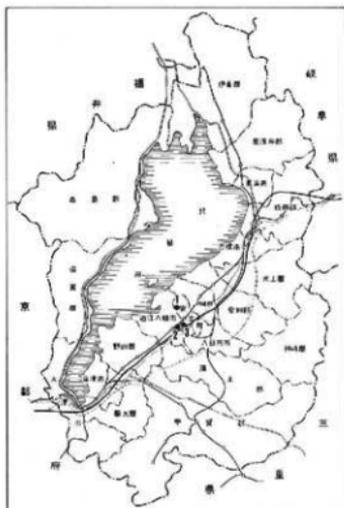
最後になりましたが、ほ場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行にご協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
市原 浩

例 言

1. 本報告書は、昭和59年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、蒲生郡安土町新開遺跡、近江八幡市金剛寺遺跡、同市常衛遺跡の調査成果を収載したものである。
2. 調査は、滋賀県農林部の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査にあたっては、地元安土町役場、近江八幡市役所、各教育委員会、八日市県事務所をはじめ、地元関係者の方々から種々の協力を得た。協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表わします。
4. 調査は、滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主査田中勝弘、技師葛野泰樹、同田路正幸を担当者とし、新開遺跡については安土町教育委員会技師石橋正嗣、同西家淳朗氏にお願いした。
5. 各章の文責は、各遺跡ごとに明記した。



遺跡位置図

1. 新開遺跡 2. 金剛寺遺跡 3. 常衛遺跡

目次

I. 蒲生郡安土町新開遺跡	
1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 昭和58年度発掘調査の結果	3
(1) 遺構	3
イ. T-4・2	3
ロ. T-4・3	3
ハ. T-4・4	3
ニ. その他のトレンチ	9
(2) まとめ	9
4. 昭和59年度発掘調査の結果	13
(1) 遺構	13
イ. A区	13
ロ. B区	13
ハ. 5号排水路敷 (T-4)	19
ニ. 「新開の森」周辺のトレンチ	19
ホ. 6号排水路敷 (T-6)	19
(2) 遺物	20
(3) まとめ	24
II. 近江八幡市金剛寺遺跡	
1. はじめに	29
2. 位置と環境	29
3. 調査経過	31
4. 検出遺構	32
(1) I期	32
(2) II期	34
5. 出土遺物	42
6. まとめ	44
III. 近江八幡市常街遺跡	
1. はじめに	46
2. 位置と環境	46
3. 調査経過	48
4. 検出遺構	50
(1) 1号排水路	50

(2) 2号排水路	51
5. 出土遺物	58
6. まとめ	58

図版目次

I. 蒲生郡安土町新開遺跡

図版1 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-2 調査前 (東から)
2. T-2 調査風景

図版2 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-2・2 (東から)
2. T-2・5 (西から)

図版3 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-3 調査前 (東から)
2. T-3・2 (西から)

図版4 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-4・1 (西から)
2. T-4・2 (東から)

図版5 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-4・2 SB1 (東から)
2. T-4・2 SK3 遺物出土状況

図版6 新開遺跡・遺構 (昭和58年度)

1. T-4・4 住居跡検出状況
2. T-4・4 (東から)

図版7 新開遺跡・遺物 (昭和58年度) 出土遺物

図版8 新開遺跡・遺物 (昭和58年度) 出土遺物

図版9 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. 調査前遠景 (東から)
2. T-6 調査風景

図版10 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. A区 T-1 (北から)
2. A区 T-2 SD2 遺物出土状況

図版11 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. A区 T-4 SD4 遺物出土状況
2. A区 T-4 (南から)

図版13 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. B区 T-5 SX3 (北から)
2. B区 T-5 (南から)

図版14 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. B区 T-5 SX3 南西コーナー
2. B区 T-5 SD7 木器出土状況

図版15 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. T-5・2 (東から)
2. T-5・3 (西から)

図版16 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. T-5・4 (西から)
2. T-5・5 (東から)

図版17 新開遺跡・遺構 (昭和59年度)

1. T-6・3 (東から)
2. T-6・5 (西から)

図版18 新開遺跡・遺物 (昭和59年度)

図版19 新開遺跡・遺物 (昭和59年度)

図版20 新開遺跡・遺物 (昭和59年度)

図版21 新開遺跡・遺物 (昭和59年度)

II. 近江八幡市金剛寺遺跡

図版1 金剛寺遺跡

1. 金剛寺遺跡遠景 (北西から)
2. 第1トレンチ全景 (西から)

図版2 金剛寺遺跡

3. 第1トレンチSE0101
4. 第2トレンチ全景 (東から)

図版3 金剛寺遺跡

5. 第3トレンチ全景
6. 第4トレンチ全景 (西から)

図版4 金剛寺遺跡

7. 第4トレンチ拡張部 (南から)
8. 第4トレンチSD0401

図版5 金剛寺遺跡

9. 第4トレンチSB0401
10. 第4トレンチSB0402

図版6 金剛寺遺跡

11. 第4トレンチSB0403
12. 第5トレンチ全

景

図版7 金剛寺遺跡

13. 第6トレンチ全景(東から)

14. 第6トレンチSB0601

図版8 金剛寺遺跡

15. 第8トレンチ全景(東から)

16. 第8トレンチSK0803

図版9 金剛寺遺跡

17. 第9トレンチ全景(東から)

18. 第9トレンチSD0901

図版10 金剛寺遺跡

19. 第9トレンチSE0901 20. 第9トレンチS

E0902

図版11 金剛寺遺跡

21. 第10トレンチ全景(東から)

22. 第10トレンチSD1001

図版12 金剛寺遺跡

23. 出土遺物(1)

図版13 金剛寺遺跡

24. 出土遺物(2)

11. 第1号第6トレンチ北半(南から)

12. 第1号第6トレンチSB0601

図版7 常衛遺跡

13. 第1号第6トレンチSD0601 14. 第1号第

6トレンチSD0604

図版8 常衛遺跡

15. 第2号第7トレンチSD0701・02

16. 第2号第7トレンチSB0701

図版9 常衛遺跡

17. 第2号第10トレンチSR・2

図版10 常衛遺跡

出土遺物

III. 近江八幡市常衛遺跡

図版1 常衛遺跡

1. 常衛遺跡遠景(北から) 2. 調査風景

図版2 常衛遺跡

3. 第1号第1トレンチ全景(北から)

4. 第1号第2トレンチ全景(南から)

図版3 常衛遺跡

5. 第1号第3トレンチ全景(南から)

6. 第1号第3トレンチSR・1

図版4 常衛遺跡

7. 第1号第4トレンチSB0401 8. 同遺物出

土状況

図版5 常衛遺跡

9. 第1号第5トレンチ全景(北から)

10. 第1号第6トレンチ南半(南から)

図版6 常衛遺跡

挿 図 目 次

遺跡位置図

I. 浦生郡安上町新開遺跡

- 第1図 新開遺跡位置図および町内遺跡分布図
- 第2図 昭和58年度調査トレンチ配置図
- 第3図 T-4・2遺構実測図
- 第4図 T-4・3, 4遺構実測図
- 第5図 新開遺跡出土遺物実測図
- 第6図 新開遺跡出土遺物実測図
- 第7図 昭和59年度調査トレンチ配置図
- 第8図 A区T-1, T-2遺構実測図
- 第9図 A区T-3, T-4遺構実測図
- 第10図 T-5遺構実測図
- 第11図 T-5・2, 3, 5遺構実測図
- 第12図 新開遺跡出土遺物実測図
- 第13図 新開遺跡出土遺物実測図
- 第14図 新開遺跡出土遺物実測図
- 第15図 新開遺跡出土遺物実測図

II. 近江八幡市金剛寺遺跡

- 第1図 金剛寺遺跡位置図および周辺遺跡分布図
- 第2図 調査トレンチ配置図
- 第3図 第1トレンチ遺構配置図
- 第4図 第2トレンチ遺構配置図
- 第5図 第3トレンチ遺構配置図
- 第6図 第4トレンチ遺構配置図
- 第7図 第5トレンチ遺構配置図
- 第8図 第1トレンチSE0101実測図
- 第9図 第4トレンチSB0401-03実測図
- 第10図 第4トレンチSD0401実測図
- 第11図 第6トレンチ遺構配置図
- 第12図 第7トレンチ遺構配置図
- 第13図 第6トレンチSB0601実測図
- 第14図 第8トレンチ遺構配置図

- 第15図 第9トレンチ遺構配置図
- 第16図 第9トレンチSE0901土層図
- 第17図 第9トレンチSE0902実測図
- 第18図 第10トレンチ遺構配置図
- 第19図 金剛寺遺跡出土遺物

III. 近江八幡市常街遺跡

- 第1図 常街遺跡の位置と周辺の遺跡
- 第2図 調査トレンチ配置図
- 第3図 第1号第1~3・5トレンチ遺構配置図
- 第4図 第1号第4トレンチ遺構配置図
- 第5図 SB0401実測図
- 第6図 第1号第6トレンチ遺構配置図
- 第7図 第2号第0~8トレンチ遺構配置図
- 第8図 第2号第9~17トレンチ遺構配置図
- 第9図 出土遺物

I 蒲生郡安土町新開遺跡

1. はじめに

本報告は、滋賀県が実施する昭和58・59年度県営ほ場整備事業（安土北部地区常楽寺工区）に伴う発掘調査の成果である。当遺跡は帆立貝式古墳と推定されている「新聞の森」を中心に広がる遺跡で、早くから遺物の散布が周知され、集落跡と考えられていた。しかし、遺跡の性格、範囲等は明らかではなく、工事実施前に発掘調査を行ない遺跡の保存策を講ずることとした。

調査は第1次調査を昭和58年4月から昭和59年3月に行ない、第2次調査を昭和59年4月から昭和60年3月まで実施した。また、予算は文化財保護課が県農林部耕地建設課より再配当（第1次調査7,770,000円、第2次調査4,710,000円）をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託し、現地調査は安土町教育委員会技師石橋正嗣、西家淳朗氏へお願いした。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主任近藤 滋（昭和58年度）、主査田中勝弘、技師葛野泰樹、岡田路止幸（昭和59年度）

調査補助員 昭和58年度 矢戸貴子、村田千恵子、設楽靖史、足達拓実、西沢由美子

昭和59年度 村田千恵子、岩崎由美子、小西忠宏、設楽靖史、足達拓実、山口聖勝、波手辰子、平田五弥、松居里子

また、調査に当っては、地元常楽寺の方々の御協力をいただき、本書作成にあたり河内美代子氏をはじめ、村田千恵子、設楽靖史、足達拓実、小西忠宏、岩崎由美子、城金栄子、岡橋三四子、水原住子諸氏の協力を得た。

本文の執筆、編集は葛野、西家が共同してあつた。

（葛野泰樹、西家淳朗）

2. 位置と環境

新聞遺跡は蒲生郡安土町大字常楽寺に所在する。当該地は安土町北部を東西に走る主要地方道大津能登川長浜線、通称「朝鮮人街道」と西の湖に挟まれた標高85～88mの広大な水田地帯で、水路（クリーク）を縦横にめぐらした比較的平坦な地形をなしている。この平坦な地をさらに微細に見ると、やや西側に南北に延びる微高地が存在している。この微高地は、叡山山系のふもとに端を発し、安土町内を南北に走る2条の舌状台地のうち、大字中屋から、慈恩寺・番之庄へ続く台地の先端部に位置する。安土町内における遺跡の分布はこれらの台地上に集中しており、当台地上でも南から中屋遺跡、慈恩寺遺跡、熊野神社古墳群などの遺跡が知られている。さらに、当台地上にあり、今回の調査地南方の水田に立地する「新聞の森」と呼ばれているこの森は、形状から帆立貝式古墳を想定できるが真偽は明らかではない。昭和58年度の調査地はこの微高地の北側先端が西の湖に没している部分にあたり、特に北側の西の湖畔にはヨシが繁り、現在でも湿地帯を形成している。昭和59年度の調査は「新聞の森」を中心とする微高地部分を対象とした。



第1図 新開遺跡位置図および町内遺跡分布図

- | | | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 調査地 | A. 大中の湖南遺跡 | B. (特別史跡) | 安土城跡 | C. 瓢箪山古墳 | D. 観音寺城跡 | E. 老蘇の森 |
| 2. 獅子ヶ鼻遺跡 | 3. 熊野神社古墳群 | 4. 金剛寺遺跡 | 5. 安土城下町遺跡 | 6. 常楽寺山古墳群 | 7. 西才行遺跡 | 8. 江頭遺跡 |
| 9. 常楽寺山古墳群 | 10. 烏打峠遺跡 | 11. 観音寺城遺跡 | 12. アラシカ谷遺跡 | 13. 東老蘇遺跡 | 14. 東老蘇立宿遺跡 | 15. 十三仏遺跡 |
| 16. 巽作山遺跡 | 17. 平原古墳群 | 18. 弁天島遺跡 | 19. 小中遺跡 | 20. 慈恩寺遺跡 | 21. 新聞の森 | |

3. 昭和58年度発掘調査の結果

(1) 遺構

計画排水路敷(1号~4号)に幅3mの試掘トレンチを適宜設定し、遺構の検出を試みた。その結果、4号排水路敷中央部で遺構が検出され、それに伴い遺物が出土した。以下その概要を述べる。

イ) T-4・2

4号排水路敷ほぼ中央に設定した3m×58mのトレンチである。層位は東半で耕作土、茶褐色土、暗灰色粘質土、黒褐色腐色土、西半で耕作土、暗灰色粘質土、淡茶褐色土(小礫多量混)をなし、各遺跡は地山面を切り込んで形成される。

土城(SK3)

SK2の西側で検出された不定形の落ち込みである。深さは15~20cmを測り、埋土は黒灰色粘質土(腐植土多量混)である。埋土中より、古墳時代前期の土器が比較的多量に出土した。遺物の出土状況から廃棄土址と思われる。

掘立柱建物(SB1)

トレンチほぼ中央で検出された2間以上×2間以上の総柱の建物と思われる。N-8°-Eの方位を示し、柱間寸法は1~1.5mを測る。柱穴掘形は直径30~60cmの円形で深さ10~35cmを測る。掘形内埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より古墳時代前期と思われる土師器片が出土している。

溝(SD1 SD2)

トレンチ西部でほぼ平行に検出された2条の浅い溝である。方位はN-24°-Wを示し、深さ10~15cmを測る。埋土は暗褐色土で中世の土師器片が数点出土している。

ロ) T-4・3

T-4・2の西側に設けた3m×17mのトレンチである。層位は耕作土、茶褐色土(砂礫混)、暗灰色土(砂礫多量混)をなす。

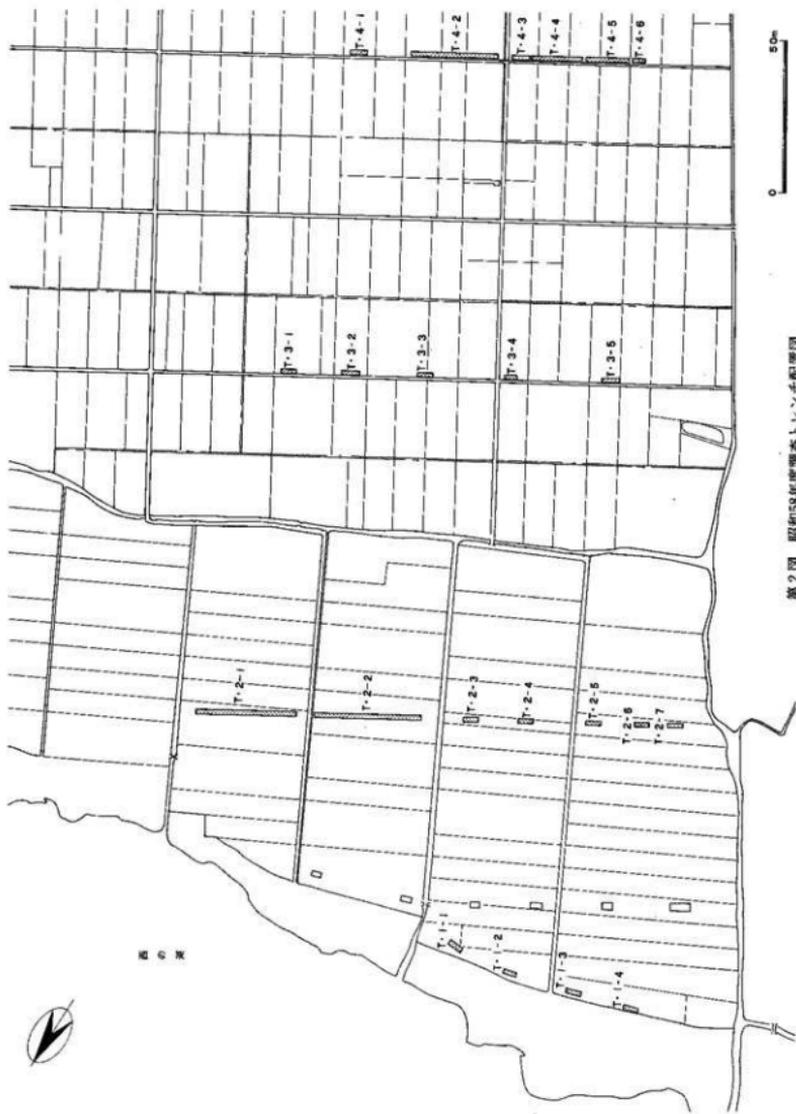
土城(SK4 SK5)

SK4 暗灰色土(砂礫多量混)層を切り込む深さ10~15cmの土城である。埋土は暗灰色粘質土(腐色土混)で土師器片が出土している。

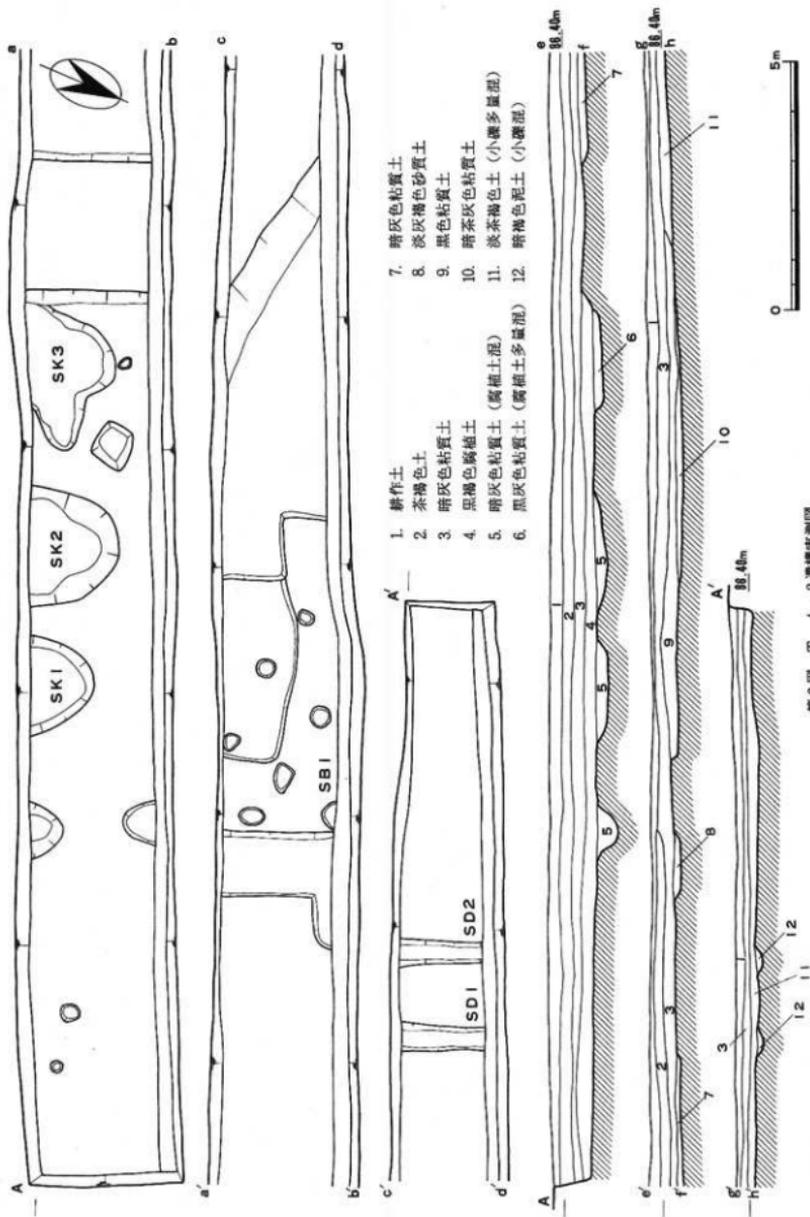
SK5 地山を切り込み長円形のプランを持つと考えられる。深さは30cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。埋土中より壺の底部(Na37)、高杯(Na45)が出土している。

ハ) T-4・4

T-4・3の西側に設けた3m×33.5mのトレンチである。層位は耕作土、茶褐色土、黒灰色粘質土、地山(褐色砂礫)で遺構は地山上で検出された。



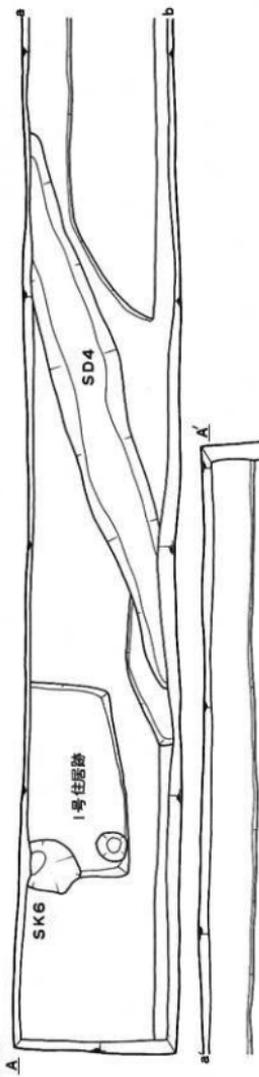
第2図 昭和18年鹿野臺トレンチ配属図



- 1. 耕作土
- 2. 赤褐色土
- 3. 暗灰色粘質土
- 4. 黑褐色腐植土
- 5. 暗灰色粘質土 (腐植土混)
- 6. 黑灰色粘質土 (腐植土多量混)
- 7. 暗灰色粘質土
- 8. 淡灰褐色砂質土
- 9. 黑色粘質土
- 10. 暗茶灰色粘質土
- 11. 淡茶褐色土 (小礫多量混)
- 12. 暗褐色泥土 (小礫混)

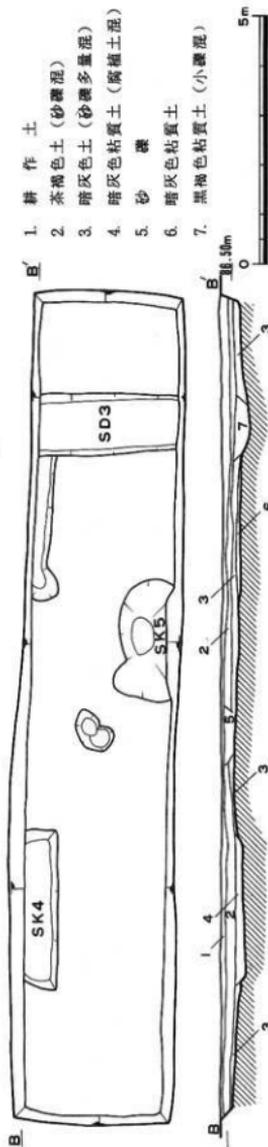
第3圖 T-4・2遺跡平面圖

T. 4-4



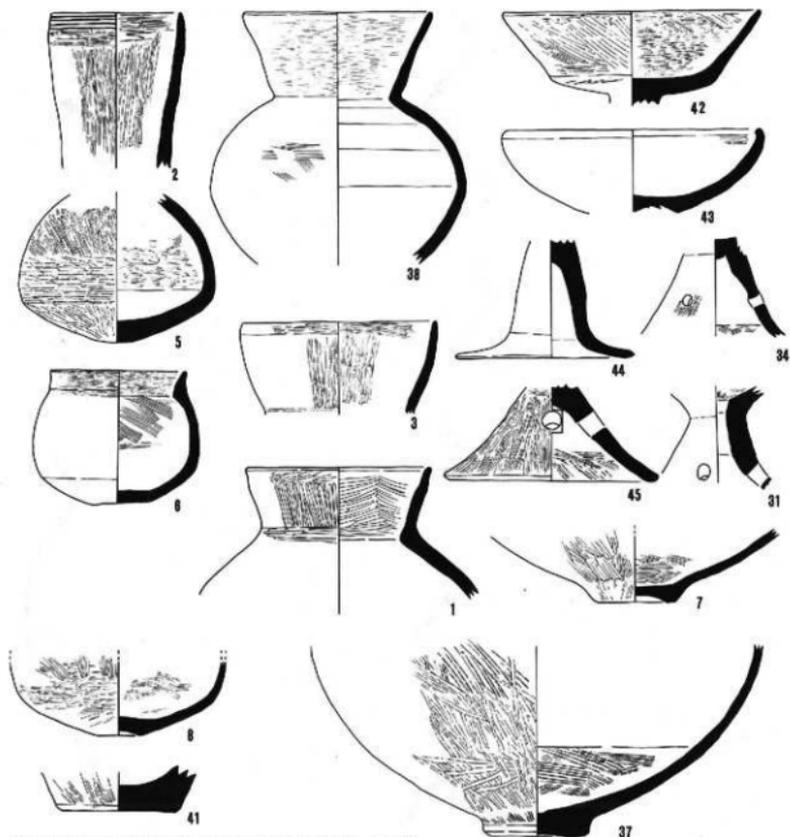
1. 耕作土
2. 茶褐色土
3. 暗灰色土
4. 黑褐色粘質土
5. 黑灰色粘質土
6. 暗灰褐色粘質土 (腐植土混)

T. 4-3



1. 耕作土
2. 茶褐色土 (砂壤混)
3. 暗灰色土 (砂壤多量混)
4. 暗灰色粘質土 (腐植土混)
5. 砂壤
6. 暗灰色粘質土
7. 黑褐色粘質土 (小礫混)

第4圖 T-4. 3. 4 遺構基測圖



1・2・3・5・6・7・8・31・34:T-4・2 SK3

41:T-4・4 SD4

37・45:T-4・3 SK5

38・42・43・44:T-4・4 SK6

0 15cm

第5図 新開遺跡出土遺物実測図

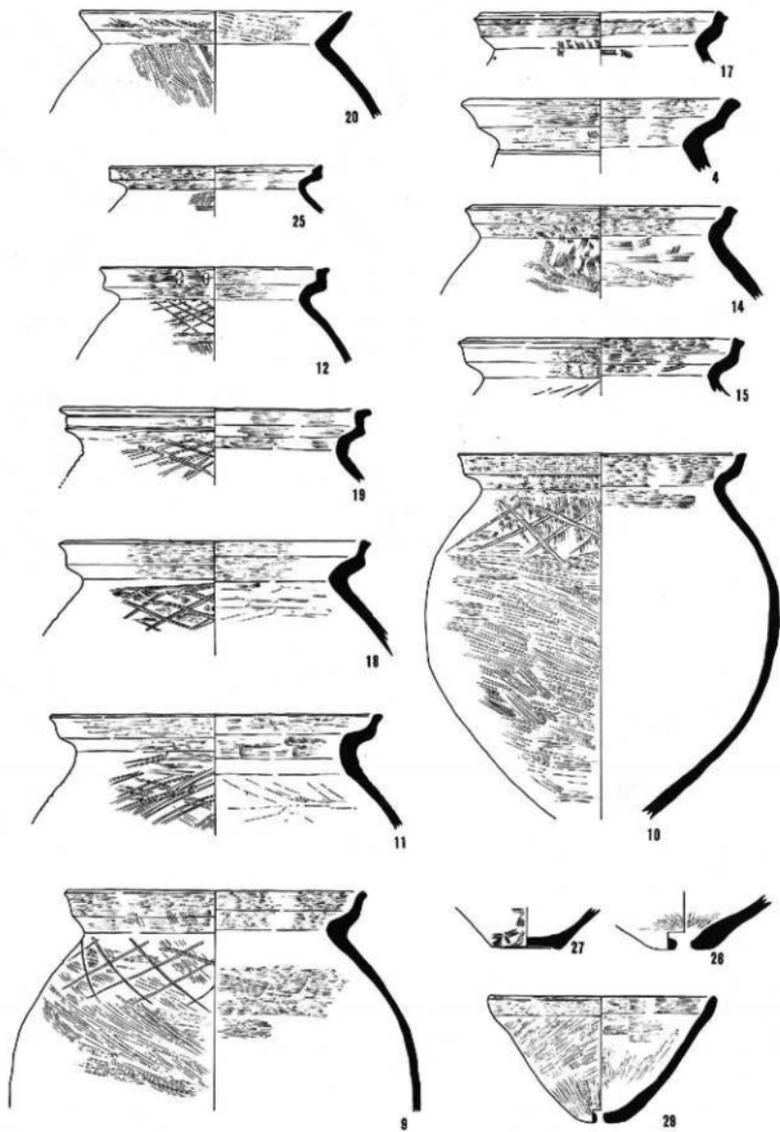
住居跡

トレンチ東部で検出され、一辺4m前後の方形のプランを持つと考えられる。柱穴、壁溝等の施設は検出されなかったが形状から判断して住居跡とした。東辺中央をSK6に切られる。北辺の方位はN-57°-Eを示し、現存する深さは10cm~15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より古墳時代前期の土師器（高杯、甕等）の小片が出土した。

溝

SD4 住居跡西側で検出された北から南へ傾斜をもつ溝跡である。方位はN-50°-Eを示し、埋土は暗灰褐色土と暗灰褐色粘質土（腐色土混）の2層にわかれる。現存する深さは50~60cmで、埋土中よりNo41が出土している。

SK6 住居跡を切る形で検出された土壇で、円形を呈すと思われる。深さは20cmを測り、埋土は暗灰褐色土である。



4・9・10・11・12・14・15・17・18・
19・20・26・27・29: T-4・2 SK3
25: T-4・2 黑褐色腐植土

第6图 新開遺跡出土遺物実測図

埋土中より、土師器壺 (No38)、高杯 (No42~44) が出土している。

二) その他のトレンチ

T-1 今回の調査区で最も西の湖岸りに位置する1号排水路敷に設けたトレンチで計4ヶ所設定した。その結果、各トレンチとも耕作土 (20~30cm) の下、灰色粘質土、暗褐色粘質土 (腐植土混)、青灰色粘土の層位を示し、遺物、遺構は検出されなかった。

T-2 T-1から100m 南に設定した東西方向のトレンチで計7ヶ所設定した。その結果、層位はT-1と同様の様相を呈し、T-2・7で近代の水路跡が検出された他は、遺物等の出土はない。

T-3 T-2から100m 南に設定した東西方向のトレンチで計5ヶ所設定した。その結果、層位は耕作土 (20~30cm)、灰褐色粘質土 (50~70cm)、暗灰色粘土 (一部で腐植土)、青灰色粘土を呈し、遺物、遺構の検出はみられなかった。

(2)まとめ

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期と思われる住居跡、土壇、溝等であるが幅3mと限られた調査範囲であった為、各遺構の規模、性格等の詳細は不明な点が多い。個々の遺構、遺物の検討は、今後の調査結果を持って行いたい。現段階では当新聞遺跡は古墳時代前期の葉落跡と推定される。今回は1棟のみ検出されたにすぎないが、SK 3出土土器関連の住居が周辺の微高地上に存在することが予想される。また、SD 4から弥生土器が出土している点、周辺の田面に中世の遺物の散布がみられる点などから、当遺跡の時代性はさらに広がるものと思われる。

このように今回の調査では遺跡のごく一部が明らかになったにすぎないが、旧地形の復元の点からみると、前述の敷山山裾に端を発し北方にのびる舌状台地の北限を当地、特にT-4とT-3の間に求めることができ、この微高地の周辺はヨシ・アシの生い茂る湿地帯を形成していたと想定される。

遺跡はこの微高地上に形成され、さらに、南北に範囲は広がるものと思われる。

新開遺跡（昭和58年度）出土遺物観察表

器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
壺	1	口径 11.8	外上方へ開く口縁をもち、上半部はわずかに内湾し、端部は丸く収まる。	口縁内外面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ。内面未調整。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 暗赤褐色 焼成 普通	T-4・2 SK 3
壺 (口頸部)	2	口径 8.2	やや外傾する口縁部で端部がわずかに内湾する。No.8と同一体か。	口頸部内外面共、ていねいな縦方向のミガキで、口縁内外面共横方向のミガキ。口縁外面に4条の沈線を施す。	胎土 石含まずきめ細か。 色調 暗赤褐色 焼成 良好	T-4・2 SK 3
壺 (口縁部)	3	口径 11.7	外上方に内湾しつつ立ち上がる口縁部である。	内外面共、ていねいなヘラミガキ。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK 3
壺 (口縁部)	4	口径 17.0	屈曲気味に外反した頸部から、さらに外反して立ちあがる口縁部をもつ。端部は丸く収まる。	口縁内外面共ナデ調整。	胎土 石含む。 色調 灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK 3
壺	5	最大腹径 12.0	胴部下半に最大径をもち、やや扁平な体部をもつ。	体部外面にていねいなヘラミガキ。内面はナデ。	胎土 石含まず緻密。 色調 灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK 3
小型壺	6	口径 8.3 器高 8.1 最大腹径 10.2	やや扁平気味の球形の体部に、直立する短い口縁をもつ。	体部内面はハケ整形で外面はケズリ。口縁部内外面共ナデ調整。	胎土 砂質 色調 灰褐色 焼成 普通	T-4・2 SK 3
壺 (底部)	7	底径 4.9	あげ底気味の底部から外方へ大きく開く体部を有する。	外面くガキ。内面はハケ調整。	胎土 石粒含む。 色調 良好 暗赤褐色	T-4・2 SK 3
壺	8	底径 2.8	あげ底気味の底部で体部は扁平な球形であると思われる。No.2と同一体か。	外面くガキ。内面はハケ調整。	胎土 石含まずきめ細か。 色調 良好 暗赤褐色	T-4・2 暗褐色粘質土
甕	9	口径 18.0	「コ」の字状の頸部から外面に甘い顎をつくり外反気味に立ち上がる口縁をもつ。端部は若干外方につまみ出す。	口縁部は内外面共ナデ調整。体部外面はハケ整形の後、頸部から体部にかけてへら描きの格子文を施す。	胎土 石粒含む。 色調 良好 灰褐色	T-4・2 SK 3
甕	10	口径 17.5	「コ」の字状の頸部から外面に甘い顎をつくり内湾気味に立ちあがる口縁をなす。先端部を外上方にわずかにつまみ出し、内傾する断面を有する。	口縁部内外面共ナデ調整。体部は外面ハケ整形の後、頸部から体部にかけて、へらによる乱雑な格子文を施す。体部内面はナデ調整。	胎土 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒含む。 色調 淡赤褐色 焼成 普通	T-4・2 SK 3
甕	11	口径 20.1	「コ」の字状の頸部から外面に甘い顎をつくり、外反して立ちあがる口縁部をもつ。先端部をやや外上方につまみ出す。	口縁部内外面共ナデ調整。体部内面はケズリで、外面はハケ整形の後、へらによる乱雑な斜線文を施す。	胎土 $\phi 1 \times 1\text{mm}$ までの砂粒含む。 色調 淡赤褐色 焼成 普通	T-4・2 SK 3
甕	12	口径 14.0	受口状口縁を呈す。端部を外上方につまみ出し平坦面をつくる。	口縁部外面はナデ調整の後3条の沈線に棒状付文を施す。体部は縦方向のハケ整形の後、頸部から体部にかけてへらによる格子文、その下に沈線を施す。	胎土 石英、雲母粒を含む。 色調 暗赤褐色 焼成 良好	T-4・2 SK 3
甕	14	口径 15.6	口頸部はゆるやかに外傾	口縁内外面共ナデ調整。	胎土 石粒含む。	

器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
			しつづ立ちあがる。口縁部でやや外方に立ちあがり端部はやや外方につまみ出され端面は外傾している。	体部外面は目の細かいハケ調整で、内面は頸部から体部にかけてハケ整形で体部は指でかきあげらる。	色調 淡灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
甕	15	口径 1.62	口頸部は外反して立ちあがり口縁部でやや外方に立ちあがる。先端部でやや外方につまみ出し端面は外傾している。	口縁内外面共ナデ調整。頸部から体部にかけてヘラによる斜方向のカキ目を施す。	胎土 $\phi 1 \sim 3$ mmの砂粒含む。 色調 淡赤褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
甕	17	口径 1.44	口頸部は外方へ直線的にのび、口縁部で外反して立ちあがる。先端で外方へつまみ出して、端面は外傾しており、2条の沈線が施されている。	口縁内外面共ナデ調整。頸部は内外面共ハケ整形。	胎土 $\phi 1 \times 1$ mmの砂粒含む。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
甕	18	口径 1.82	「コ」の字状の口頸部から外反する口縁部をもつ。先端部を外側につまみ出す。	口縁内外面共ナデ調整。体部は内面ケズリで外面は目の細かいハケ整形の後ヘラによる格子文を施す。	胎土 大粒の石粒を多量に含む。 色調 灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
甕	19	口径 1.90	「コ」の字状の頸部をもち外面に丸味を帯びた頸部をつくり、口縁部はやや内傾して直線的に立ちあがる。先端部は外方につまみ出し、平坦な内傾する面をなす。	口縁内外面共ナデ調整。体部内面未調整で外面はヘラによる格子文のカキ目を施す。	胎土 $\phi 1 \sim 2$ mmの石粒含む。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
甕	20	口径 1.66	「く」の字状口縁を呈す。端部は丸く収まる。	口縁部内外面共ハケ整形。体部もハケ整形。	胎土 石粒若干含む。 色調 淡赤褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
甕 (口縁部)	25	口径 1.30	屈曲した頸部より直立する口縁部をもつ。端面は大きく内傾し平坦な面をなす。	口縁部内外面共ナデ調整。口縁外面にハケ状工具による列点文。頸部から体部にかけてハケ整形の後沈線を施す。	胎土 石粒多少含む。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3 黒褐色 高嶺土
甕 (底部)	26		体部が直線的に開く鉢形の甕である。底部は平底で、焼成前に小円1孔を穿っている。	内外面共ハケ整形。	胎土 砂粒多く含む。 色調 灰褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
甕	27	底径 4.3	上げ底を呈し、直線的に外上方へ立ちあがる。	底部は目かいハケ整形で体部は横方向のハケ整形。内面未調整。	胎土 $\phi 1 \times 1$ mmの石を多量含む。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
甕	29	口径 1.39 器高 7.8	体部が直線的に開く鉢形の甕である。底部は丸底で焼成前に小円1孔を穿っている。	口縁部内外面共ナデ調整。体部内外面共ハケ整形。	胎土 砂質 色調 淡灰褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
器台	31		焼成前穿孔三方。	外面ミガキ。	胎土 やや砂質 色調 暗褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
高 環	33		中空の脚柱部から外上方に開く端部をもつ。脚柱部中位に焼成前穿孔3方を施す。	外面縦方向のヘラミガキ。内面ナデ。	胎土 $\phi 1 \sim 2$ mmの石を多量含む。 色調 淡褐色 焼成 良好	T-4・2 SK3
高 環	34		直線的に外方に下降する脚部である。底部は丸底で焼成前穿孔3方を施す。	脚部下半の外面は縦方向のミガキ。内面ハケ調整。上半は摩滅しており詳細不明。	胎土 石含む。 色調 暗褐色 焼成 普通	T-4・2 SK3
甕	37	底径 6.5	底部は比較的小さく、上	外面はハケ整形の後、乱	胎土 石粒多く含む。	

器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
			底で体部は球形と思われる。	底なへらみがき。 内面は底部ハケ整形。	胎土 石粒多く含む。 色調 (外) 淡灰褐色 (内) 暗灰色 焼成 良好	T-4・3 SK 5
壺	38	口径 11.6	やや扁平な球形の体部に外上方へ直線的に開く口縁をもつ。 端部は丸く収まる。	口縁内外面共ナデ調整。 体部外面は若干ハケ整形で、内面は粘土ひもの継ぎ目痕を残す。	胎土 きめ細か。 微量の石粒含む。 色調 淡黄褐色 焼成 普通	T-4・4 SK 6
壺 (虚部)	41	底径 7.4	平底で、ぶ厚い底部から直線的に立ちあがる。	外面縦方向のハケ整形。 内面ナデ。	胎土 ϕ 1~2mmの砂粒含む。 色調 淡黄灰色 焼成 普通	T-4・4 SD 4
高 坏 (受部)	42	口径 15.8	底部と坏部の境に線をなして、直線的に外上方に立ちあがる。 端部は丸く収まる。	内外面共ハケ整形の後、ナデ調整。	胎土 ϕ 0.5~1mmの砂含む。 色調 淡白褐色 焼成 普通	T-4・4 SK 6
高 坏 (受部)	43	口径 16.0	内彎しつつ立ちあがり、口縁でさらに内傾し、端部は丸く収まる。	内外面共厚減が著しく詳細不明であるが口縁内部にナデ調整痕を残す。	胎土 砂っぽい淡赤褐色 色調 不良 焼成	T-4・4 SK 6
高 坏 (脚部)	44	底径 10.9	中空の脚部は内彎しながら降下し、頸部で大きく外方へ開き内端面が接地する。	内外面共厚減が著しく詳細不明。		T-4・4 SK 6
高 坏	45	脚径 13.0	直線的に外方に開く脚部である。 焼成前穿孔四方。	脚部外面はていねいなみがき。 内面頸部ハケ整形。	胎土 石含まずきめ細か。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	T-4・3 SK 4

4. 昭和59年度発掘調査の結果

排水路敷 (T-5、T-6) および切土面 (A区、B区) にトレンチ配置図で示すように、各トレンチを設定し、遺構の検出を試みた。なお、A区 (約5,000㎡) B区 (約2,600㎡) とも工事の計画変更がなされ、遺構が破壊から免がれることになった為、試掘トレンチを設定した部分のみ調査を行った。各トレンチで検出された遺構、遺物は次のとおりである。

(1) 遺 構

イ) A 区

土 壇

SK 1 T-1 北側で検出された1 m×3m以上の溝状の土壇と思われる。深さは30cmを測り、埋土は黒褐色粘質土 (礫多量混) で、埋土中から弥生土器、壺 (No.9、46) が出土している。

SK 2 T-1 はほぼ中央で検出された50cm×90cmの長円形の土壇である。埋土は暗褐色粘質土 (小礫混) で深さは10~15cmを測る。埋土中から小型の鉢が出土している。

SK 3 T-1 南部で検出された不定形の深さ10~15mの浅い落ち込みである。埋土は暗褐色土 (小礫混) で古墳時代前期と思われる土師器片が出土している。

SK4 T-3 南部で検出された深さ30~50cmの落ち込みである。埋土は暗灰色粘土で埋土中から受口状口縁の甕 (No.19) が出土している。

溝

SD 1 T-1 南部で検出された幅約1.5m 深さ20cmの浅い溝跡である。方位はN-35°-Eを示し、埋土は黒褐色粘質土である。埋土から古墳時代の土器片が出土している。

SD 2 T-2 北端で検出された幅75~100cm、深さ30cmの溝跡である。方位はN-14°-Eを示し、埋土は黒褐色粘質土 (砂礫混) である。埋土から古墳時代前期の土器 (No.20、21、34、39) と、木製品が出土している。

SD 3 T-2 はほぼ中央で検出された方位N-11°-Eを示す溝跡である。幅150cm、深さ30~35cmを測り、埋土は茶褐色砂礫、淡茶褐色砂礫の2層が認められた。上層から比較的多量の土器が出土している。(No.3~6、10、13、16、18、26、29、33、35、37、40、41)

SD 4 T-4 南部で検出された幅60~70cm、深さ30~35cmの溝跡である。方位はN-45°-Eを示し、埋土は黒褐色粘質土一層である。埋土から、高杯 (No.22)、小型器台 (No.23、24) が出土している。

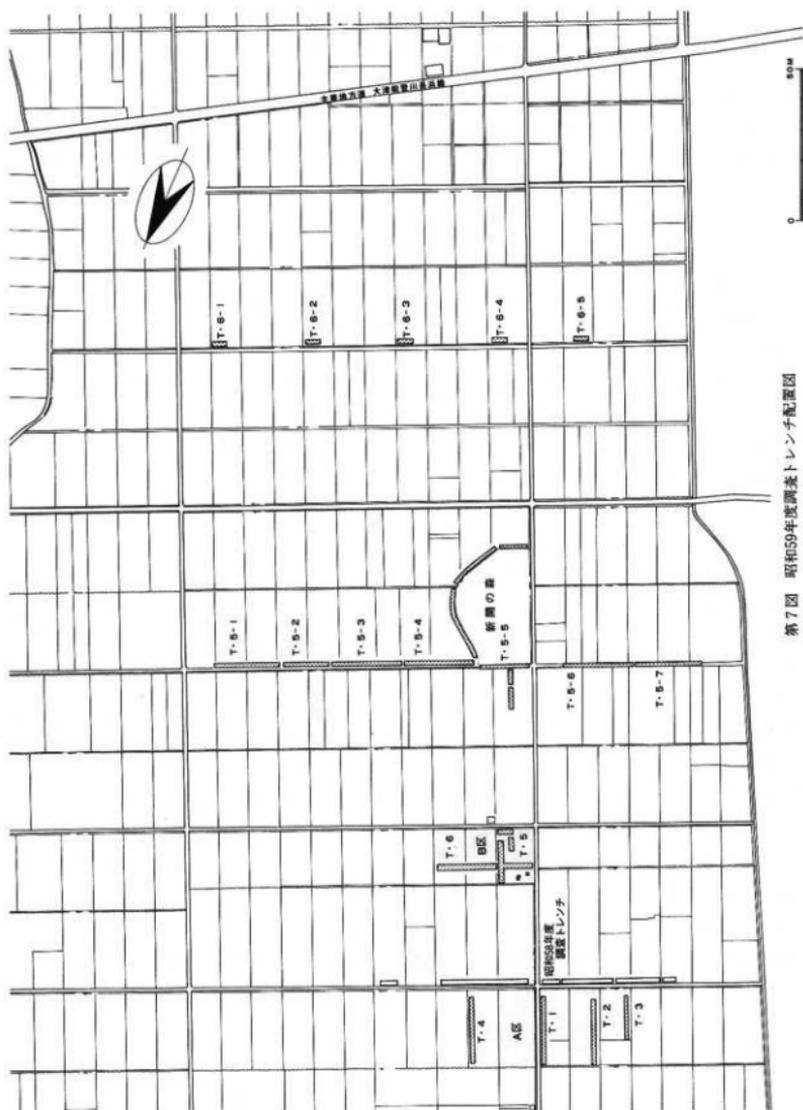
柱穴 各トレンチにおいて掘立柱建物の柱穴と思われるビットが検出されたが、建物としてのまともは確認し得なかった。各柱穴とも埋土は黒褐色系で一部から土器が出土している。

ロ) B 区

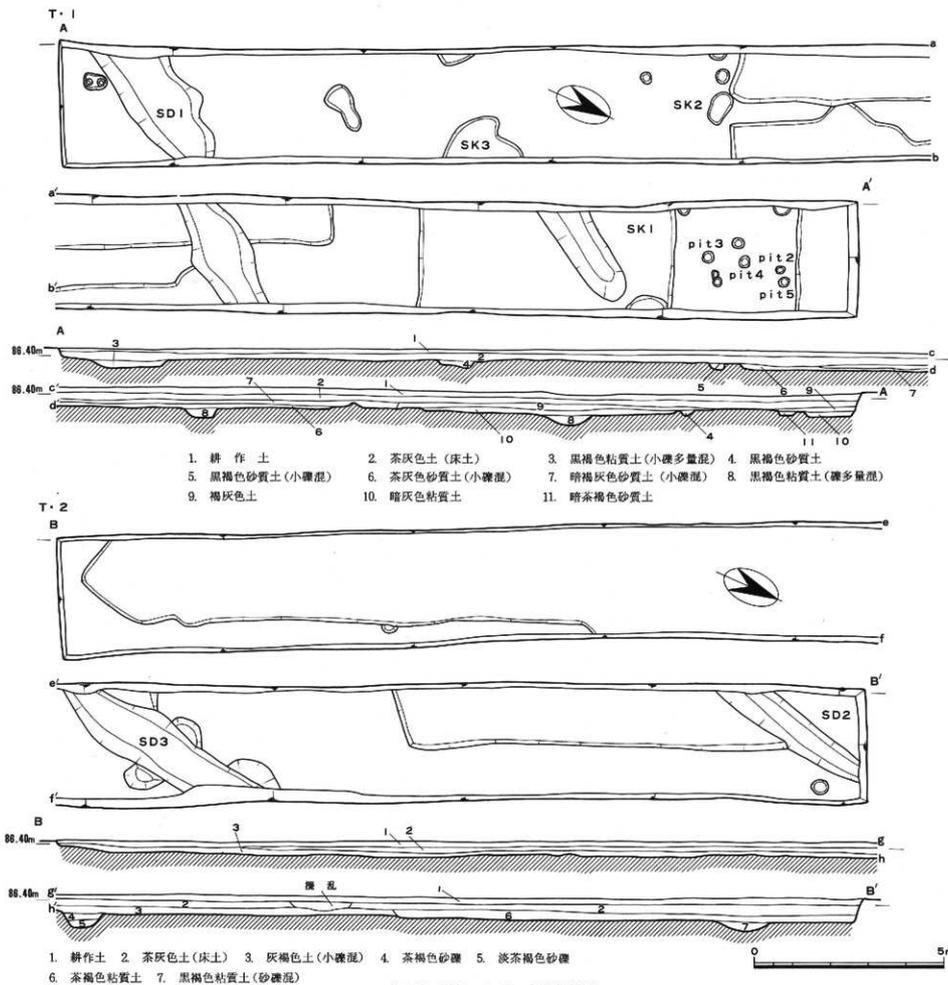
T-5

方形周溝状遺構

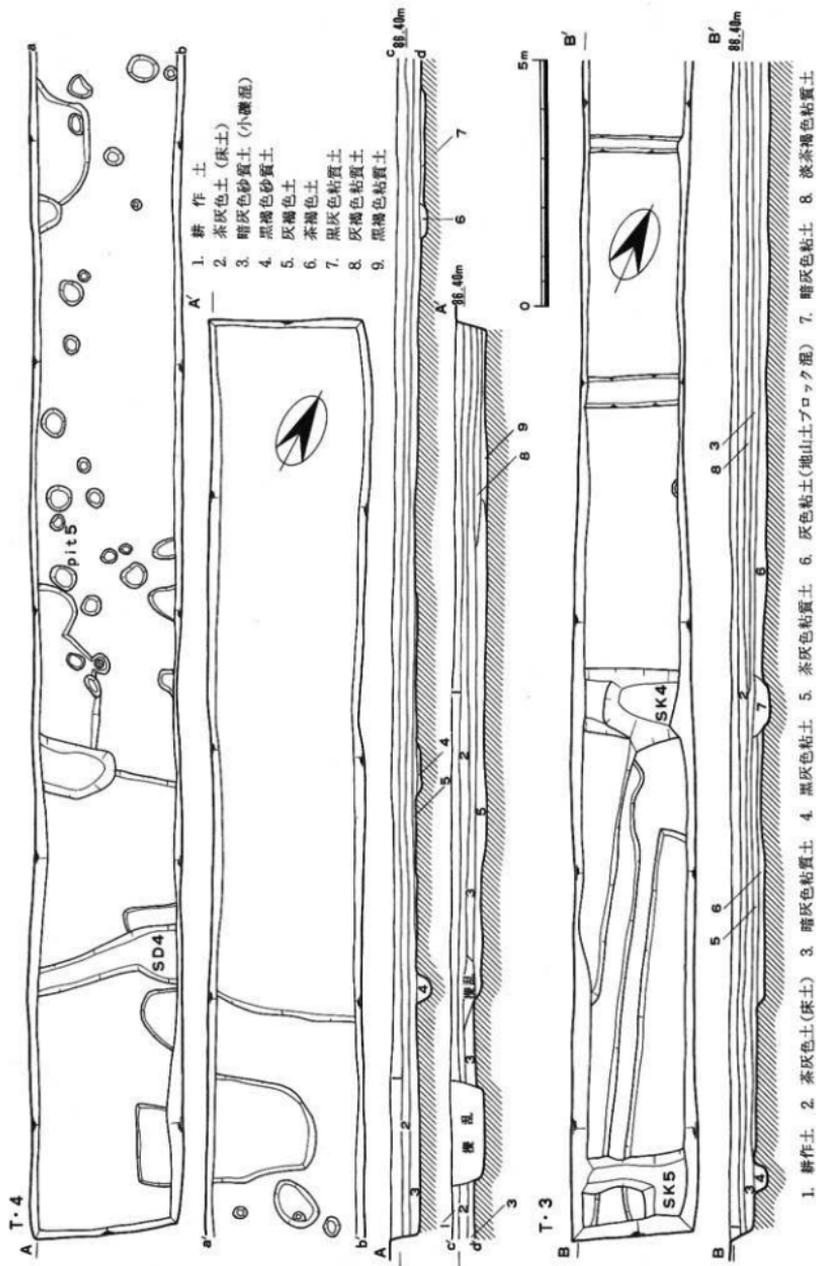
SX 3 T-5 西部で周溝墓のコーナー部と思われるカギ状に曲る溝が検出された。溝幅は南辺で70~90cm、深さは最



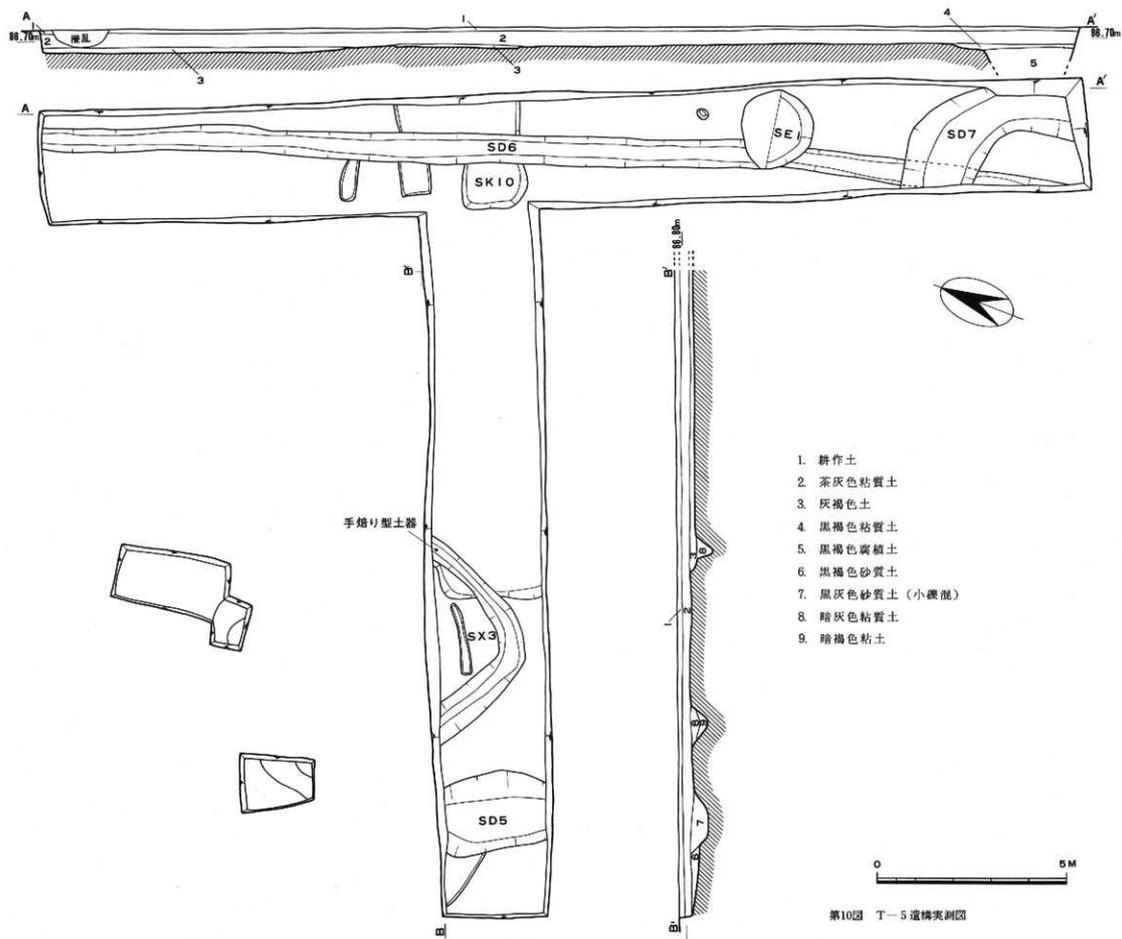
第7図 昭和59年度調査トレンチ配置図



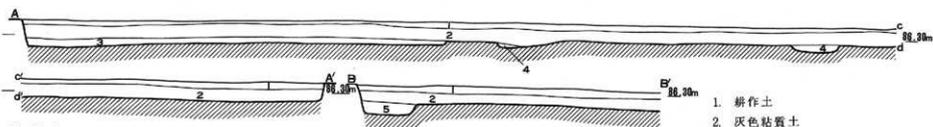
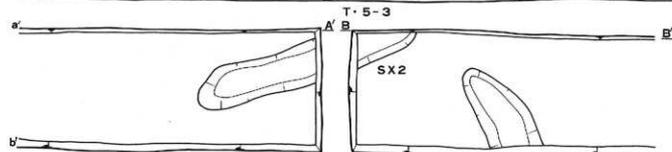
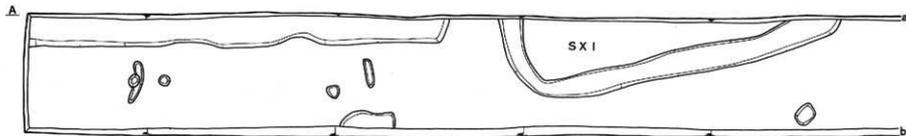
第8圖 A區T-1、T-2遺構平面圖



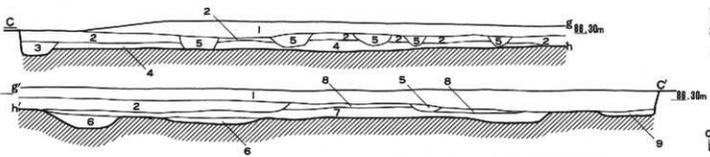
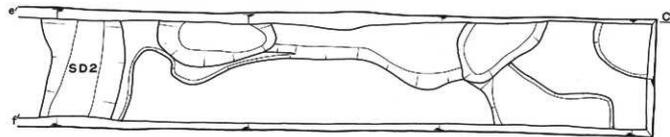
第9図 A区T-3、T-4遺構実測図



T·5-2



T·5-5



1. 耕作土
2. 灰色粘質土
3. 灰褐色土
4. 茶灰色粘土
5. 暗灰色粘質土

1. 淡茶灰色土
2. 淡茶褐色土 (小礫混)
3. 淡灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土 (小礫混)
5. 灰褐色土
6. 黑灰色粘質土
7. 黑灰色粘質土 (小礫多量混)
8. 暗灰色砂礫
9. 黑灰色砂質土



第11圖 T·5·2, 3, 5遺構平面圖

大60cmを測る。検出された東辺の方位はN-25°-Eである。溝は地山の黄褐色粘質土を「」字形に切り込み、埋土は暗灰色粘質土、暗褐色粘土の2層である。東辺溝内より手焙り型土器が溝底より浮いた状態で出土した。また、規模確認の為、トレンチを拡張した結果、北東および南東のコーナー部が検出された。これらより当周溝は、1辺6~7mのほぼ正方形のプランを持ち、陸橋部を持たないタイプと推定される。なお、今回の調査では主体部は検出されていない。

SD 5 T-5西端で検出された幅150~200cm、深さ45cmの溝跡である。方位はN-25°-Wを示し、埋土は黒灰色砂質土である。埋土より古墳時代の土器片が出土している。

SD 6 T-5東部をほぼ南北に直線的に延びる溝跡で幅70cm、深さ10~15cmを測る。埋土は黒灰色土で古墳~中世の土器が出土している。

SD 7 T-5東南部でSD 6に切られる形で検出された。埋土は黒褐色粘質土、黒褐色腐植土の2層が認められた。一部トレンチを拡張して形状の確認を試みたが黒褐色土が一面に広がり、詳細は不明である。溝内より木製鍬(W-1)が出土している。

ハ) 5号排水路敷 (T-5)

方形周溝状遺構

SX 1 T-5・2中央で北辺のみ検出された。幅70cm、深さ20cmを測り、両コーナー部は浅くなる。埋土は茶灰色粘土で遺物の出土はない。方位はW-35°-Sを示す。

SX 2 T-5・2からT-5・3にかけて南東コーナー部が陸橋部の形態をなして検出された。埋土は暗灰褐色粘質土一層で弥生末~古墳初めと思われる土器が出土している。

その他の遺構

各トレンチにおいて、溝、落ち込み等が検出されたが出土遺物はなく、時代等は不明である。

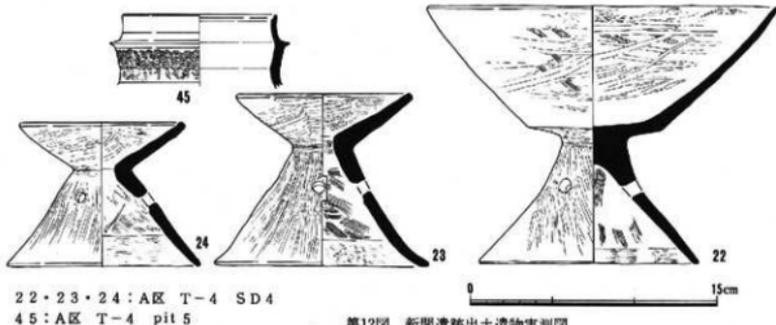
ニ) 「新聞の森」周辺のトレンチ

帆立貝式古墳が想像される「新聞の森」周辺に、排水路が計画された為、トレンチを設けるとともに、北側に周溝等確認の意味でトレンチを設定した。その結果、T-5・5において弥生時代の土器を包含する溝が検出された (SD 2)。その他、直接古墳を示唆する遺構、遺物は検出されなかった。

ホ) 6号排水路敷 (T-6)

3m×10mの試掘トレンチを計5ヶ所設定し、遺構の検出を試みた。

その結果、耕作土 (20cm)、暗灰色粘質土 (40~45cm)、青灰色粘土 (地山)の層位が確認された。また、T-3からT



第12図 新聞遺跡出土遺物実測図

—4にかけて地山が落ち込み暗褐色粘質土が認められた。

遺構、遺物は検出されなかった。

(2) 遺物

i) 土器

弥生土器

(9) 胴部中程よりやや上あたりで最大径をとり、口縁部は大きく外反し、口径とはほぼ同じくらいに広がる。底部は厚い。

口縁端部の上面にさらに粘土を付け足し、深い沈線をめぐらし、へらで刻み目を施す。

頸部から胴部上半にかけて5条の善拙直線文と、3条の波状文を交互にめぐらす。

(10) 底部から大きく開く胴部をもつ壺と思われる。

胴部外面に6条の直線文と波状文を交互に施す。

(11) 外面に稜をなして内弯して立ち上がる口縁で端部に一条の沈線をめぐらす。(9)と同側体と思われる。

SD 2

壺 (20, 21) 内弯した口縁で端部は内方に肥厚し内面に稜線をもつ。

(20)の体部はほぼ球形で、内面をへらで削り器壁は薄い。

外面は目の細かいハケ目の一部残る。口縁部および体部外面に煤が付着し、特に体部下半は火を受けた痕跡が残る。

SD3

壺 短く直立する口縁を持つもの(8)、外方に直線的にのびる口縁を持つもの(3)、「く」の字状に外反した口縁部の端部に外面をもつもの(6)がある。

(6)は西才行遺跡出土 E250に類似している。

壺 「く」の字状口縁を呈するもの(10)と受口状口縁を呈するもの (16, 18) がある。(16, 18)の口縁端部は外側につまみ出されて平坦な面をもつ。

SD 4

高杯(22) 杯部は甘い稜をなして内弯気味に大きく延びる。

円錐形の脚部に焼成前穿孔を3方に施す。杯部内外面および脚部外面ははいねなへら磨きを施す。

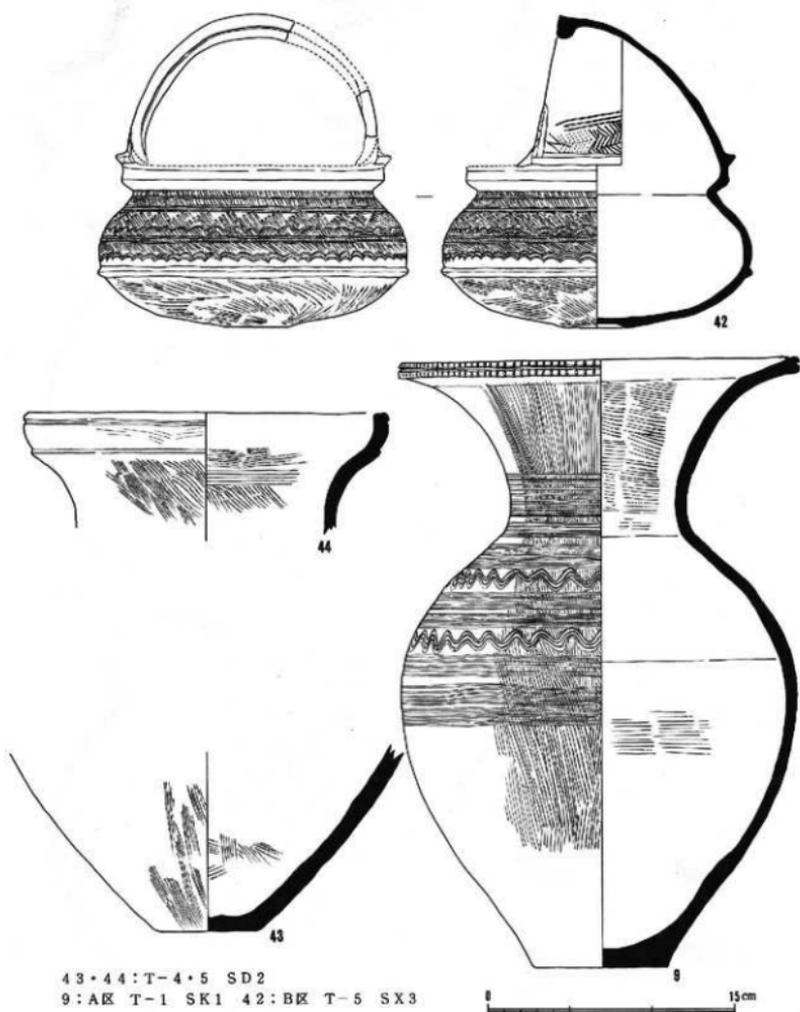
小型器台 (23, 24) とともに受部と脚部の境が中位より上方にあり、焼成前穿孔を(23)は4方、(24)は3方に施す。

SK 4

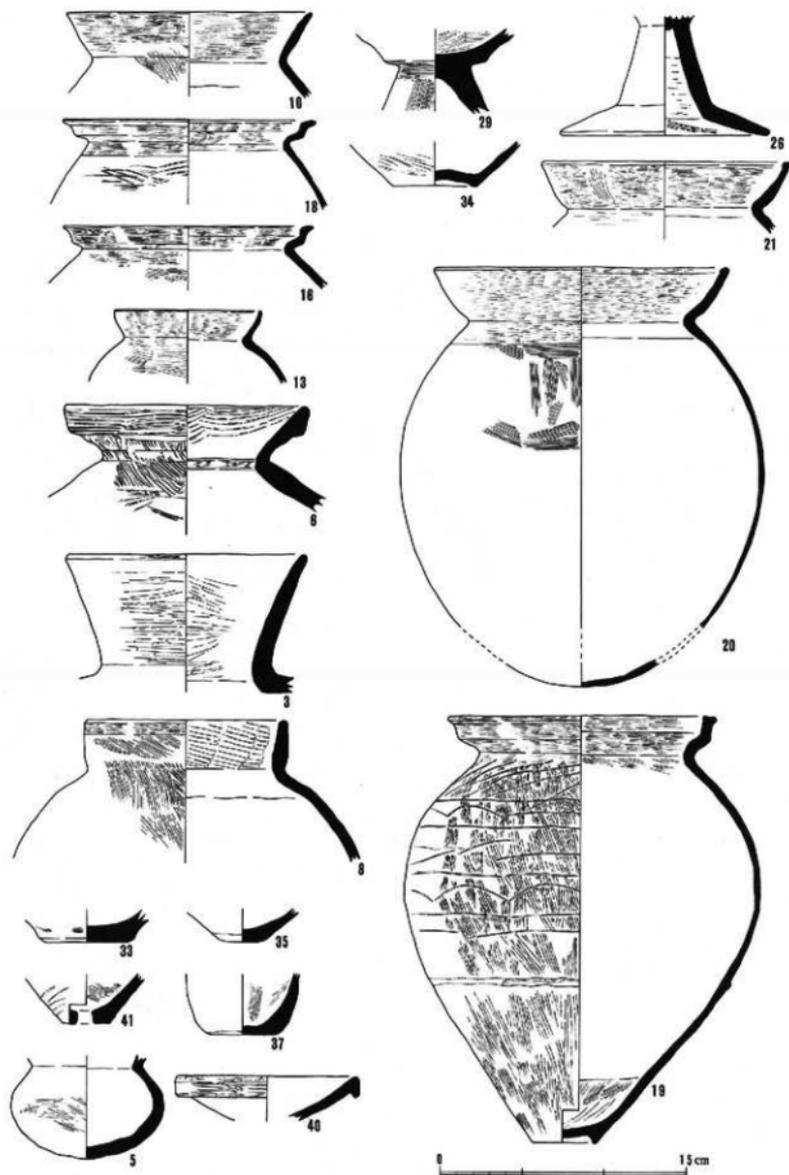
壺(19) 受口状口縁を有する。胴部最大径は中位よりやや上で、底部は上げ底を呈す。体部上半にへら描きによる乱雑な一条の「ノ」字紋、直線紋、波状紋を交互に施す。下半に貼り付け突帯を一条めぐらす。口縁部の施紋はない。

SX 3

手埴り型土器(25) 受口状口縁を呈する扁平な鉢に半球形の覆部をつける。鉢部は中位に一条の貼り付け突帯をめぐらし胴部上半にへらおよびクシによる波状文、列点文、沈線を施す。覆部内面にスス状の炭化物の付着がみられる。

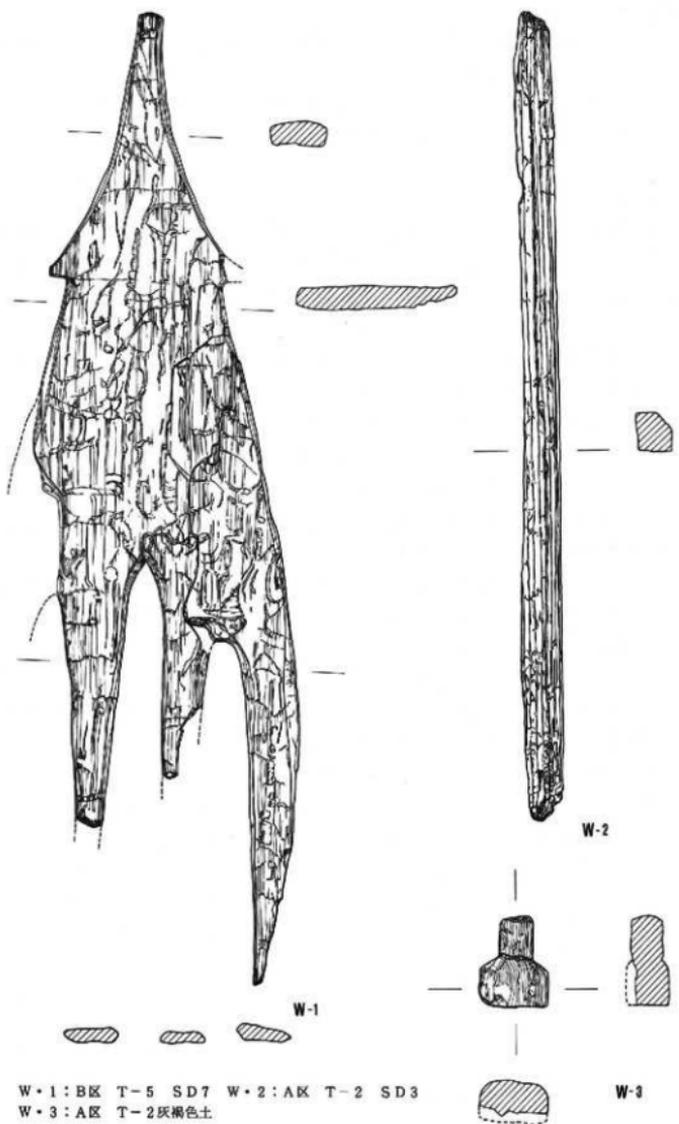


第13図 新聞遺跡出土遺物実測図



3·5·6·8·10·13·16·18·26·29·33·35·37·40·41:AK T-2 SD3
 20·21·34:AK T-2 SD2 19:AK T-3 SK4

第14圖 新開遺跡出土遺物実測図



第15圖 新開遺跡出土遺物実測図

0 15cm

ii) 木器

W-1 刃先の一部を欠損するが三股のなすび形着柄楯の身と思われる。全長59.5cm、刃先の幅は18cm前後と思われる。厚さは1.2~1.5cmで刃先は薄く加工されている。

W-2 全長50cm、1辺2cmのほぼ正方形の断面をもつ棒状木製品である。用途等は不明である。

W-3 全長5.5cm、幅4.2cm、厚さ1.9~2.8cmの木製品である。形状から何かの栓を推定できる。

(3)まとめ

新聞遺跡は前年度の調査で古墳時代前期の集落跡と推定されたが今回の調査では住居跡等直接集跡に関連する遺構は検出されていない。しかし、溝跡等の遺物出土状況から判断して、トレンチを設定した以外の微高地上に集落跡が検出される可能性は高いと思われる。さらにその性格は、農耕具（ナスピ形鍬）の出土と、肥沃な湿地帯の存在などから農耕を営んだ集落を想定できる。

また、今回の調査で弥生時代末期から古墳時代初期と思われる方形周溝状遺構が検出されたが、安土町内における同時代の方形周溝墓は、小中遺跡¹⁴と江頭遺跡¹⁵で数例検出されているのみで、その立地条件等詳細は不明である。今回の調査区域南東部にその墓域の一部を求めることができようが、その範囲等は明らかではない。

一方、A区T-1で検出された土壇（SK 1）から弥生時代中期の上器が出土していることから、当遺跡の有する時代性は当初考えられていた古墳時代前期からさらにさかのぼることが推定される。

以上のように当遺跡は3通りの性格を有することが明らかになったが、それぞれ詳細は不明な点が多い。

最後に、当遺跡の立地する微高地は大字慈恩寺、香之庄を経て、直線的に延びる舌状台地の先端部であると推定されていたが、T-6調査の結果、新聞の森と通称「朝鮮人街道」の間に沼状の低湿地が形成されていたことが推測され、このことから当微高地は近江八幡市浅小井町に広がる台地の一部と思われる。いずれにせよ当新聞遺跡は2ヶ年にわたる調査でその一部が明らかになったにすぎず、今後の周辺調査に期待するところが大きい。

注1 「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」X-5-1 1982 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会

注2 古墳時代後期と推定される円墳が4基確認されている。

注3 「西才行遺跡発掘調査報告書」1983 安土町教育委員会

注4 同注1

注5 昭和58年より調査が行われ、弥生時代中期後半と推定される方形周溝墓が2基検出されている。

新開遺跡 (昭和59年度) 出土遺物観察表

器形	№	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
壺	3	口径 1.4 7	頸部より外方へ直線的に立ち上がる口縁をもつ。端部は丸く収まる。	器内外面共へラウキガキ。	胎土 石英粒含みきめ細か。 色調 暗赤褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	4		頸部より外方へ直線的に立ち上がる口縁をもつ。体部はゆったりと丸味を帯びる。	口縁内外面共ナデ調整。 口頸部内外面及び体部外面ハケ整形。 体部内面ナデ調整。	胎土 $\phi 1 \times 1$ mm大の粒砂含む。 色調 淡褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
小型壺	5	最大直径 9.3	やや扁平な球形の体部で丸底を呈す。	外面は頸部から体部にかけてナデ調整。 体部はハケ調整。 器内面は体部ナデ調整。 底部は指ナデ。	胎土 やや砂質 色調 淡灰色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	6	口径 1.5 0	肩部から「く」の字状に屈曲し、外反しつつ立ち上がる。 口縁端部より下方でいったん稜をもつ。	口縁内外面及び体部外面は目の粗いハケで整形。 体部外面ナデ整形。	胎土 石をほとんど含まずきめ細か。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
壺	8	口径 1.2 3	ゆったり丸味を帯びた体部より、ほぼ直立する厚めの口縁をもつ。 端部は丸く収まる。	外面は口縁部ナデ調整。 口頸部及び体部はハケ整形。 口縁部内面は目の粗いハケ整形。	胎土 石英粒含む。砂っぽい。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
壺	10	口径 1.5 0	「く」の字状口縁で先端部は丸く収まる。	口縁内外面共ナデ調整。 頸部外面にハケ整形。	胎土 砂質、石英粒含む。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
壺	13	口径 9.0	「く」の字状の頸部からやや内湾して立ち上がる口縁をもつ。 端部はわずかに内面に肥厚する。	口縁内外面及び体部内面ナデ調整。 体部外面ハケ整形。	胎土 きめ細か、石粒含む。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	16	口径 1.5 2	「く」の字状の頸部で外面に甘い頸をつくり、立ち上がる受口状口縁で、先端部は外方につまみ出され、平坦面をなす。	口縁内外面共ナデ調整。 体部外面ハケ整形。	胎土 $\phi 1 \sim 2$ mmの石英粒含む。 色調 淡褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	18	口径 1.5 4	口頸部は大きく外反して外面に頸をつくり直線的に立ち上がる口縁をもつ。先端部は大きくつまみ出され平担部をつくり内湾している。	口縁内外面共ナデ調整。 体部外面は乱雑なハケ。	胎土 石英・長石粒含む 色調 淡灰色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	19	口径 1.6 3 底径 3.0 器高 2.6 3	上げ底を呈す底部より外方へ直線的に立ち上がり最大直径は中央よりやや上にある。 「コ」の字状の頸部は外面に頸をつくり、やや上方へ直立した口縁をもつ。端部は外方へつまみ出され平坦面をもつ。	口縁内外面共ナデ調整。 体部外面ハケ整形の後胴部上縁にへう掻きによる乱雑な各々1条のノ字文、直線文、波状文が交互に施されている。 最大直径のやや下位に1条の貼り付実帯、内面は頸部と底部にハケ整形。	胎土 石英・長石粒を多く含む。 色調 淡褐色 焼成 良好	A区 T-3 SK4
壺	20	口径 1.8 0 器高 2.5 8	頸部からゆるやかに内湾しつつ立ち上がる「く」の字状口縁で先端部が内側に肥厚する。体部球形で丸底を呈す。	口縁内外面共ナデ調整。 体部内面ケズリで外面は目の粗いハケ整形であるが摩滅して詳細不明。	胎土 雲母・長石粒含む。 色調 黒灰色 焼成 良好	A区 T-2 SD2
壺	21	口径 1.5 2	口頸部からゆるやかに内湾しつつ立ち上がり、先端部が内側に肥厚する。	口縁内外面共ナデで外面に一部ハケ目を残す。	胎土 砂質・石英粒含む。 色調 淡赤褐色	A区 T-2 SD2

器形	No.	法量 (cm)	形類上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
高 環	22	口径 2.13 器高 1.58	環部は大きくて深く、稜をなして内窩気味で底びる。脚部は円錐形をなしゆるく外反する。脚部に焼成前穿孔を三方に施す。	受部内外面共ハケ整形の淡くガキ。脚部外面ミガキ。内面ハケ整形で脚部はナデ調整。	焼成 普通 胎土 石含まずきめ細か。 色調 淡橙褐色 焼成 良好	A区 T-4 SD4
器 合	23	口径 1.08 器高 1.06	受部と脚部の境が中位より上方にあり環部は直線的に外方へ立ち上がる。脚部は直線的に開いて降下し、裾部でやや外反する。焼成前穿孔を四方に施す。	外面及び受部内面ミガキ。脚部内面ハケ整形。裾部はナデ調整。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	A区 T-4 SD4
器 合	24	口径 1.01 器高 8.8	受部と底部の境が中位より上方にあり、環部は直線的に外方へ立ち上がる。脚部は直線的に開いて降下する。焼成前穿孔を三方に施す。	外面及び受部内面ヘラミガキ。脚部内面はハケ整形で裾部はナデ調整。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 淡橙灰色 焼成 良好	A区 T-4 SD4
高 環	26		中空の脚柱部は直線的に外方へ降下し、裾部で大きく開く。	内面は脚部へラ削りで裾部ハケ整形。外面は磨滅が著しく詳細不明。	胎土 やや砂質 色調 淡橙灰色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
高 環	29		中空の脚柱部で、底部と環部の境に稜をなして立ち上がる。	受部内面及び脚部外面ミガキ。	胎土 径1~2mm大の砂粒含む。 色調 淡灰褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD3
(底部)	33	底径 5.0	平底を呈す。	外面ハケ整形。	胎土 石粒多く含む。 色調 暗灰色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺 (底部)	34	底径 4.6	上げ底を呈し、直線的に外方に立ち上がる。	外面ハケ整形。内面未調整。	胎土 やや砂質 色調 淡灰褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD2
壺 (底部)	35	底径 2.0	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	内面ナデ整形。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 淡灰色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
手づくね	37	底径 4.0	平底を呈し、内凹しつつ立ち上がる。	外面未調整。内面ハケ整形。	胎土 砂含まず緻密 色調 淡赤褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
器 台 (口縁)	39	口径 17.9	垂下し、外面に幅の広い平担面をもつ。	内外面共ミガキ。垂下口縁部は4~5条の深い沈線に棒状文を施す。	胎土 きめ細か。 色調 淡橙褐色 焼成 普通	A区 T-2 SD2
器 合	40	口径 11.2	環部はゆるやかに内窩しつつ立ち上がり、口縁部は垂下し、外面に幅の広い平担面をつくる。	受部内外面共ミガキ。垂下した口縁部は横方向のハケ。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 淡灰褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
甌	41	底径 3.0	平底を呈し、外方へ直線的に立ち上がる。底部焼成前穿孔。	内外面共ハケ整形。	胎土 砂含まずきめ細か。 色調 (内) 紫色 (外) 淡灰褐色 焼成 良好	A区 T-2 SD3
壺	9	口径 2.45 底径 8.3 器高 37.5	平底を呈し、底部よりやや外反気味に立ち上がる。脚部は中位よりやや上に最大径をもつ。頸部より外反して延びる口縁をもつ。	口縁端部に一条の深い沈線と刻み目を施す。外面は縦方向のハケ整形の後、5条を一単位とする帯掛き直線文と3条の帯掛き波状文を交互に施す。内面は脚部上半と口	胎土 径1~3mmの砂粒を含む。 色調 淡橙褐色 焼成 良好	A区 T-1 SK1

器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構
手焙	42	器高 19.1 底径 3.9	受口状口縁をもつ鉢形土器に半球形の覆部を覆い付け、覆部、開口部の内側を大きく肥厚する。	縁はナデ調整で口頸部及び胴部下半はハケ整形。鉢部外面はハケ整形で胴部の中位よりやや下方に貼り付け突帯を施し、胴部上半に、上よりヘラによる1条、クシによる3条の直線文と5条の列点文、さらに2条のクシによる直線文、波状文を施す。内面は胴部下半部ハケ整形。上半部はナデ整形。覆部は鉢部との境に貼り付け突帯を施し、内外面共ナデ調整。施文は外面下半にヘラによる3条の沈線とアヤ形文を施す。	胎土 やや粗い砂粒含む。 色調 淡白黄色 焼成 やや甘い	B区 T-5 S X 3
壺	43	底径 6.2	平底を呈し、ゆるやかに内湾しつつ立ち上がる。	内外面共ハケ整形。	胎土 石英、長石粒含む。 色調 淡橙褐色 焼成 良好	T-4・5 SD 2
壺	44	口径 2.22	直立した頸部より外反し口縁部で内湾しつつ立ち上がる。	口頸部内外面共ハケ整形。口縁部は外面ハケ整形の後、内外共ナデ整形。口縁部外面上2条の沈線を施す。 No 43と同一個体か。	胎土 石英、長石粒含む。 色調 淡橙褐色 焼成 良好	T-4・5 SD 2



1. T-2調査前 (東から)



2. T2調査風景



1. T-2・2 (東から)



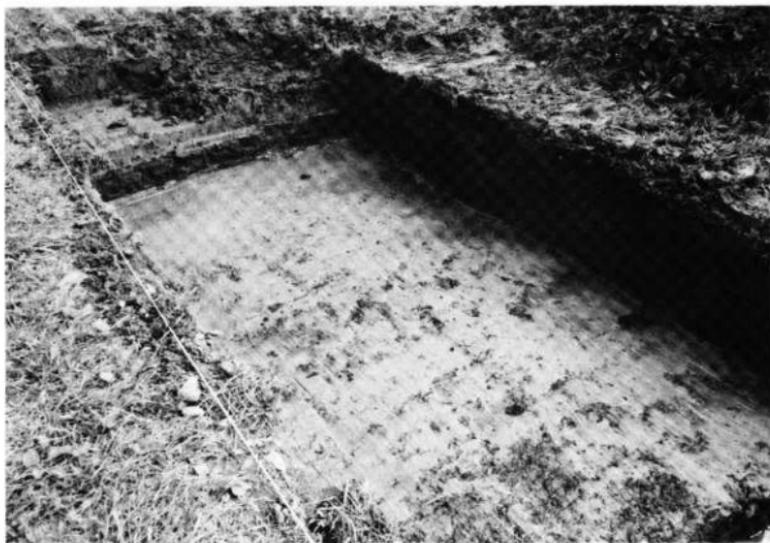
2. T-2・5 (西から)



1. T-3調査前 (東から)



2. T-3・2 (東から)



1. T-4・1 (西から)



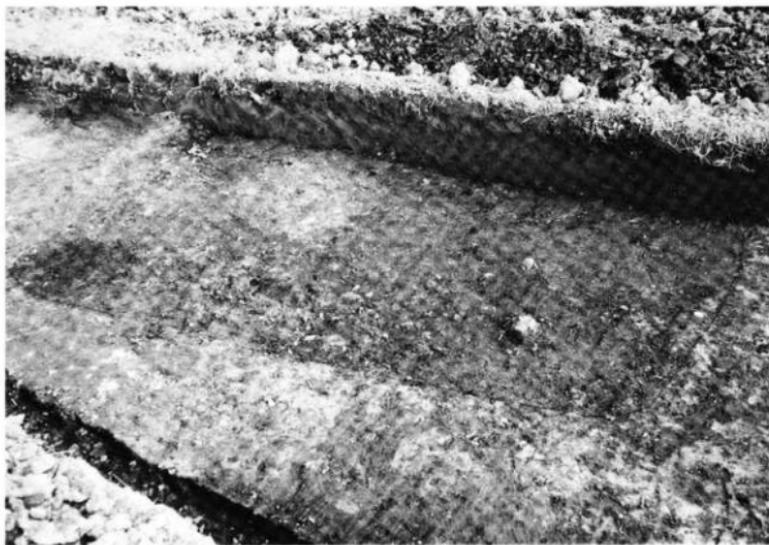
2. T-4・2 (東から)



1. T-4・2 SB1 (東から)



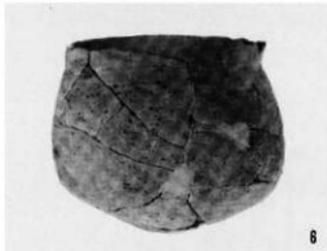
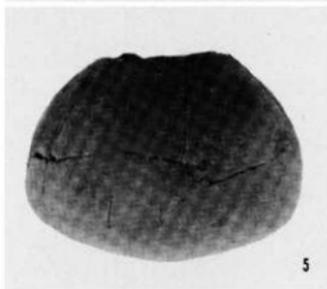
2. T-4・2 SK3 遺物出土状況

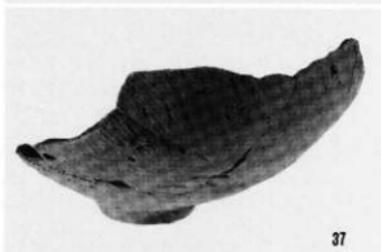
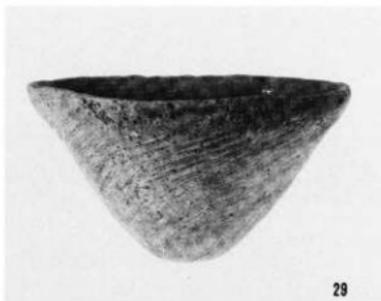


1. T-4-4 住居跡検出状況



2. T-4-4 (東から)



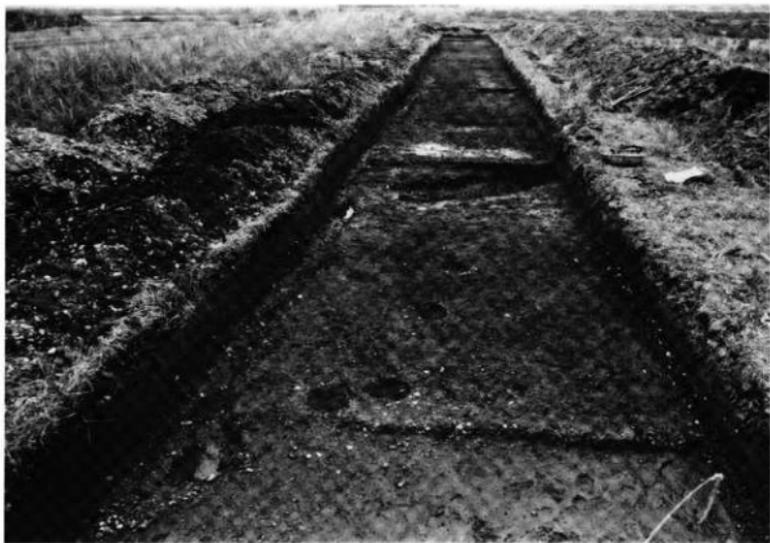




1. 調査前遠景（東から）



2. T-6 調査風景



1. A区 T-1 (北から)



2. A区 T-2 SD3 (北から)



1. A区 T-2 (南から)



2. A区 T-2 SD2遺物出土状況



1. A区 T-4 SD4 遺物出土状況



2. A区 T-4 (南から)



1. B区 T-5 SX3 (北から)



2. B区 T-5 (南から)



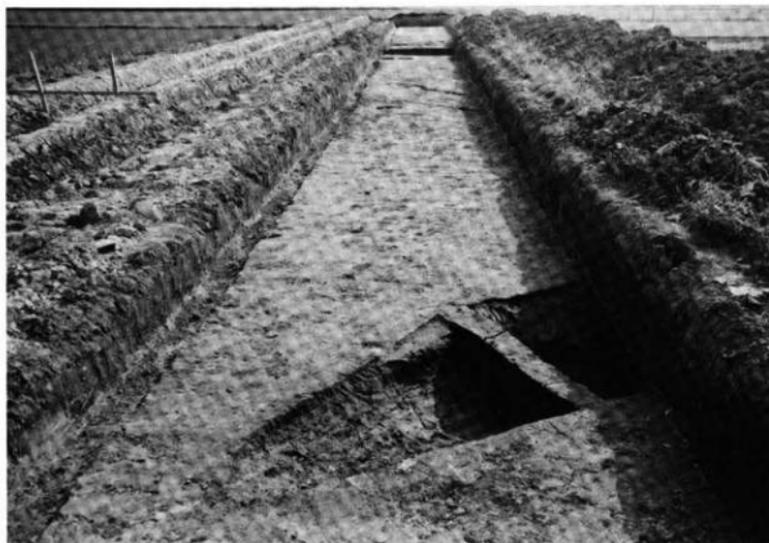
1, B区 T-5 SX3南西コーナー



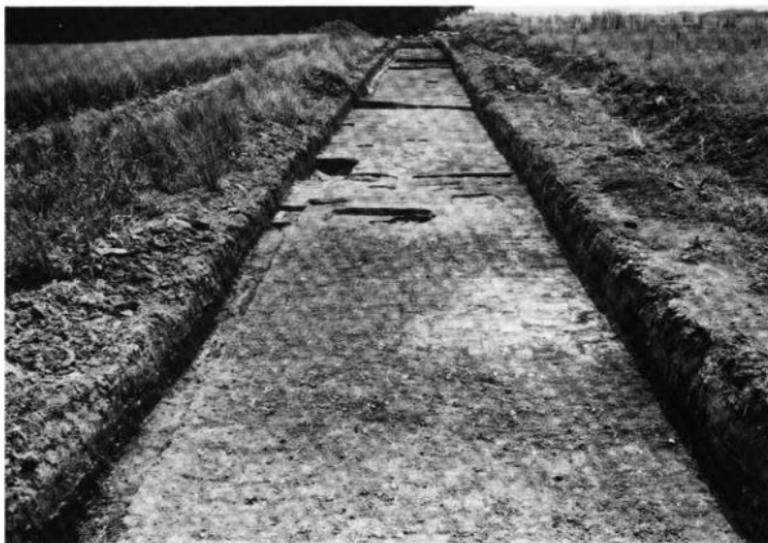
2, B区 T-5 SD7木器出土状況



1. T-5・2 (東から)



2. T-5・3 (西から)



1. T-5-4 (西から)



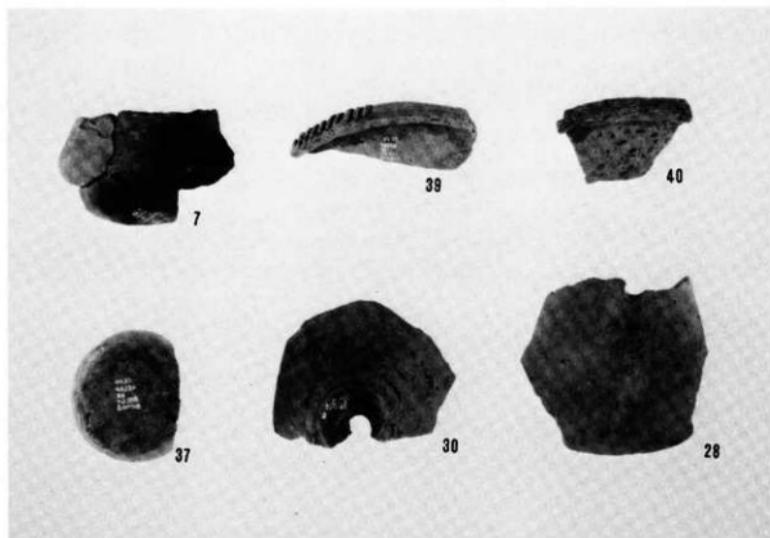
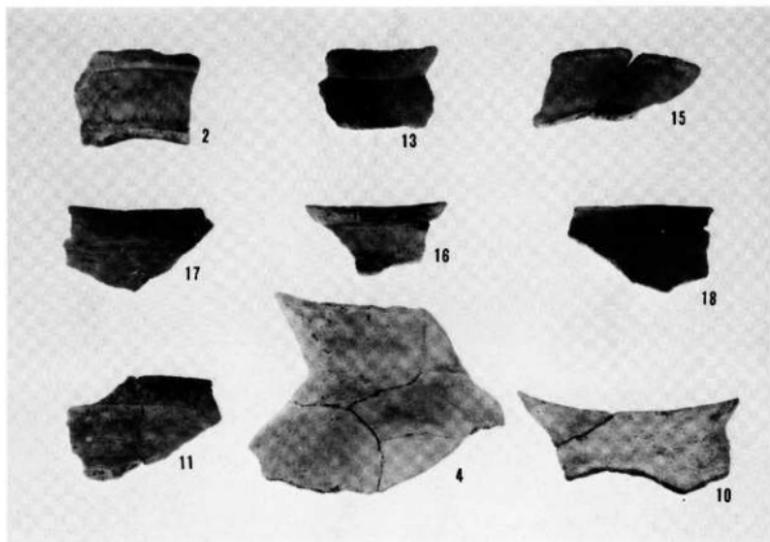
2. T-5-5 (東から)

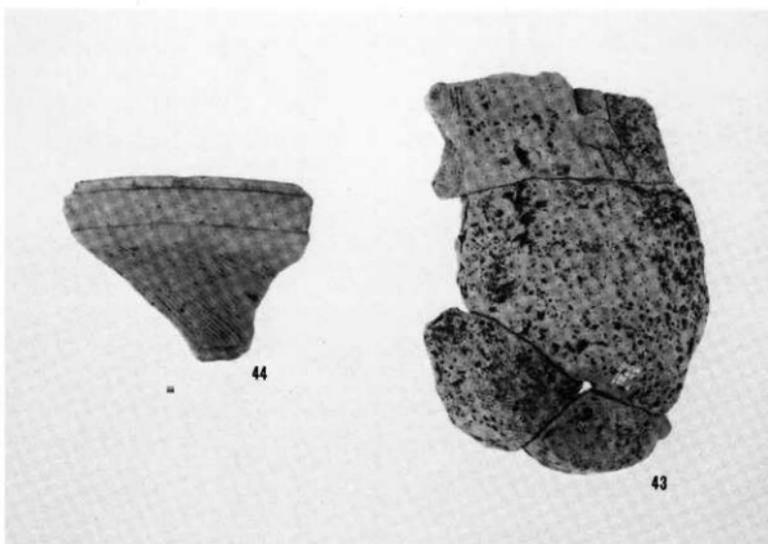
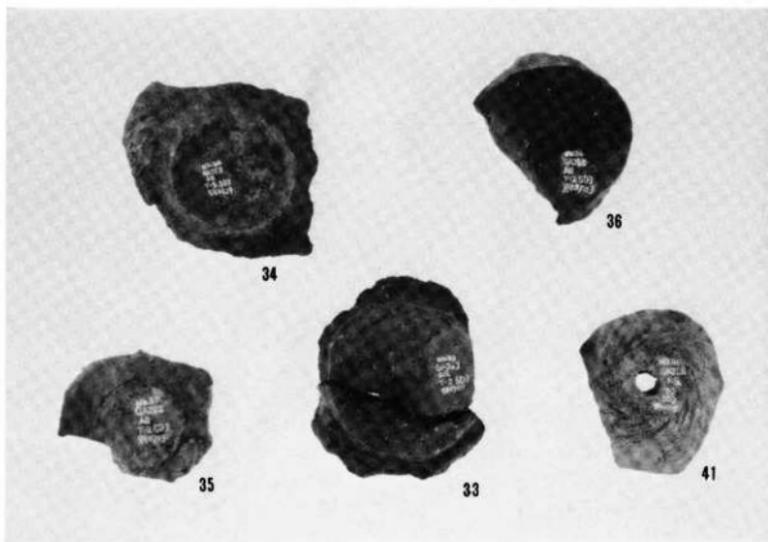


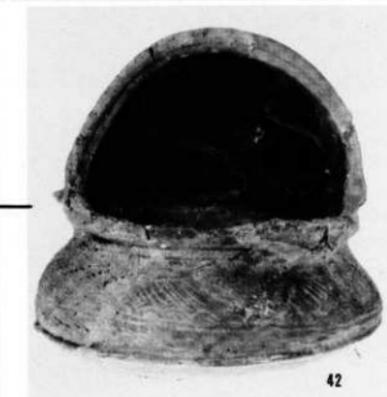
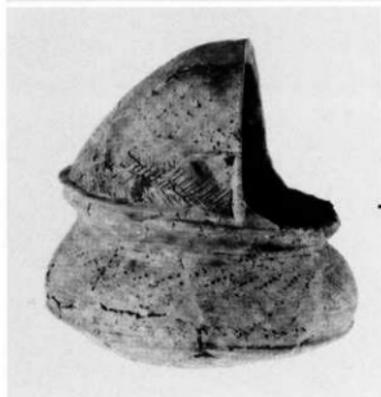
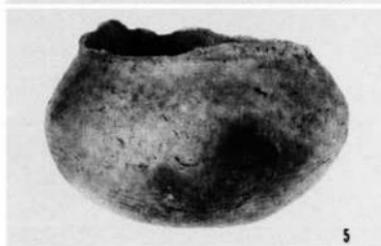
1. T-6・3 (東から)

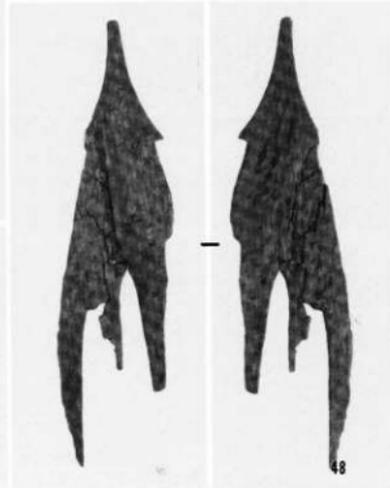
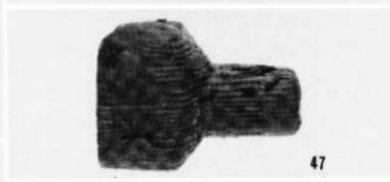


2. T-6・5 (西から)









II 近江八幡市金剛寺遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和59年度県営は場整備事業（近江八幡金田地区金剛寺・西ノ庄工区）に伴う近江八幡市金剛寺遺跡の発掘調査にかかるものである。

金剛寺遺跡は、佐々木六角氏の居館跡である金剛寺城跡を中心に、近江八幡市教育委員会の分布調査で、飛鳥時代から室町時代にかけての遺物の散布が確認されていた。ここに県営は場整備事業が実施されるにあたって、事前に発掘調査を行い、遺構の保護策を講じることとした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（6,740,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀文化財保護協会が実施した。

発掘調査にかかる体制は次のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 主査田中勝弘 技師葛野泰樹 技師田路正幸

調査担当 同上 田路正幸

調査補助員 轟浩司 奥田浩人 井田泰弘 小杉昌史 岡治博之 和気康之 出路清久 福本光宏 西壁博
沢村栄治 山本智子 前川幸子 山田晶子 松井和代

調査にあたっては、近江八幡市教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課・同八日市県事務所土地改良第二課・近江八幡市土地改良課・同市金剛寺町、西ノ庄町地区・同土地改良区・同市千僧供村・杉ノ森町の方々に多くの協力を仰いだ。また、近江八幡市教育委員会技師岩崎直也氏、同嘱託篠宮正氏、近江文化財研究所の諸氏には調査の全般にわたって多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆・編集には田路があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

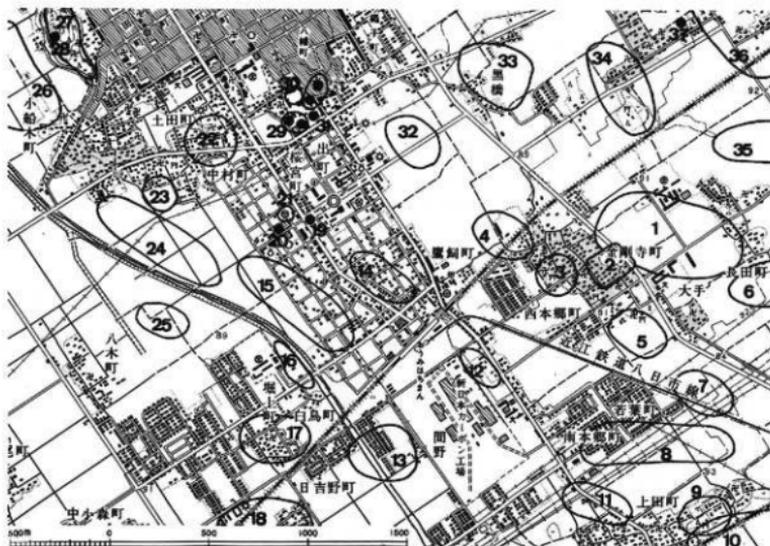
SB：掘立柱建物 SD：溝状遺構 SK：土壇状遺構 SE：井戸状遺構 SR：自然流路

数字の上二桁はトレンチ番号を表す。

2. 位置と環境（第1図）

金剛寺遺跡は、近江八幡市金剛寺町から杉ノ森町にかけて所在する。金剛寺町は、近江八幡市の東部に位置し、標高は概ね90～91mを測る。北流して西ノ湖に注ぐ、黒橋川と東方の蛇砂川にはさまれた地点にあたる。遺跡はその微高地に営まれたものと思われるが、国鉄東海道線付近より北側は、現在でも溜田が西ノ湖まで広がっている。

金剛寺遺跡周辺の縄文時代の様相についてはいまだ明らかにされていないが、弥生時代に入ると東方の鷹飼遺跡・出町遺跡・森ノ前遺跡等で集落が営まれたものと思われる。



第1図 金剛寺遺跡位置図および周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|--------------|------------|-------------|------------|----------------|
| 1. 金剛寺遺跡 | 2. 金剛寺城遺跡 | 3. 九里氏館遺跡 | 4. 里ノ内遺跡 | 5. 宮ノ後遺跡 |
| 6. 大手前北遺跡(仮) | 7. 西海道遺跡 | 8. 藤ノ町遺跡 | 9. 上田氏館遺跡 | 10. 柿木原遺跡 |
| 11. 賽敷遺跡 | 12. 金懸遺跡 | 13. 間野遺跡 | 14. 鹿飼遺跡 | 15. 東田遺跡 |
| 16. 森ノ前遺跡 | 17. 堀上遺跡 | 18. 日吉野遺跡 | 19. セツ塚古墳 | 20. 長塚古墳 |
| 21. ツバナ山遺跡 | 22. 宇津呂館遺跡 | 23. 土田遺跡 | 24. 北田遺跡 | 25. 南田遺跡 |
| 26. スデラ遺跡 | 27. 成就寺遺跡 | 28. 日杉山祭祀遺跡 | 29. 東漸寺古墳群 | 30. 八幡幼稚園遺跡(仮) |
| 31. 一里塚古墳 | 32. 出町遺跡 | 33. 黒橋遺跡 | 34. 八甲遺跡 | 35. 北ノ森遺跡 |
| 36. 高木遺跡 | 37. 西床古墳 | | | |

古墳時代には、現在の市役所周辺に、セツ塚古墳・長塚古墳・東漸寺古墳群などが営まれている。現在は市街化が進んでいるが、もとは一古墳群を成していたものであろう。

遺跡周辺は旧蒲生郡金田村に属し、古代においては、付近に蒲生郡藤原郷・藤田郷が、中世には佐々木荘が置かれた地域である。遺跡の東辺部に位置する金剛寺城は、現八日市市小臨町に本拠を置いていた佐々木六角氏の二代頼綱が、この地に金田別館を設けたことにはじまる。頼綱晩年の14世紀初頭前後のこととされる。さらに、1346年(正平7・文和元年)には佐々木六角五代氏頼が、館周辺の地に金剛寺を建立している。町名の由来である。1469年(文明元年)に一度、館・寺は焼失しているが、1486年(文明18年)には金剛寺が再興され、その後戦火の拡大とともに、層層は城郭としての性格を強めたものと思われるが、やがては佐々木六角氏の滅亡により、金剛寺城も衰退していったものであろう。現在も、周辺に「大手」などの城に因む字名が残っているが、城の中心部分は、現在の金剛寺町の集落に重なるものと思われる。

3. 調査経過

今年度の調査地点は、遺跡の東半部にあたり、金田小学校の東側、及び県立八幡工業高校の南側の排水路敷と一部切土部分に1～10トレンチを設けた。は場整備事業は、県道下豊浦金剛寺線より南が夏季施行、北が冬季施行であったため、発掘調査も二期に分けて実施した。I期(1～8トレンチ)は、昭和59年6月12日から8月11日まで、II期(9～10トレンチ)は、昭和59年10月11日から11月10日までである。I期・II期ともに、国鉄東海道線に平行、直交する排水路敷に遺構確認のための試掘トレンチを設定したが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、本報告では経過を割愛する。

金剛寺遺跡の西半部では、昭和58年度に県営は場整備・灌漑排水事業に伴う発掘調査が行われており、平安時代から室町時代にかけての遺構が確認されていたために、今年度の調査では、当初より全面発掘を行なうことにした。調査は、1トレンチから順次、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業などを行なった。

1～8トレンチにおいては、遺構面は比較的深い位置にあり、現地面下40cm～50cmの砂礫層もしくは、黄褐色粘質土層であった。9・10トレンチでは、耕土直下で同じく黄褐色粘質土の遺構面を検出した。遺構面はいずれも一面のみである。

トレンチはいずれも幅3mであるが、4トレンチにおいて、規模の大きい土坑状遺構を検出したために、一部拡張を行った。また、6・9・10トレンチなどで、自然流路跡を検出したが、いずれも遺物の包含は認められないため、施行後の支障を考慮して断ち割りを行なうこととした。



第2図 調査トレンチ配置図

4. 検出遺構

(1) 1期

第1トレンチ(第3図) 基本層序は第1層耕土、以下床土・暗茶褐色砂質土である。遺構面は砂礫層で、標高93.5m前後を測る。ここでは井戸状遺構、自然流路跡を検出した。

SB0101(第8図)は、径1.4mの円形を呈し、深さ85cmを測る。埋土は第1層暗茶褐色粘性砂質土、第2層暗青灰色粘質土で、第3層は第2層の土に礫が混入する。第3層の上面で、長さ30~50cm、幅5~7cm前後の木片を検出した。井戸枠等に使用されたものかどうかは不明である。時期も明確にしない。

第2トレンチ(第4図) 基本層序は第1層耕土、第2層床土、第3層暗茶褐色粘性砂質土で、遺構面は、93.8~9mを測る。SD0201は、幅0.5~1m、長さ23.5m以上、深さは40cm前後である。溝内より須恵器坏身(8・9)などが出土している。SD0202は01に平行する幅40cm前後、深さ20cmを測る溝である。SD0203は01の続きと思われる。SK0201は、トレンチ東端で検出した。北半はSD0203に切られている。須恵器の壺片(10)が出土している。

第4トレンチ(第6図) 基本層序は第1層耕土、第2層床土、第3層茶黒褐色砂性粘質土で、遺構面は黄褐色粘質土、標高は94.2~3mを測る。ここでは、掘立柱建物3棟、溝状遺構5条、土壇状遺構4基以上を検出した。

SB0401(第9図)は、3棟の掘立柱建物のうち、最も西に位置するものである。東西2間、南北1間以上の南北棟で方位はN-15°-Wを示す。

柱間距離は東西列で2.0mと1.9m、南北で1.5mを測る。柱穴は60cm前後の円形で、深さは20~35cmである。柱径は、径30cmを測る。

SB0402は、01の東約11mに位置する。東西2間、南北2間以上を検出した。N-12°-Wを示す南北棟であろう。柱間距離は、東西が1.6mと1.7m、南北は西辺、東辺ともに1.6mである。柱穴は、円形と方形に近いものがあり、径50~70cm、深さ25cmを測る。柱径は、径15~20cmである。

SB0403は、02の東約12mに位置する。東西2間分を検出したのみであるが、SB0401・02と同様、南にのびる建物であると思われる。柱間距離は、2.1mを測る。柱穴は45×60cmの隅丸方形のものと、径45~50cmの円形のものとがあり、深さは35cm前後である。柱径は径20cmを測る。

いずれの建物も柱穴からの遺物の出土はない。

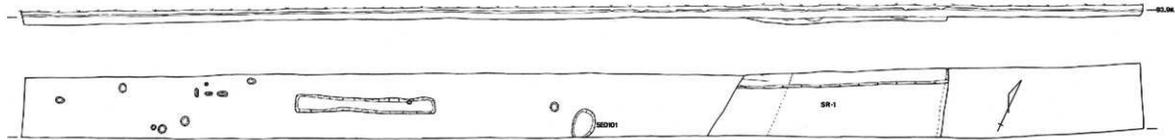
SD0401(第10図)は、トレンチの中央付近、拡張部の東端で検出した幅2m、深さ20cm前後の溝である。方位はほぼ南北を示している。SB0401との距離は約12mである。溝の南部より、須恵器坏蓋(1, 2)などが出土している。

SK0401は、拡張部で検出した径4.5mの不整形の土壇である。深さは中央部で30cmを測るが、北端はさらに落ち込みSK0403となる。土師器甕(11)が出土している。

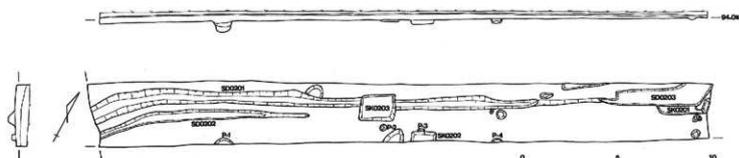
SK0402は、01に大きく切られているが南4.5m、東西5.3mを測る。東辺等の形状より竪穴住居跡の可能性も考えられるが確証は欠く。須恵器坏蓋(6)が出土している。

第6トレンチ(第11図) 掘立柱建物1棟、溝状遺構7条、自然流路跡、土壇状遺構などを検出した。基本層序は第1層耕土、第2層茶黒褐色砂質土で、遺構面は標高93.2~4mを測る。

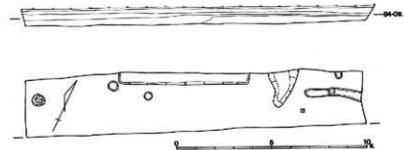
SB0601(第13図)は、東西2間、南北1間以上の南北棟である。方位はN-42°-Wを示す。柱間距離は、東西列で、1.7と1.9m、東西で1.7と1.85mを測る。柱穴は径35~40cm、深さは30cm前後である。



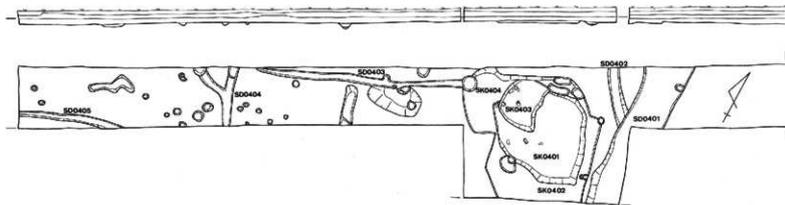
第3図 第1トレンチ遺構配置図



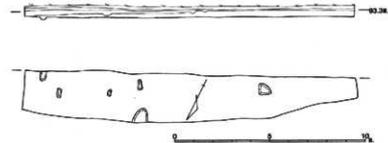
第4図 第2トレンチ遺構配置図



第5図 第3トレンチ遺構配置図



第6図 第4トレンチ遺構配置図



第7図 第5トレンチ遺構配置図

SD0602～07は、SR・2の西側で検出したトレンチに直交する溝である。幅は狭いもので04・05の20cm、広いもので06・07の1.3mである。05以外は、平行しており、同時期のものと考えられる。出土遺物より平安時代から鎌倉時代に属するものと思われる。

SR・2は、深さ1.1mを測る自然流路跡と考えられる落ち込みである。埋土は上層から茶黒褐色粘質土、黒褐色粘質土、暗青灰色粘質土である。東層は明確ではないが、第7トレンチSD0701付近で、終るものと考えられる。

第7トレンチ(第12図) SR・2の続きと思われる落ち込みと、溝1条、土壇2基を検出した。いずれからも遺物の出土はない。

第8トレンチ(第14図) 切土面に設定した長方形のトレンチである。現状は畑地で、耕土下に淡灰褐色砂質土が堆積する。遺構面は礫層で標高93.9mを測る。溝状遺構2条以上、土壇状遺構は、遺物の出土を見たものだけで16基、その他大小多くのピットを検出した。このうち主要なものは次のとおりである。

SK0801は、2.5×3.3mの方形を呈する。陶器の底部(26)が出土している。SK0802は、1.7×3.6mの長方形の土壇である。深さは50cm前後を測る。井戸もしくは、貯水用の土壇か考えられる。

これら大小の土壇の性格は不明であるが、なかには土壇墓であった可能性をもつものもあると思われる。出土遺物はSK0802のものを除けば室町時代を中心にしたものが多い。

(2) II期

第9トレンチ(第15図) 基本層序は第1層耕土、第2層暗灰色粘質土であり、遺構面は黄褐色粘質土、標高は91.8～9mを測る。

SD0901は、幅50cm、深80cm前後を測る東西溝である。遺物の出土はない。その他の溝は、現状の水路、および耕作にともなうものである。

SE0901(第16図)は、東西2.6m、南北3m以上を測る楕円形の井戸である。深さは1.4mで、上層には暗茶褐色砂性粘質土、下層には淡黒褐色粘質土が堆積する。第5層暗青灰色粘質土にいたったところで湧水した。上層より黒色土器(21、22)、土師器(12～15)、下層より黒色土器(18～20)、土師器(16)が出土している。

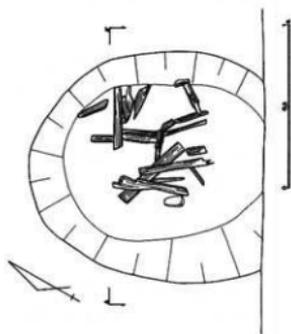
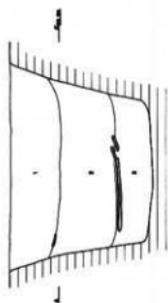
SE0902(第17図)は、01の東約10mで検出された径1.4mの円形の井戸である。北半のみ検出した。深さは約1.3mで上層に暗茶褐色砂質土、茶黒褐色砂性粘質土が、下層には黒褐色、黒灰色粘質土が堆積している。第5層にいたって湧水した。第4層と第5層の間で、径20cmの曲物の底部を検出した。曲物の上には、20cm程の石が、置かれたか投げ込まれたかしており、曲物はこの石によって押し潰された状態であった。井戸内からの他の出土遺物はない。

第10トレンチ(第18図) 耕土直下で遺構面を検出した。標高は92m前後を測る。SD1001は、幅50cm深さ40cmを測る東西溝である。SR・4は、幅16m深さ50cmを測り、自然流路であったと考えられる。いずれも遺物の出土はない。その他の溝・土壇は、耕作によるものか、あるいは攪乱域である。

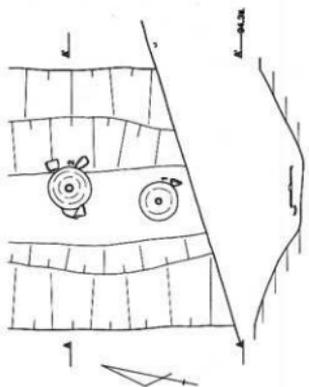
1. 暗茶褐色粘性砂質土

2. 暗青灰色粘質土

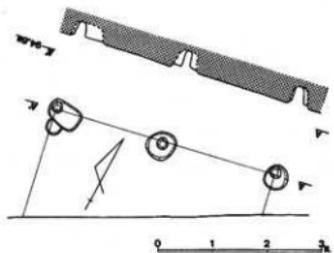
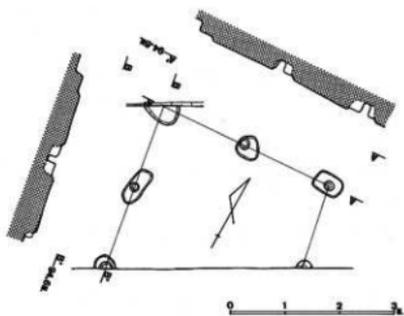
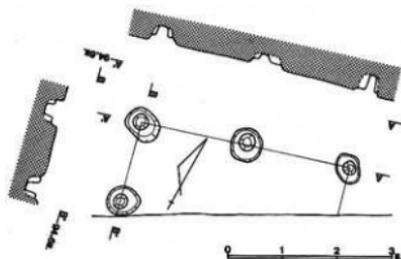
3. (雜混入)



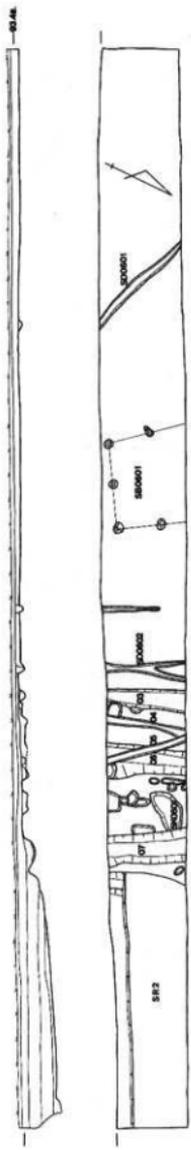
第8図 第1トレンチSE0101実測図



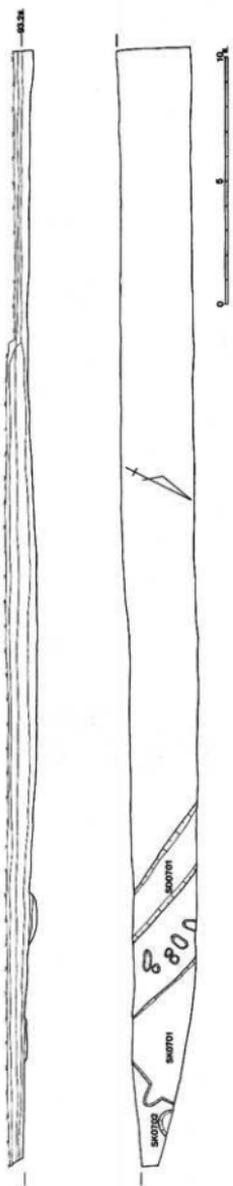
第10図 第4トレンチSD0401実測図



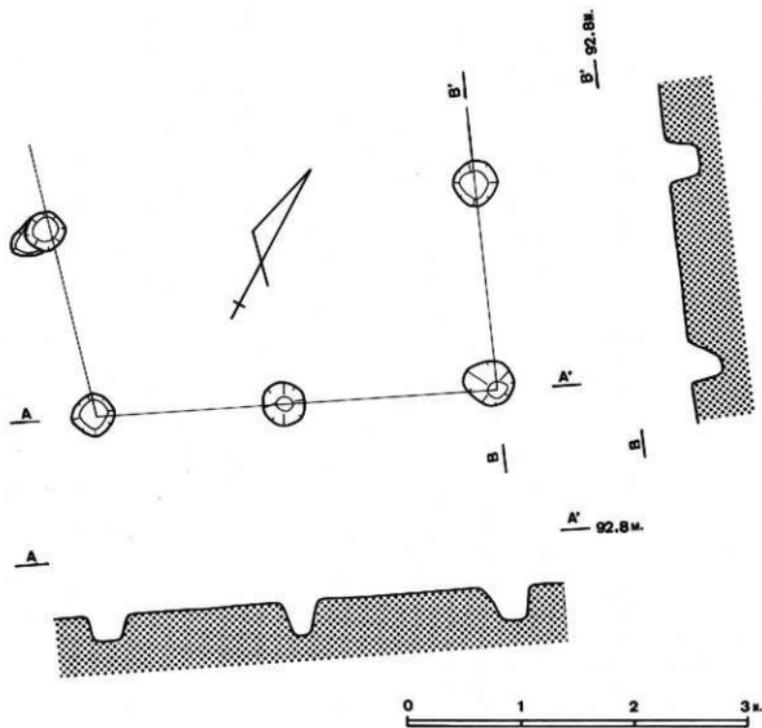
第9図 第4トレンチSB0401~03実測図



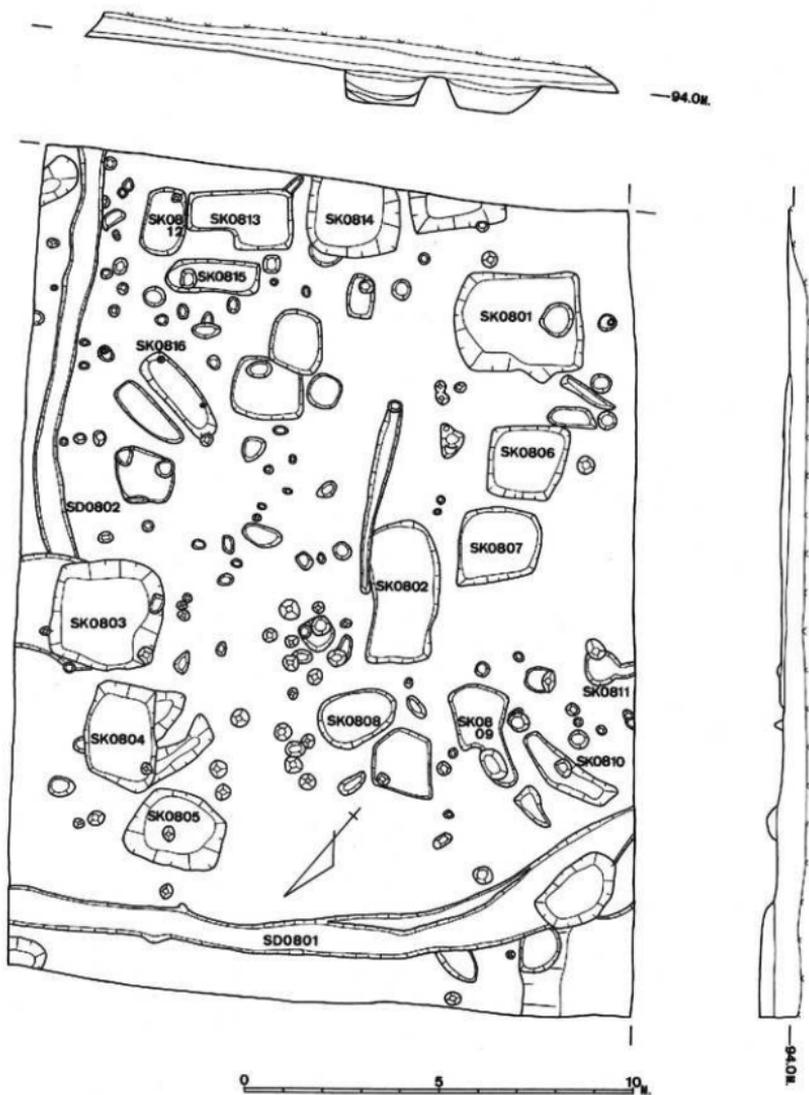
第11図 第6トレンチ遺構配置図



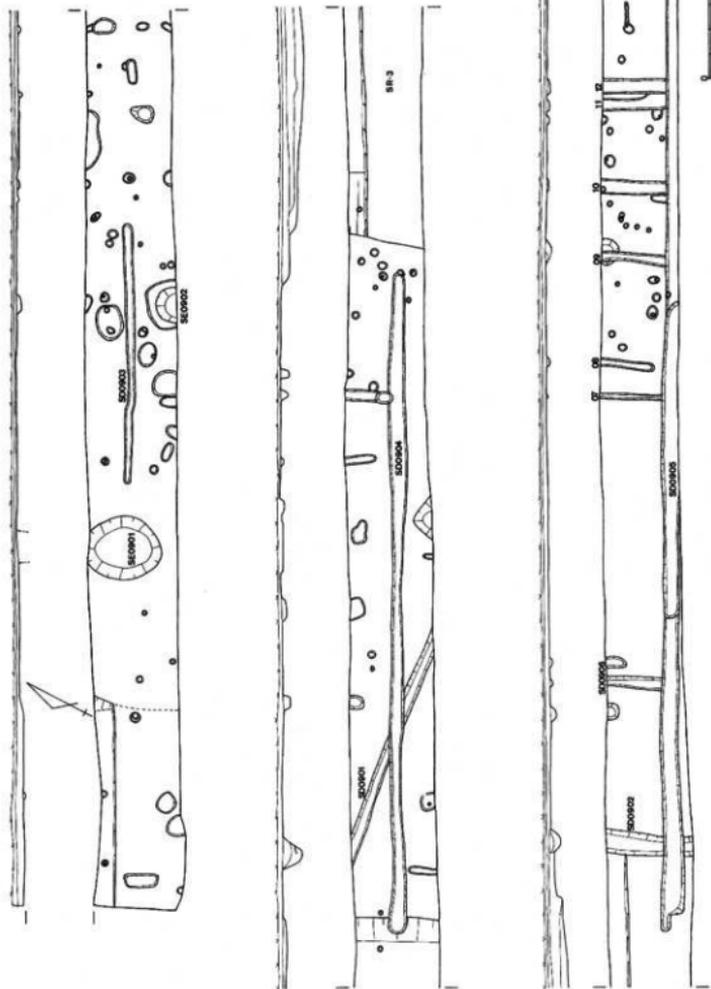
第12図 第7トレンチ遺構配置図



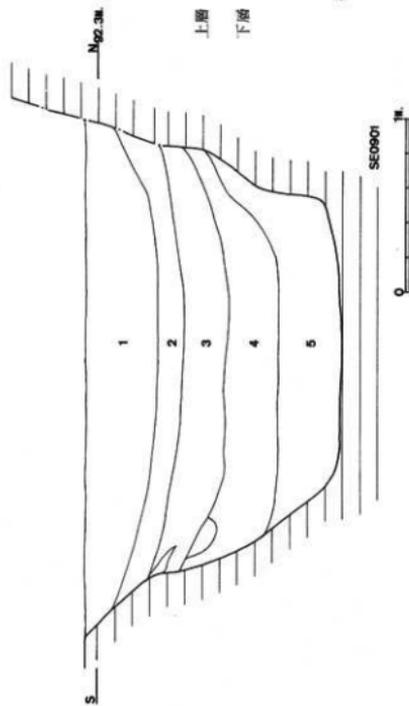
第13図 第6トレンチS B0601実測図



第14図 第8トレンチ遺構配置図

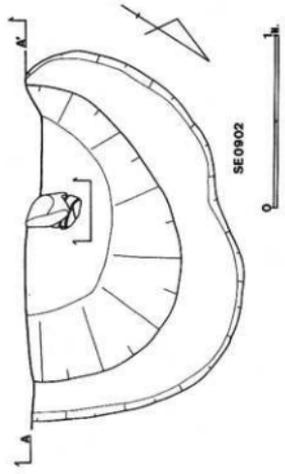


第15図 第9トレンチ遺構配置図



- 上層 | 1. 暗茶褐色砂性粘質土 (黄褐色土を含む)
 " "
 " "
 下層 | 2. 淡黒褐色粘質土
 " 砂性粘質土
 3. 砂性粘質土
 4. 暗青灰色粘質土
 5. 暗青灰色粘質土

第16図 第9トレンチSE0901土層図



- 上層 | 1. 暗茶褐色砂質土
 " 茶黒褐色砂性粘質土
 2. 黒褐色粘質土
 3. 砂性粘質土
 下層 | 4. 黒灰色粘質土 (青灰色土混入)
 " "

第17図 第9トレンチSE0902土層図

5. 出土遺物 (第19図)

須恵器 1・2は第4トレンチSD0401より出土した坏蓋である。1は口径14.7cm、器高2.7cm、2は口径16.1cm、器高3.2cmを測る。いずれも天井部中央に径2.3~2.9cmの扁平なつまみを付している。形態はいずれも平らな天井部から口縁部へはやや稜をもって開き、口縁端部は内側へ屈曲させている。調整は天井部外面をへら削り、その他の部位は横ナデである。8世紀の初頭前後に位置づけられよう。^④

3・4も第4トレンチSD0401よりの出土である。3は高台を付す坏で、口径16.0cm、高台径10.9cm、器高3.8cm、高台高0.5cmを測る。底部と体部の境には稜をもち、口縁部は外反気味に開き端部をまるくおさめる。高台は底部のやや内側に付き、内縁で接地している。4は口径12.0cm、器高3.9cmを測る坏である。不安定な底部に口縁部はやや外し、端部はまるくおさめる。底部はへら切り、他は横ナデで調整している。3は7世紀後半代に属するものであろう。

5は第4トレンチ拡張部SD0401の直上から出土している坏である。口径15.4cm、高台径11.4cm、器高5.4cm、高台高0.5cmを測る。高台は底部外縁に付し、坏体部はほぼまっすぐに開いている。口縁部はやや外反し、端部をまるくおさめている。高台は断面台形を呈し、やや外向きに開く。調整は体部内外面ともに横ナデ、底部外面はへら切りである。胎土は概ね精良で、焼成はやや軟質、暗灰色を呈している。8世紀中葉の時期が考えられる。

6・7は内面にかえりをもつ蓋である。6は第4トレンチSK0402、7は第8トレンチのSK0802からの出土である。6は口径9.4cm、器高3.3cmを測る。まるみをもつ天井部から口縁部はまっすぐ開き、口縁内面にかえりをもつ。天井部中央には径1.2cm、高さ1.3cmの宝珠形のつまみを付す。調整は天井部をへら削り、他は横ナデである。7は口径11.1cm、器高2.9cmを測る。天井部と口縁部の境は明瞭でなく、内わん気味に開いている。口縁端部内面のかえりは、内傾度が強く開き気味である。天井部には径1.0cm、高さ0.8cmの宝珠形のつまみを付している。調整は横ナデである。胎土にはいずれも砂粒を含み、焼成は良好、暗青灰色を呈している。いずれも7世紀中葉代の時期が考えられる。

8・9は第2トレンチSD0201から出土した坏である。8は径11.8cm、高さ0.3cmの高台を付す。調整は横ナデである。胎土は小砂粒を含み、焼成は軟質、青灰色を呈している。9は底径7.9cmを測る。内外面とも横ナデで調整している。

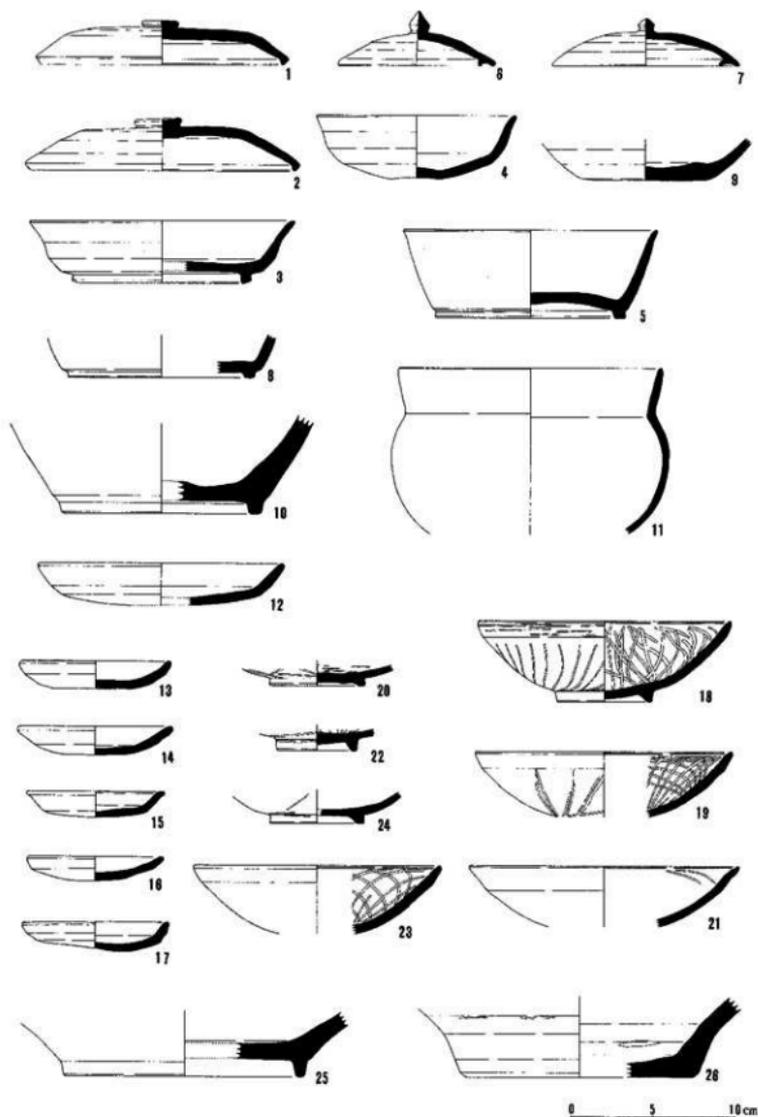
10は第2トレンチSK0201から出土した壺底部と考えられる。高台は径12.0cm、高さ0.7cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好、灰色を呈する。器面は内外面とも横ナデ調整である。

土師器 11は第4トレンチSK0401より出土した甕である。口径は16.0cmを測る。球形の体部に口縁部はほぼまっすぐに外開きし、端部はまるくおさめる。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質である。内外面とも煮沸のための火熱をうけて、器壁が割離しているため、調整は明らかでない。

12~17は土師甕である。12~15は第9トレンチSE0901の上層、16は同下層からの出土、17は、同排土中のものである。

12は大型の甕で口径14.8cm、器高2.6cmを測る。底部と口縁部の境は純い稜を成し、口縁端部はまるくおさめている。調整は口縁部を内外面とも横ナデ、底部はナデ調整である。胎土は概ね精良で、焼成は軟質、淡褐色を呈している。

13~17は小型の甕である。口径は、15・16が8.2cm、13・14・17が9.0cm前後を測る。器高は1.5~1.7cmである。13・14・16・17は、内わん気味の口縁部外面に強めの横ナデを施し、端部は外面に、弱い面をもつ。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質で淡褐・淡橙褐色を呈する。15は他と若干異り、口縁部を外側へつまみ出している。12世紀末前後に属する



第19区 金剛寺遺跡出土遺物

ものであろう。^③

黒色土器 18～24はいずれも内面黒色の埴である。18～20は第9トレンチ SE0901の下層、21・22は同上層、23・24は同排土中からのものである。

18は口径15.2cm、底部5.6cm、器高5.0cmを測る。体部から口縁部にかけては内わんし、端部内面に一条の沈線めぐる。高台は高さ0.6cmを測り、断面は逆三角形に近い。調整は、口縁部外面を横方向のヘラ磨き、体部には放射状に暗文を施す。内面は乱雑な暗文である。胎土は概ね精良で焼成は軟質である。内面と口縁部外面は黒色を呈し、外面とその他の部分は暗褐色である。

19は口径15.4cmを測る。形態・胎土・焼成・色調は18とほぼ同様である。調整は外面口縁部を横ナデ、体部には2本単位の放射状の暗文を施す。内面は口縁部付近を横方向にヘラ磨きしたあと、斜格子状に暗文を施している。

21は口径16.2cm、23は口径15.0cmを測る。両者とも口縁部外面を横ナデ、体部はナデもしくは指オサエである。23は内面に斜格子状の暗文を施している。

20・22・24は埴の底部である。高台径は20・24が5.6cm、22が4.7cmを測る。22・24の高台は断面逆台形を呈し、高さは0.7cmと高い。20は外開きで低い。

これらの土器はいずれも「近江型」黒色土器の特色をもつものであるが、埴としては浅くなる傾向を示しており、また内外面の調整も簡略化しつつある。12世紀後半代に属すると考えられる。^④

6. まとめ

今回の調査で比較的まとまった遺構を検出したのは第4・6・8・9トレンチである。その時期は概ね白鳳時代から室町時代にわたる。

第4トレンチで検出した掘立柱建物SB0401～03は、いずれも柱間規模と方位をそろえたものである。規模、配置ともに規同性が認められ、その性格としては倉庫か倉庫に類するものが考えられる。柱穴からの出土遺物はなく、時期を考定するのは困難であるが、SB0401の西約12mの地点で、方位をほぼ同じくした溝SD0401を検出しており、そこから奈良時代前期に位置づけられる須恵器が出土している。この溝より西側では建物遺構を検出しておらず、先の3棟の建物群の区画を示す溝と考え、3棟の掘立柱建物も同時期に属するものと思われる。

次に第9トレンチ西部で検出した二基の井戸は、出土遺物より平安時代後期の時期が考えられる。この付近では西方約200mの地点の昭和58年度果堂かんがい排水事業に伴う発掘調査で、平安時代前期に位置づけられている掘立柱建物群が検出されている^⑤。建物群は5×2間のもの二棟を中心に、前後三期にわたる計18棟が確認され、その性格として荘園官舎に類するものが考えられている。また、同じく果堂かんがい排水事業に伴う昭和59年度の発掘調査でも、掘立柱建物三棟、緑釉陶器を出土する土坑などを検出しており、一連の遺構と考えられる^⑥。つまり、この周辺には平安時代を中心にしてかなりの規模をもった建物群が建ち並んでいたことになる。今回検出した第9トレンチの井戸は、それよりやや時代が下ると考えられるが、先の遺構群との関連を想定するならば、その時期の下限の一端を示すものかもしれない。

すなわち、佐々木六角氏がこの地に金田別館を置く前時代にも、周辺地域の中である程度中核的な位置を占めていたものと思われ、館を設けるにあたって、そのあたりの事情が反映されていたことが考えられる。なお、今回の調査では、金明寺城跡に直接関連する遺構は認められなかった。

注①近江八幡市教育委員会「金剛寺城遺跡発掘調査報告書」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』(II) 1983)

②奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書」Ⅶ(1976)他。以下、須恵跡の項同じ。

③京都大学埋蔵文化財研究センター「京都大学埋蔵文化財調査報告書」II(1981)

④大橋信弥「『近江型』黒色土器再考」(『手原遺跡発掘調査報告書』1981)

⑤近藤滋「荘園官舎とみられる建物群」(『滋賀文化財だより』No86 1984)

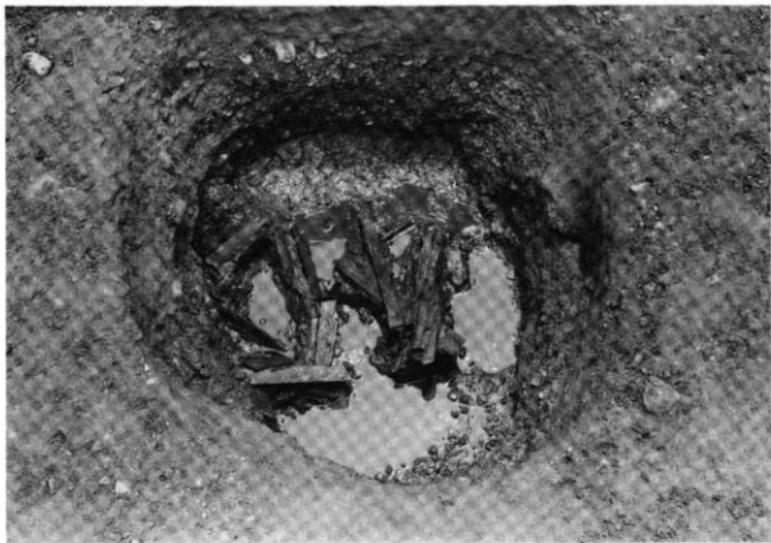
⑥「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書」II-1 (1985)



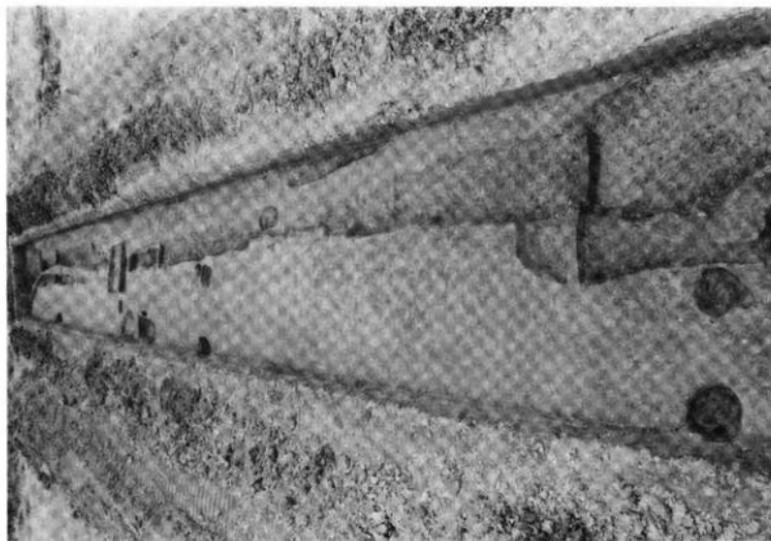
1. 金剛寺遺跡遠景 (北西から)



2. 箸トレンチ全長 (南から)



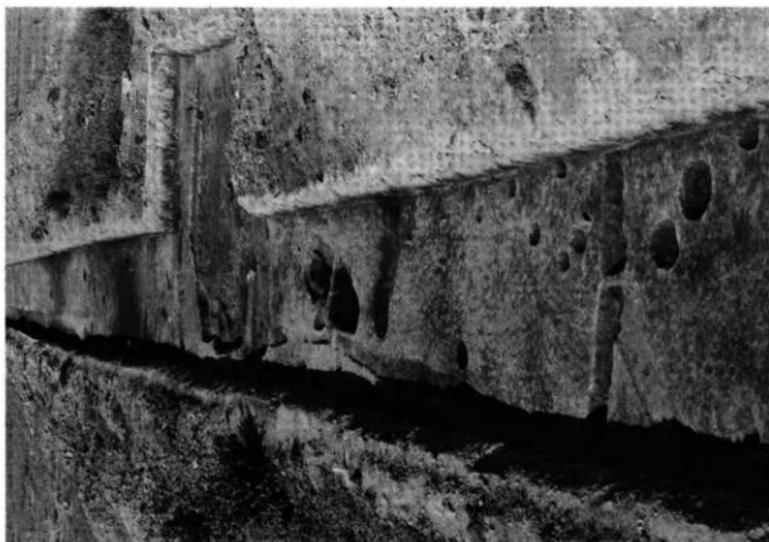
3. 第1トレンチSE0101



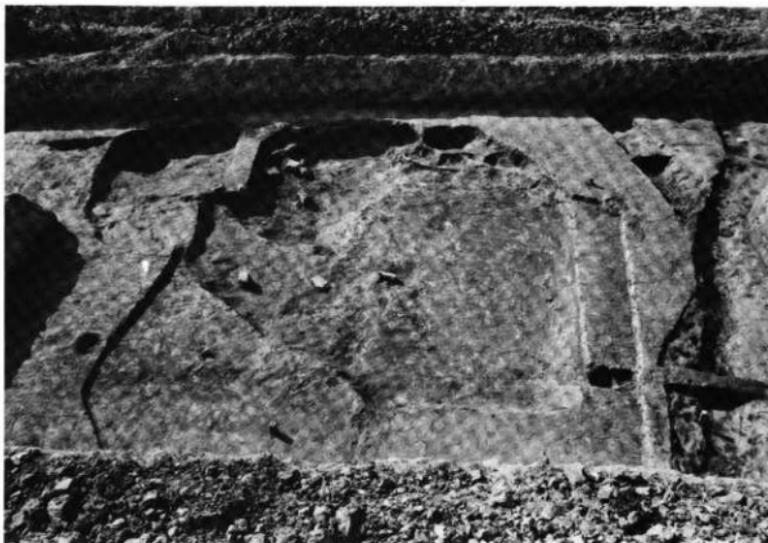
4. 第2トレンチ全景 (東から)



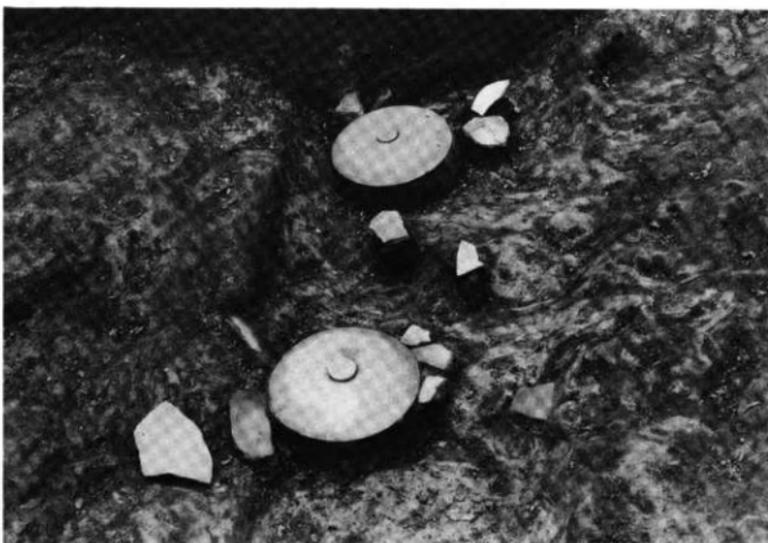
5. 第3トレンチ全景



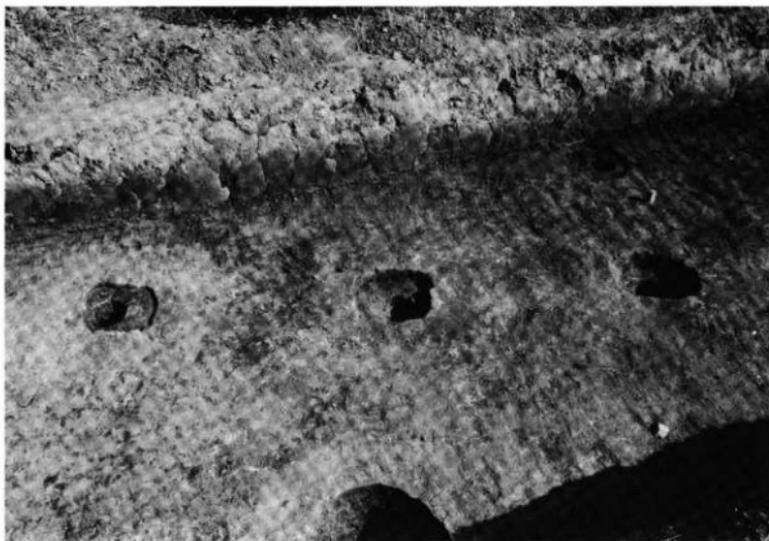
6. 第4トレンチ全断面(図から)



7. 第4トレンチ拡張部(南から)



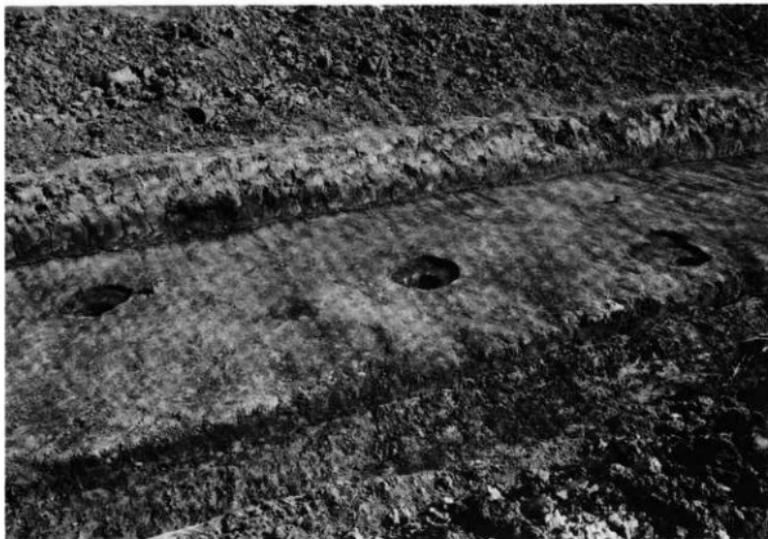
8. 第4トレンチSD0401



9. 第4トレンチSB0401



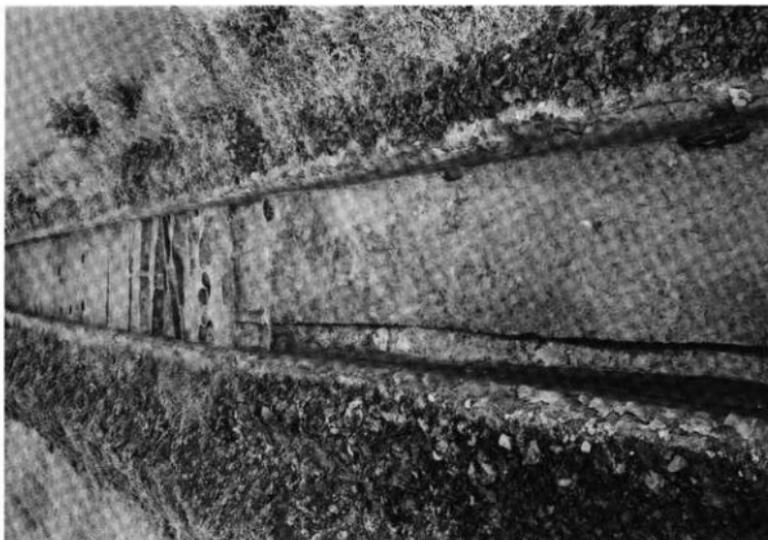
10. 第4トレンチSB0402



11. 第4トレンチSB0403



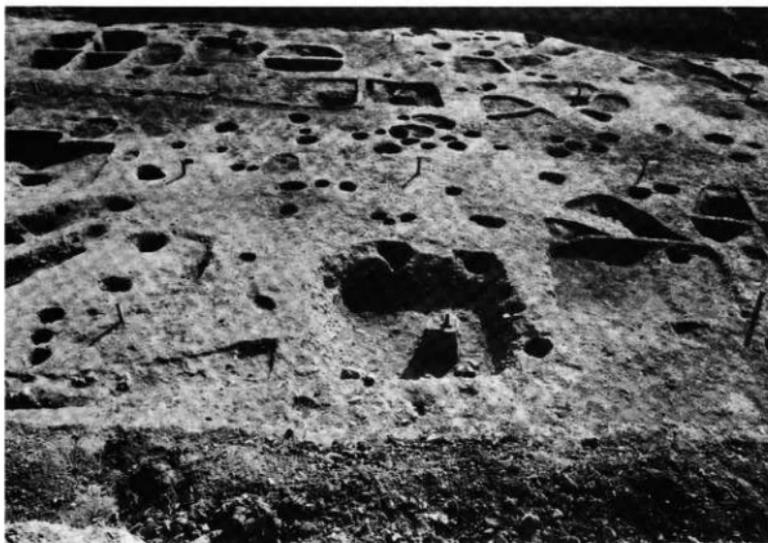
12. 壁のトラス全貌



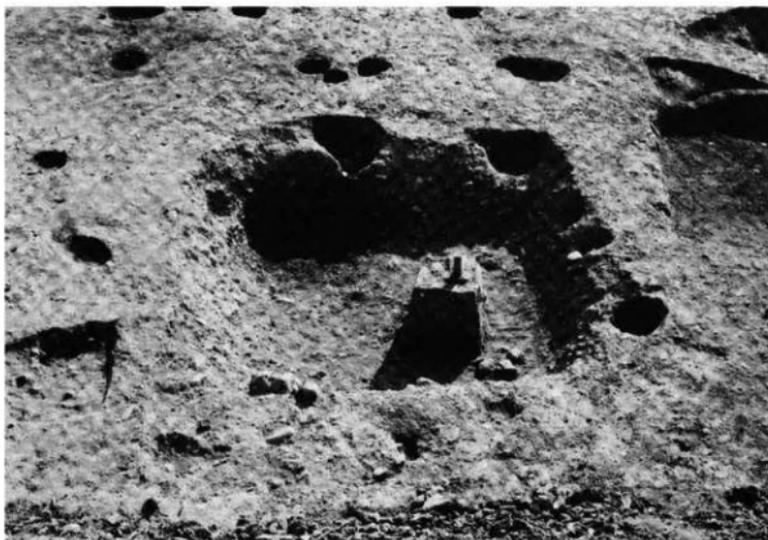
13. 第6トレンチ全景(東から)



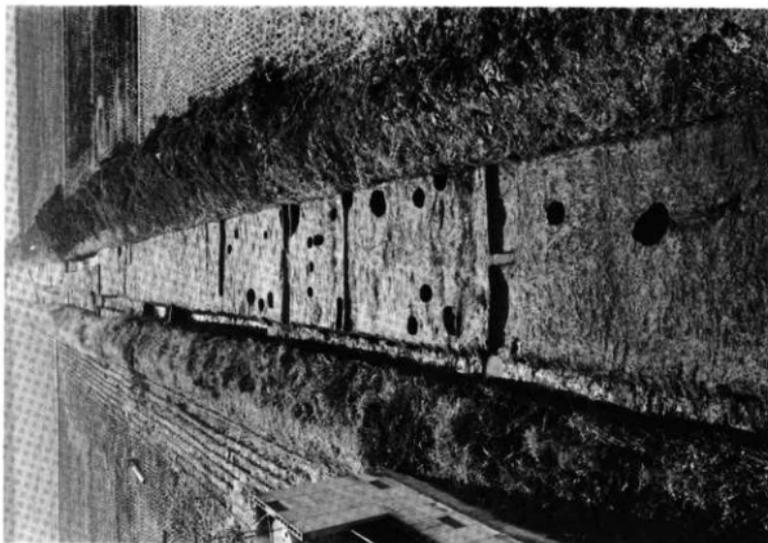
14. 第6トレンチSB0601



15. 第8トレンチ全景 (東から)



16. 第8トレンチSK0803



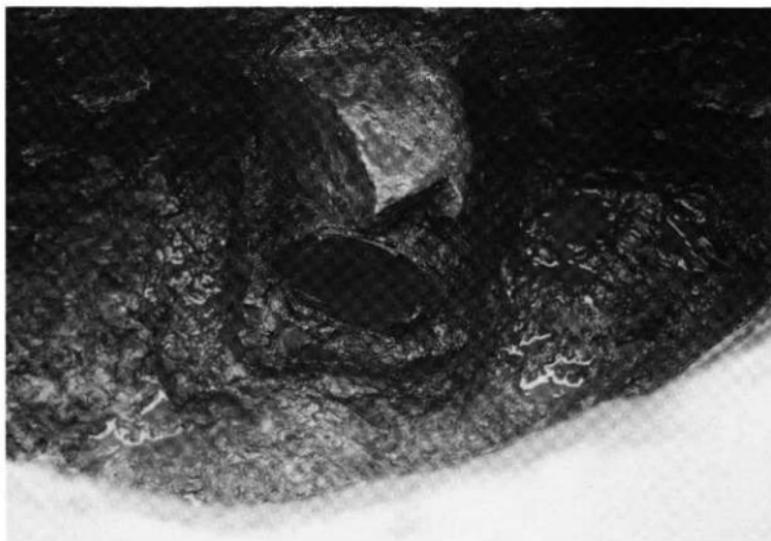
17. 塔9トレンチ全景(東から)



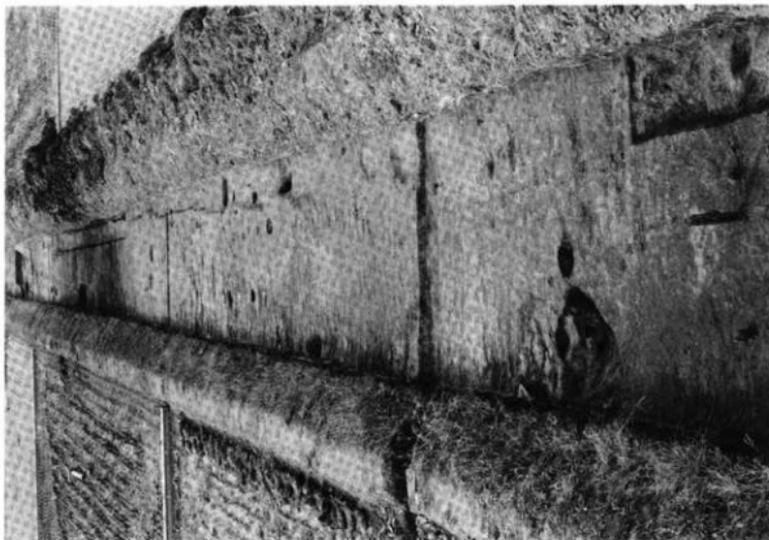
18. 塔9トレンチSSD090-1



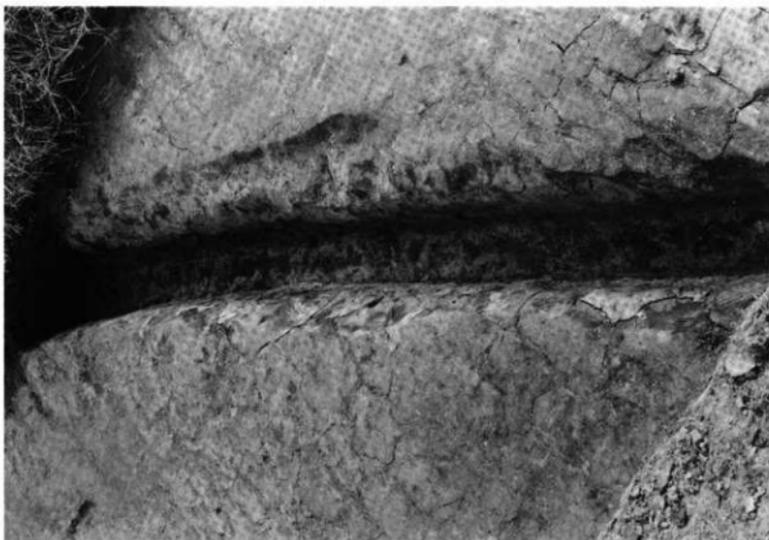
19. 第9トレンチSE0901



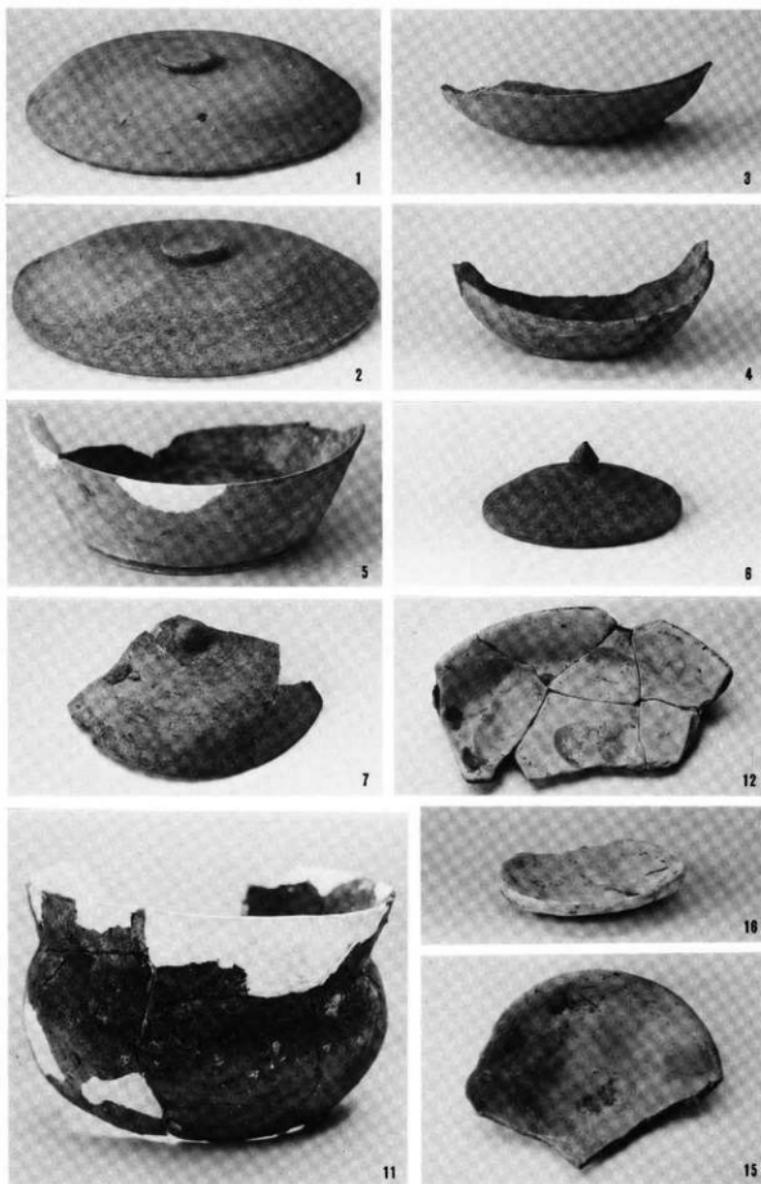
20. 第9トレンチSE0902

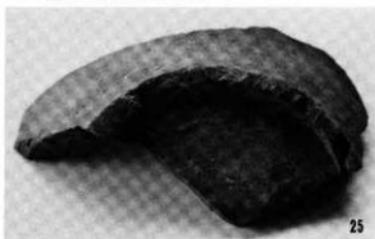
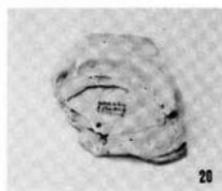
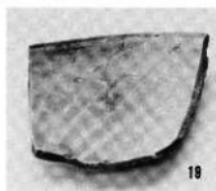
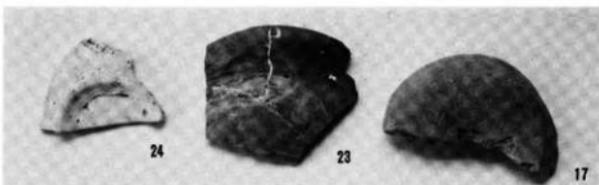
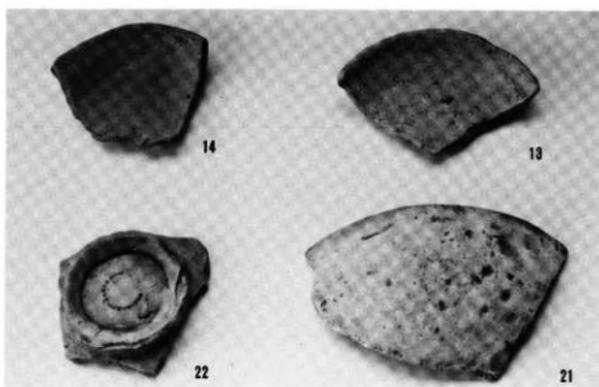


21. 第10トレンチ全景 (真から)



22. 第10トレンチの開口





Ⅲ 近江八幡市常衛遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和59年度県営ほ場整備事業（近江八幡東部地区西生米工区）に伴う近江八幡市常衛遺跡の発掘調査にか
かるものである。

常衛遺跡は、近江八幡市教育委員会の分布調査により飛鳥時代から平安時代の遺物の散布が認められており、ここに
県営ほ場整備事業が実施されるにあたって事前に発掘調査を行い、遺構の有無と範囲を確認し、その保存策を講じるこ
ととした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（2,220,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協
会が実施した。発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 主査田中勝弘 技師高野泰樹 技師田路正幸

調査担当 同上 田路正幸

調査補助員 轟浩司 奥田浩人 井田泰弘 小杉昌史 岡治博之 出路清久 福本光宏 西條博 沢村栄治

調査期間 昭和59年12月13日～昭和60年1月14日

調査にあたっては、近江八幡市教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕池建設課、同八日市県事務所土地改良第二課、
近江八幡市土地改良課、同市西生米町地区、同土地改良区の方々に協力を仰いだ。また、近江八幡市教育委員会技師岩
崎直也氏、同嘱託鎌宮正氏には調査の全般にわたって、多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆、編集には田路があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

SB；堅穴住居跡・掘立柱建物 SD；溝状遺構 SK；土坑状遺構 SR；自然流路

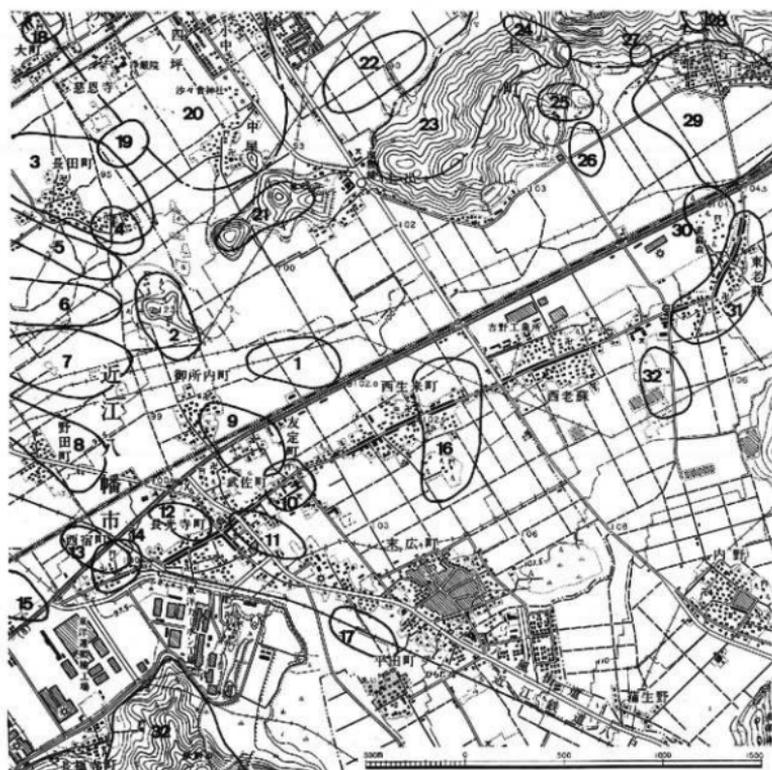
数字の上二桁は、それぞれの排水路敷きに設定したトレンチ番号を表わす。

2. 位置と環境（第1図）

常衛遺跡は、滋賀県近江八幡市西生米町地先に所在する。西生米町は近江八幡市の最東部にあり、蓮生郡安土町と境
を接し、集落の北辺を東海道新幹線と国道8号線が並走している。今回の調査地点は、新幹線北側の水田地帯にあたり、
標高は概ね100.50m前後を測る。

遺跡の西方を北流する蛇砂川は、神崎郡水瀨寺町に端を発し、八日市市を経て西ノ湖に注いでいる。この川は、その
名の示すとおり、流路が定まらず、出水の度に変遷、蛇行していったものと思われ、調査トレンチの各所で見られた砂礫
層も蛇砂川の沖積作用によるものと考えられる。

常衛遺跡の北方には、佐々木六角氏の居城である観音寺城を擁する観音寺山（撤山）に連なる常来寺山（竜石山）が
横たわり、形象地輪などを出土する古墳時代中期の前方後円（方）墳、後期の堅穴系横口式石室を内部主体とする円墳



第1図 常衛遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 常衛遺跡 | 2. 出雲山古墳 | 3. 後川遺跡 | 4. 長田城遺跡 |
| 5. 北ノ森遺跡 | 6. 北ノ森南(仮)遺跡 | 7. 大手前北(仮)遺跡 | 8. 大手前遺跡 |
| 9. 沢ノ口遺跡 | 10. 谷谷館遺跡 | 11. 西中遺跡 | 12. 西中北(仮)遺跡 |
| 13. 半田遺跡 | 14. 郷館遺跡 | 15. 柿木原遺跡 | 16. 的場遺跡 |
| 17. 吉ヶ敷遺跡 | 18. 熊野神社古墳群 | 19. 金剛寺遺跡 | 20. 安土城下町遺跡 |
| 21. 常楽寺山古墳群 | 22. 西才行遺跡 | 23. 観音寺城跡 | 24. 鳥打峠遺跡 |
| 25. 竜石山古墳群 | 26. 平塚古墳群 | 27. アラシカ谷遺跡 | 28. アラシカ谷古墳群 |
| 29. 石寺薬市薬座遺跡 | 30. 老蘇の森 | 31. 東老蘇遺跡 | 32. 東老蘇立宿遺跡 |

などを含む、常楽寺山古墳群が存在している。また観音寺山南麓にも、同じく堅穴系横口式石室墳をもつ竜石山古墳群などの後期群集墳が営まれている。

弥生時代にさかのぼると、観音寺山北西の安土町西才行遺跡^①、同山を横切る鳥打峠遺跡^②などで、中期末から後期にかけての遺物の出土が知られる。また、この地域の集落跡としては、常楽寺山北側の安土町慈恩寺遺跡^③で弥生時代末から古墳時代前期の住居跡群が、さらに同町小中遺跡^④では古墳時代中期から後期にかけての住居跡群が確認されている。

中世には、東方の観音寺山に全国でも最大規模の、近江の雄佐々木六角氏の山城観音寺城が築かれ、安土桃山時代には、常楽寺山北方一帯に織田信長による安土城下町^⑧が設けられている。

また、この地区には現在の国道8号線に沿って中山道が走っており、とくに武佐は宿場町として賑わいを見せたところである。

3. 調査経過 (第2図)

本年度の調査地点は、近江八幡東部地区西生来工区の西部にあたる。新幹線および国道八号線に直交し、常楽寺山山塊に向かう南北方向の第1号排水路、約180m東の第2号排水路敷に沿ってそれぞれ1号は南から1～6トレンチ、2号は北から0～17トレンチを設定した。

第1号排水路では、第1トレンチから第3トレンチにかけては第1層に耕土、第2層に黒褐色砂質土が堆積し、現地表下20～30cmで砂礫層の地山が現われる。この地域は、現状の整然とした田割りが示すように過去に一度耕地整理がなされており、その影響は地山面にまで達していると考えられた。第1～第3トレンチにかけて見られた土堆状遺構は、この時の擾乱地であると思われる。

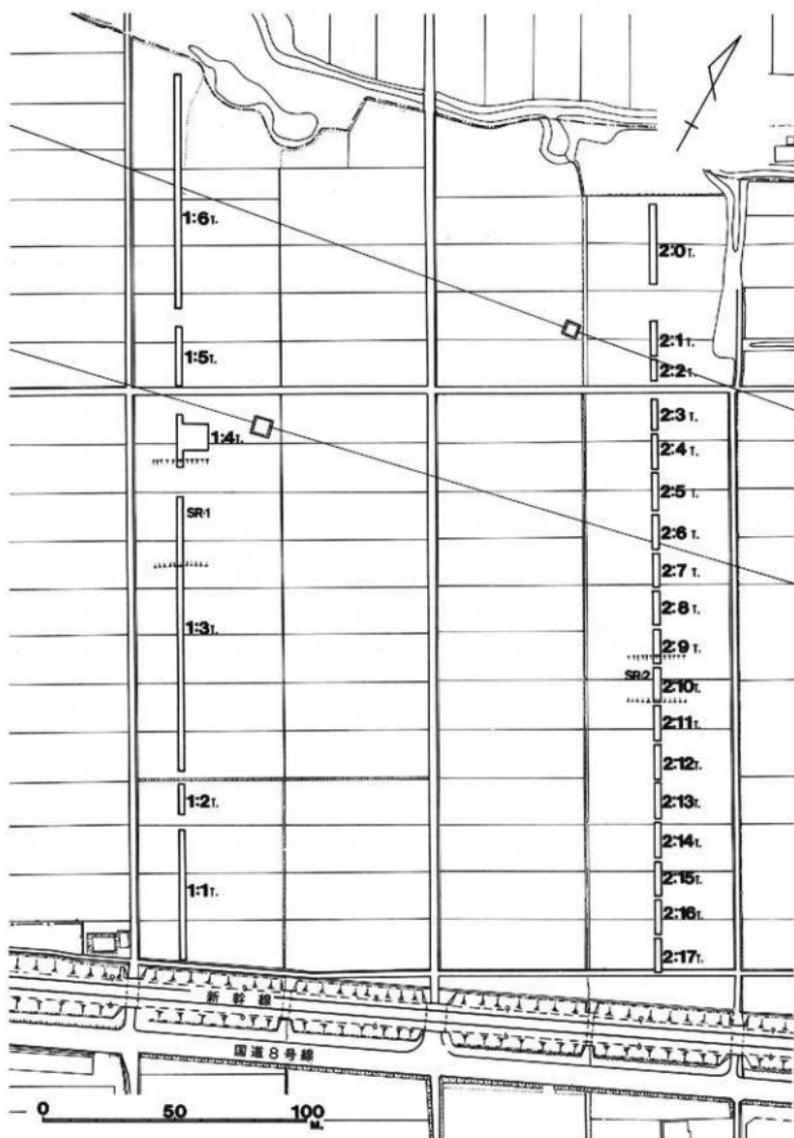
第3トレンチの北端では、最深度1.6mの落ち込みを検出した。第4トレンチの南端で、北界部が現われたことより幅約40mの流路跡と考えられるが、遺物は含まれておらず、施行後の支障を考慮して全掘しなかった。

第4トレンチでは、黄褐色砂質土の遺構面で、竪穴住居跡の南西隅を検出したために、東側幅9.5mまで拡張を行なった。第4～第6トレンチにかけては、遺構面が現田面下20cm前後と浅く、概して遺構の残りは悪いといえる。

第2号排水路は、常衛遺跡の東はずれにあたり、当初調査を予定していなかった部分であるが、第1号第4トレンチで竪穴住居跡を検出したために、集落の拡がりか予想され、同時に調査することにした。調査の開始時、既に排水路敷設の基準貫板が15mおきに設定されていたために、トレンチもそれに合わせて、区切らざるを得なかった。トレンチはいずれも長さ14.5m前後、幅は3mを測る。北端のトレンチを0としたのは、この部分のみが来年度の施行区域であったためである。

第2号排水路敷は、耕土直下で地山面が現われ、過去の耕地整理によると思われる擾乱地が多く、確実に遺構といえるものは少ない。ここからの遺物の出土もほとんどなかった。

現地調査は、昭和59年12月13日より開始し、第1号第1トレンチから順次、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業などを行い、昭和60年1月14日に終了した。



第2図 調査トレンチ配置図

4. 検出遺構

1) 第1号排水路 (第3~6図)

第1・2トレンチ 基本層序は、第1層耕土、第2層黒褐色砂質土で、現田面下20~30cm前後で砂礫層の地山が現われる。第1トレンチで約30ヶ所、第2トレンチで8ヶ所の土壇およびピット状遺構を検出したが、いずれからも遺物の出土はない。過去の耕地整理による攪乱層が大半である。

第3トレンチ 基本層序は、第1・2トレンチと同様第1層耕土、第2層黒褐色砂質土で、現田面下30cm前後で砂礫層の地山を検出した。南半部で、土壇、ピット状遺構を検出したが、これも多くは攪乱によるものと思われる。

SD0301は、トレンチ中央付近で検出した幅60cm、深さ40cmを測る素掘りの溝である。方位は、ほぼ南北を示す。遺物の出土はない。

SR・1は、第3トレンチ北部から第4トレンチ南端にかけて検出した。幅約40m、深さは最深部1.6mを測る。暗茶褐色系の粘質土が堆積しているが、遺物の出土はない。したがって、時期を地量することはできないが、自然流路跡であると考えられる。

第4トレンチ SR・1の北肩部、竪穴住居跡1棟、土壇状遺構などを検出した。基本層序は第1層耕土、第2層黒褐色砂質土で、現田面下30cm前後で黄褐色砂質土の遺構面が現われる。遺構面の標高は、概ね100.0mである。

SB0401は、南北6.0m、東西6.4mのほぼ正方形の竪穴住居跡である。床面積は、38.4㎡を測り、方位はN-25°-Eを示す。過去の耕作、攪乱のため、遺構の残りは悪く床面までの深さは、深いところでも10cmを測るにすぎない。東辺部では、わずかに輪郭が知れる程度である。主柱穴は四隅で検出した。柱穴は径50~70cmの円形を呈し、柱痕は径30cm前後、深さ30cm前後を測る。柱間距離は、最も長いP・2~P・3間で4.2m、最も短いP・1~P・4間で3.5mである。西辺南半で幅20cmの周壁溝の一部を検出したが、本来四辺を全周していたものかどうかは不明である。中央やや南よりと東よりで、土壇を検出している。また北辺P・3の西側で、径1.3m程の焼土の堆積が認められ、土師器の甕(1)が出土している。カマドの有無は現状では不明とせざるを得ない。他の場所での焼土の痕跡はない。床面は一部で地山の礫層が露出している。出土遺物より推して、6世紀から7世紀代の時期が考えられる。

第5トレンチ 耕土直下、標高99.80mで、黄褐色砂質土の遺構面を検出した。

SB0501 南北方位を示す3柱穴2間分の柱列を確認した。柱間距離は、2.5mと2.2mであり、柱穴は径50cm、深さ20cm前後を測る。現状では、全体の規模は不明である。遺物の出土もない。

第6トレンチ 第1号排水路の最北部に設定したトレンチである。基本層序は第1層耕土、第2層黒褐色砂質土であるが、中央部では耕土直下で遺構面を検出している。遺構面の標高は、南半で99.80m、北半で99.20m前後を測る。

SB0601は、南辺2.2m以上、西辺5.7m以上の竪穴住居跡と考えられる。西辺隅部分のみの検出である。深さは3~5cmを測るが、住居跡に伴う柱穴、周壁溝などは検出されなかった。南辺に接するP・2より土器片が出土しているが、住居跡に伴うものかどうか不明である。

SD0601は、ほぼ南北方位を示す幅50cm前後、深さ30cmを測る素掘りの溝である。土師器片が出土している。

SD0602・03は、幅80cmと1.3m、深さ10cmを測る東西方向の溝である。遺物の出土はない。

SD0604 トレンチ最北端で検出した。幅1.3m、深さ30cmを測る。弥生土器片が数点出土している。

2) 第2号排水路(第7、8回)

0~17トレンチを設定した。基本層序は、第1層粘土、第2層黒褐色砂質土であるが、多くのトレンチでは粘土直下で遺構面を検出している。遺構面は砂礫層で、標高は北端の0トレンチで99.60m、南端の17トレンチで99.90mを測る。各トレンチで土坑状遺構などを検出したが、多くは攪乱によるものと思われ、遺物の出土もほとんどない。

SD0701・0801 第7トレンチから第8トレンチにかけて検出した、南北22.5m以上、幅40~50cm、深さ20cmを測る葉振りの溝である。遺物の出土はない。

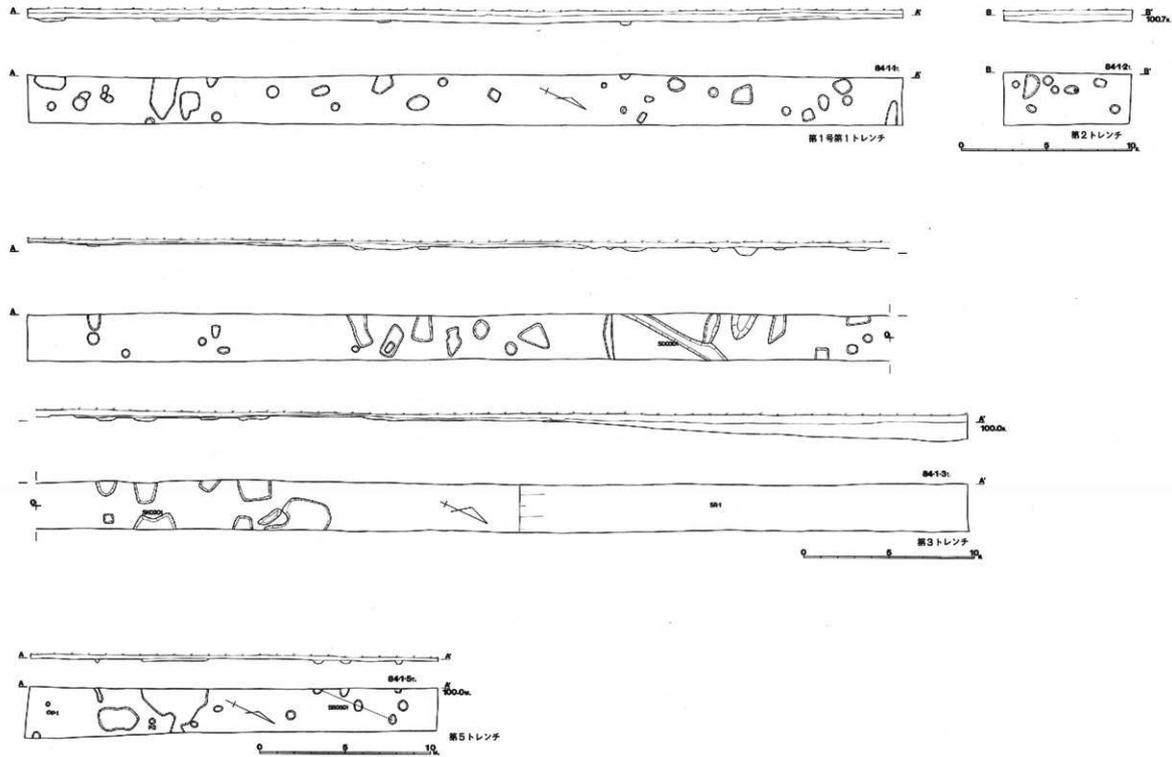
SD0702 SD0701と交差する幅50cm、深さ40cmを測る溝である。SD0702に先行する。

SB0801 はほぼ南北方位の3柱穴2間分の柱列である。柱間距離は1.9mと1.7m、柱穴は径20cm、深さ25cm前後を測る。全体の規模、時期ともに不明である。

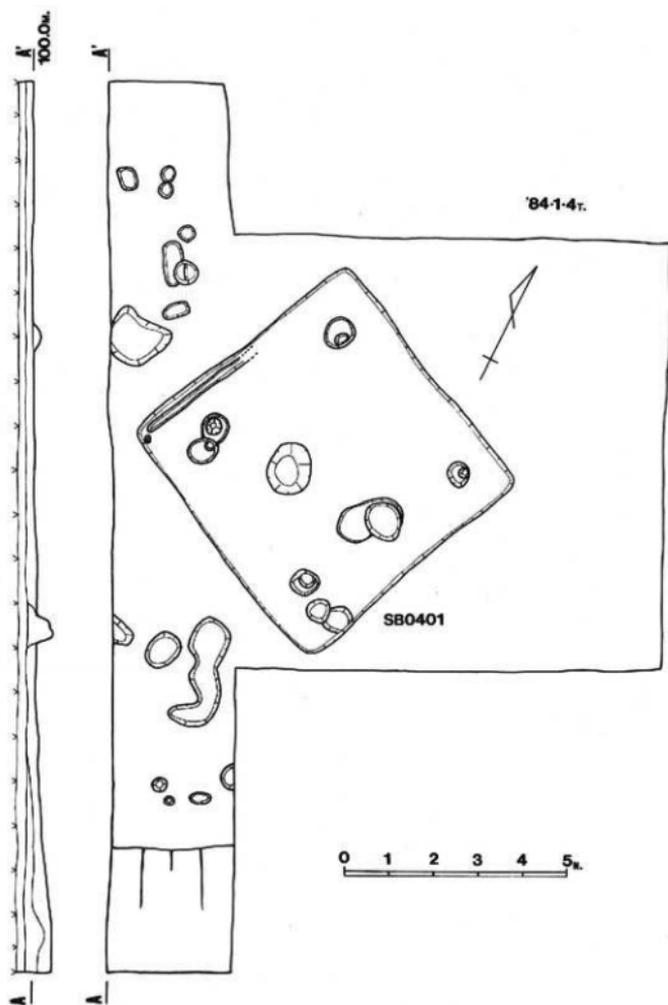
SR・2 第10トレンチで深さ40cm程の落ち込みを検出した。肩部は明確ではないが、幅18m程度の自然流路跡と考えられる。遺物の出土は見られない。

SD1201 幅50cm、深さ25cmの東西溝である。遺物の出土はない。

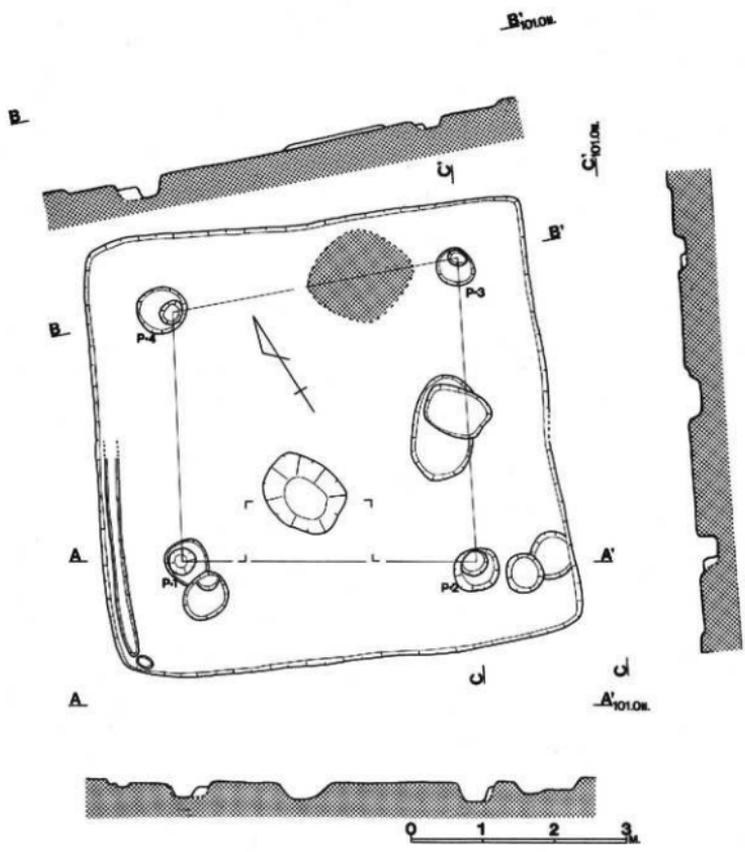
SBI401 南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物の柱穴を検出した。柱間距離は、南北列で2.6m、東西列で1.7mを測る。柱穴は径20~40cm、深さは20cm前後である。全体の規模、時期ともに不明である。



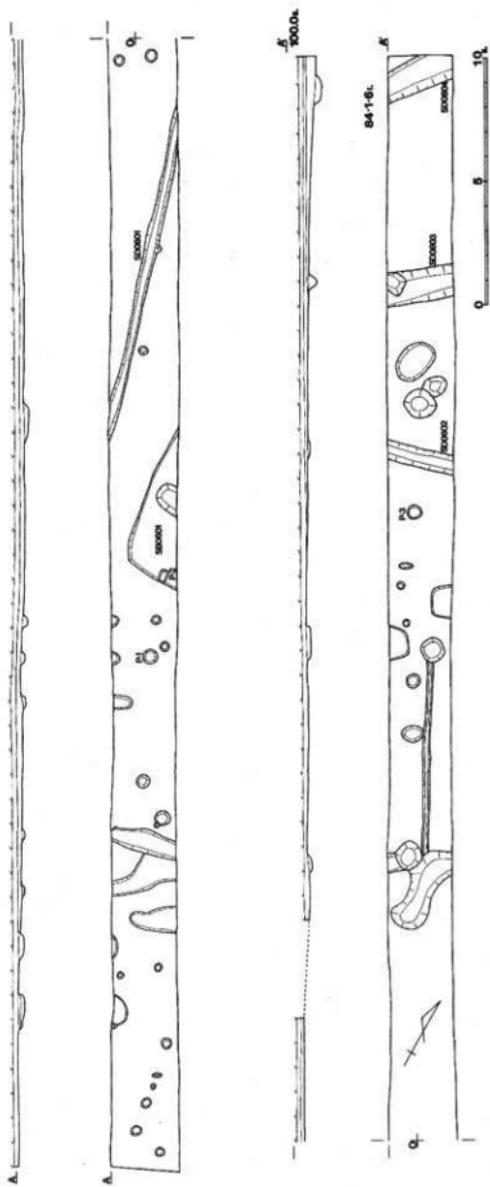
第3図 第1号第1～3・5トレンチ遺構配置図



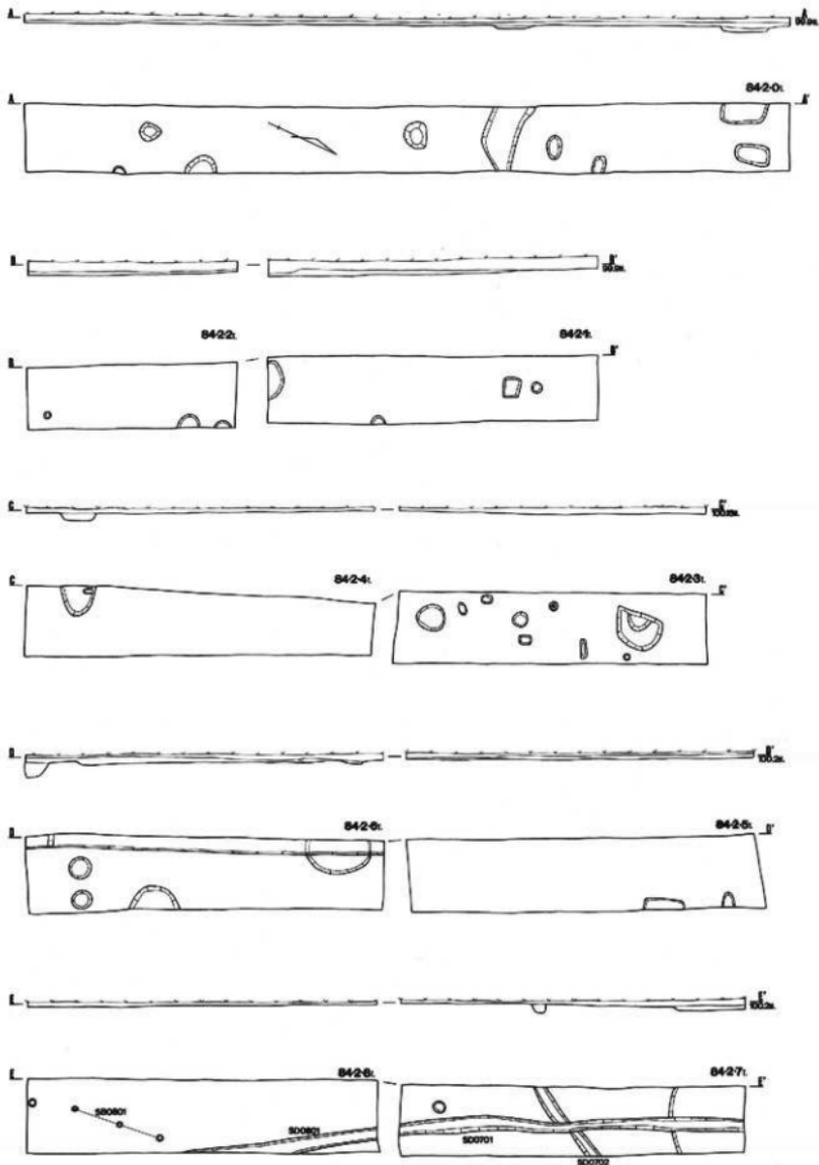
第4図 第1号第4トレンチ遺構配置図



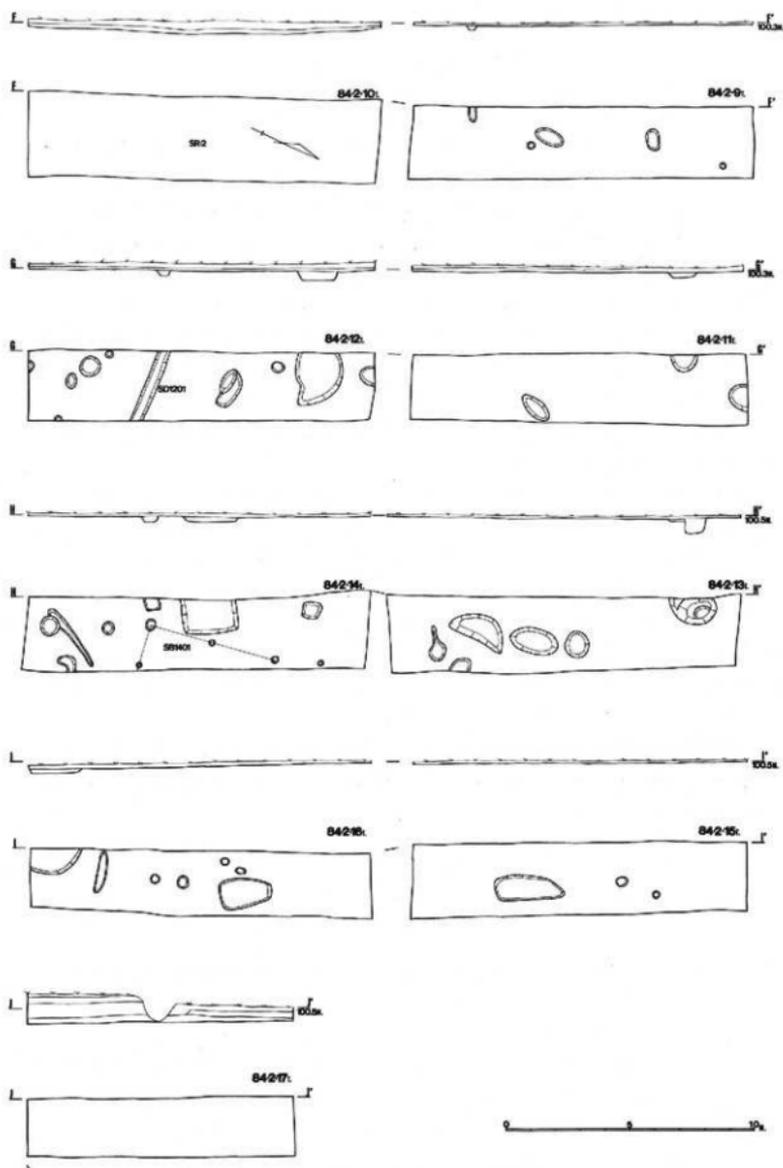
第5图 SB0401实例图



第6図 第1号第6トレンチ遺構配置図



第7図 第2号第0～8トレンチ道構配置図



第8図 第2号第9～17トレンチ遺構配置図

5. 出土遺物 (第9図)

第1号、第2号排水路のトレンチともに遺物の出土は僅少であり、残りも良くない。ここでは比較的形態の知れるものについて、簡単に述べることにする。

1は、第1号第4トレンチSB0401の焼土塊より出土した土師器の甕である。口径23.2cmを測る。肩は張らず、「く」の字状の口縁部を有する。口縁部端部は、まるくおさめるが、上部に一条の沈線をめぐらせている。調整は、体部が内外面ともに縦から斜め方向のハケ目、口縁部は横なでを施す。体部は長期を呈すると思われるが、いわゆる「近江型長胴甕」のもつ特徴とは若干異なるようである。とりあえず、6～7世紀代に属するものとしておきたい。

2は、SB0401内の土塊より出土した、口径22.6cmを測る土師器高杯の坏部である。内わん気味に開く体部から、口縁部はやや外反し、端部を上下に肥厚させている。内面に幅1mmの放射状の暗文を施す。胎土は精良で、赤褐色を呈している。8世紀前半代に位置づけられようか。

3は、第1号第5トレンチP・1より出土した灰釉の皿である。口径13.4cmを測る。体部は内わん気味に開き、口縁部はやや外反させる。焼成は堅緻で、緑味を帯びた白灰色を呈している。

4は、第1号第6トレンチP・1より出土した須恵器の杯蓋であり、口径12.5cm、器高1.2cmを測る。天井部には扁平なつまみを付していたと思われる。天井部は低平で、口縁部は屈曲させる。8世紀後半代に属するものか。

5は、第1号第6トレンチP・3より出土した弥生土器の甕底部と考えられるものである。内外面ともなで調整している。

6は、第1号第1トレンチの排土中より採集した須恵器の高台坏底部である。高台は径10cm、高さ0.4cmを測り、やや外方向に向いている。

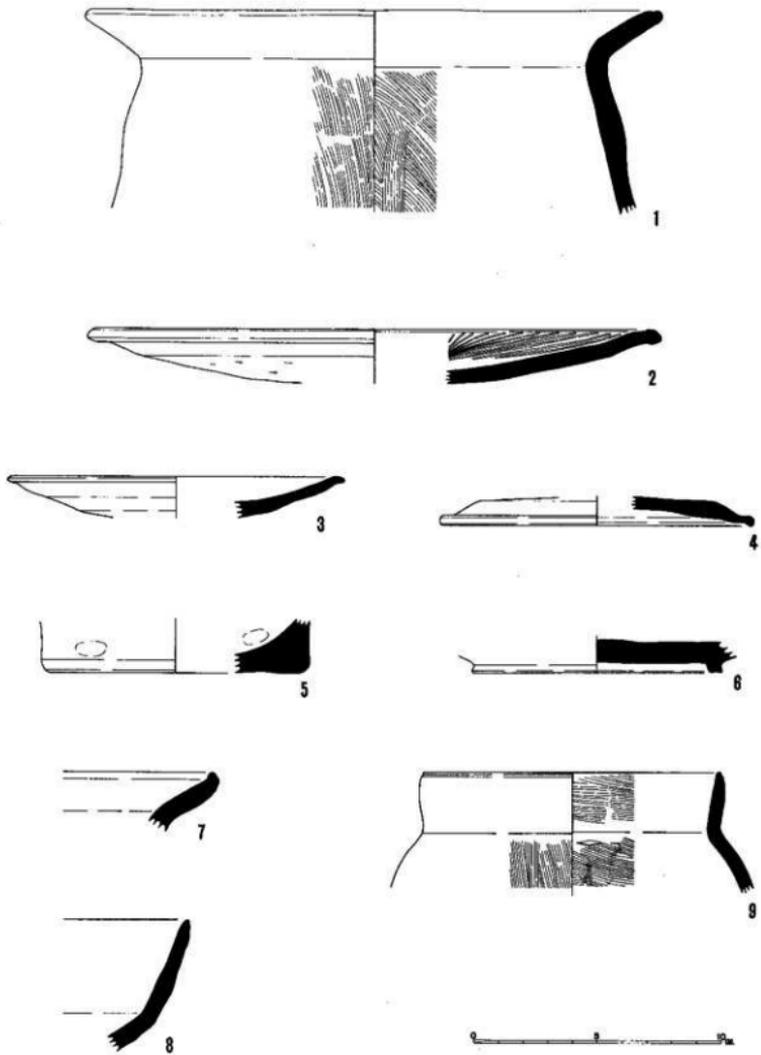
7は第1号第4トレンチ、8は第1号第6トレンチの排土中より採集した、土師器甕口縁、須恵器坏身の口縁部片である。

9は第2号第7トレンチ排土中より採集した土師器甕である。口径12cmを測る。口縁部は、内わん気味に直立する。端部外面に沈線をめぐらせている。調整は、体部外面が縦、内面は横方向のハケ目、口縁部は外面が横なで、内面は横方向のハケ目を施している。

6. まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡2棟をはじめ、時期は明らかにし得なかったが、掘立柱建物、溝、土坑状遺構などを検出した。

近江八幡市東部での竪穴住居跡の検出は常衛遺跡がはじめてであるが、同市南部の千僧^⑧供町、上田町^⑨で、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が確認されている。また、常楽寺山の北側安土町慈恩寺遺跡、同小中遺跡でも集落跡が検出されている。これらの環境を併せ考えると、今後この地域でもまとまった集落跡が確認される可能性が大きいとも言える。常衛遺跡においても、集落の拡がりが見られるところであるが、後世の土地開発と耕作、あるいは蛇砂川の氾らん等により、攪乱や削平を受けているという懸念もある。また、地形的に見れば、今回検出した竪穴住居跡は、乾砂



第9圖 出土遺物

川の沖積作用による砂礫層が形成する微高地上に立地しており、同川との関連で、拠点となるような規模の集落は営めなかったのかもしれない。

常楽寺山北方の安土町慈恩寺、小中遺跡で営まれた集落は、当然安土瓢単山古墳、あるいは常楽寺山古墳群^②と深いかわりをもつ拠点的な集落と考えられるが、常楽寺の場合は、遺跡の形成を古墳時代後期以前にさかのぼると想定しても、むしろ、観音寺山麓に営まれた後期群集墳^⑩とのかかわりのなかで、位置づけるべきかもしれない。

今回検出した竪穴住居跡SB0401は、出土遺物より6～7世紀代に営まれていたと考えられる。一般にこの時期の前後に、住居の形態は竪穴式から掘立柱建物に変遷し、その過程で、竪穴住居自体は小型化して行く傾向をもつとされるが、SB0401は規模も $\beta.0\text{m} \times 6.4\text{m}$ と比較的大きく、形態も整った方形を呈している。他に検出した掘立柱建物との関連は不明であるが、少なくともこの時期のこの地域においては竪穴住居が主流であり、掘立柱建物への移行は、後の時代を待って行われていったものと思われる。

また今回の調査では、細片ではあるが弥生時代の遺物も出土しており、遺跡の形成が弥生時代にさかのぼる可能性を示唆している。今後の調査が期待されるところである。

注①滋賀県教育委員会「観音寺城跡整備調査報告書」(1971)

②安土町教育委員会・安土町史編纂委員会・勸学県文化財保護協会「常楽寺山古墳群調査報告書」(1977)

③水野正好他「竜石山古墳群」(「東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1965)

④安土町教育委員会「西才行遺跡発掘調査報告書」(「安土町埋蔵文化財調査報告書」第2集 1983)

⑤④に同じ。

⑥石橋正嗣・横田文雄「慈恩寺遺跡」(「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」X-5-I 1982)

⑦西家淳朗「小中遺跡」(同上書)

⑧⑥に同じ。

⑨小笠原好彦「古代の近江型土師器と二つの特徴」(「滋賀文化財だより」No82 1984)

田中勝弘「いわゆる近江型土師器に関する一・二の問題」(「史想」第20号 1984)

⑩榎木立、堀ノ内、勸学院などの各遺跡で弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居跡が確認されている。

⑪蛇塚遺跡で弥生時代中期後半から同後期にかけての竪穴住居跡が確認されている。

⑫⑩に同じ。

⑬⑦に同じ。

⑭梅原末治「安土村瓢単山古墳」(「滋賀県史蹟調査報告」第7冊 1938)

⑮②に同じ。

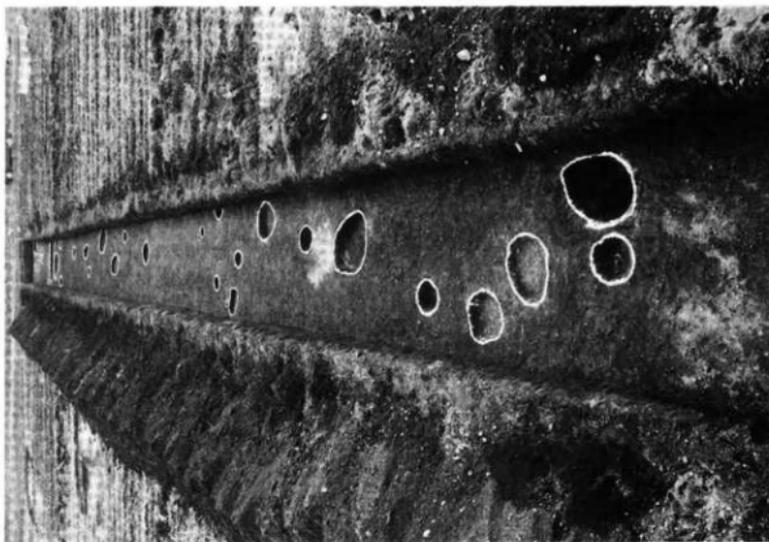
⑯竜石山古墳群、奥石神社古墳群、アラスカ谷古墳群など。



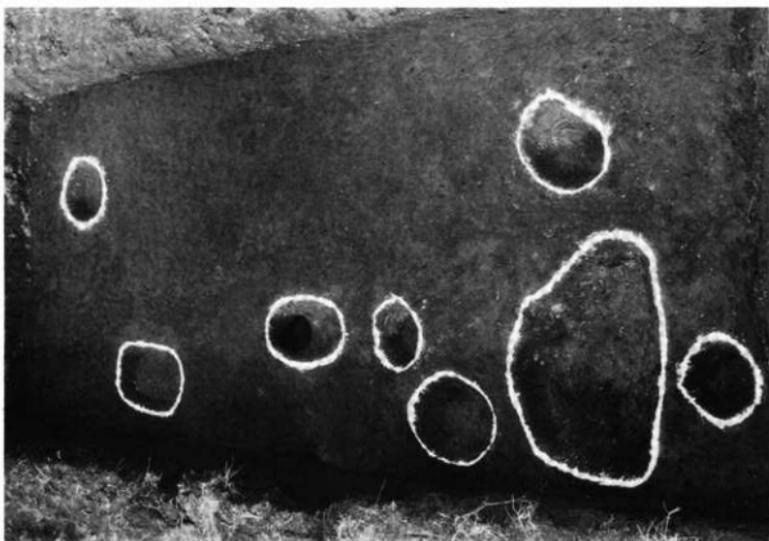
1. 常衛遺跡遠景（北から）



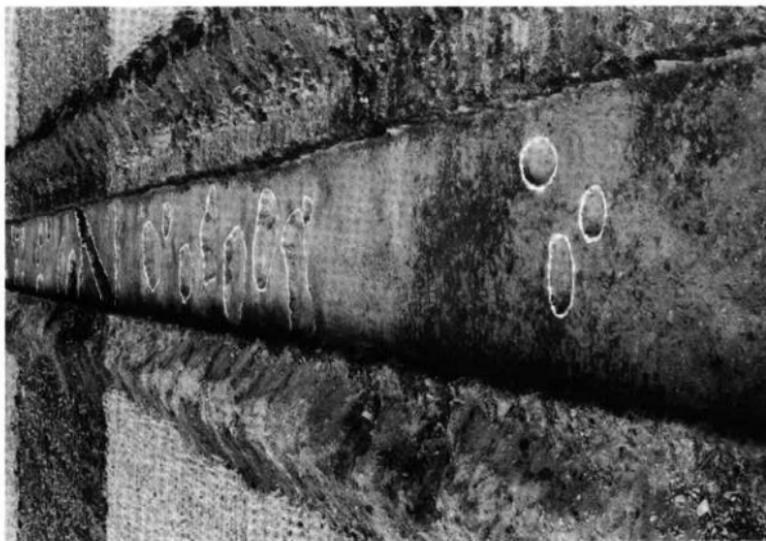
2. 調査風景



3. 第一号竈トレンチ全景 (北から)



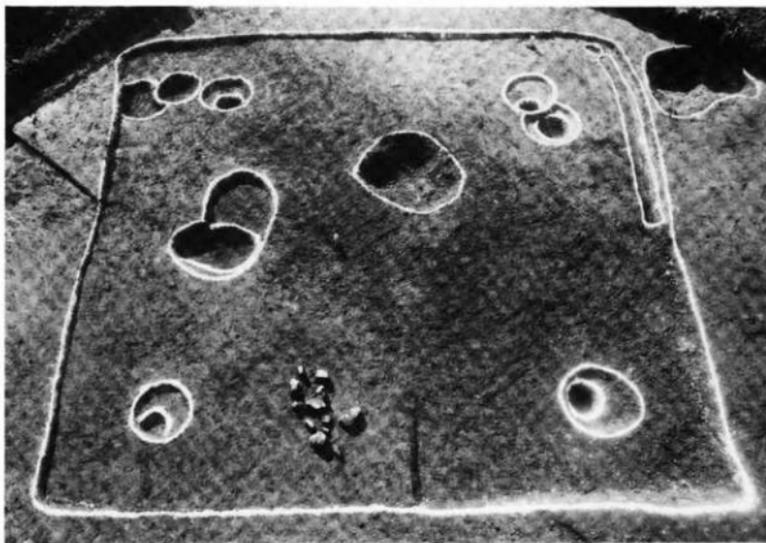
4. 第一号竈のトレンチ全景 (東から)



5. 第一号第三トレンチ全貌 (南から)



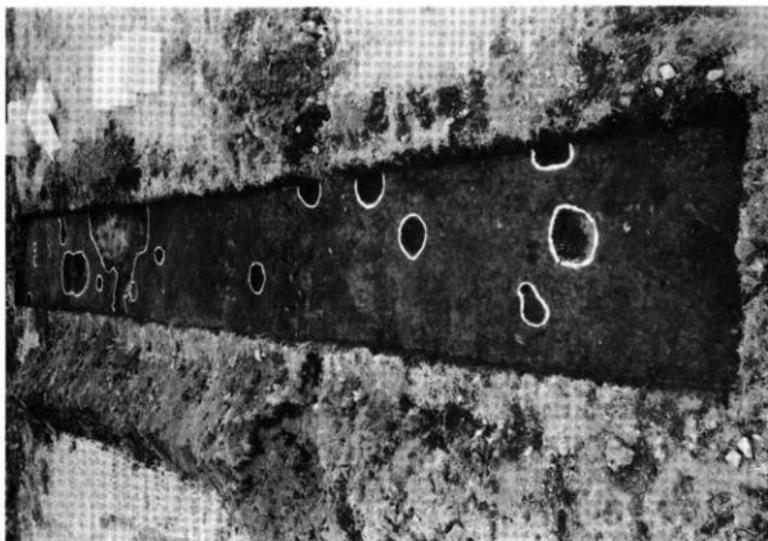
6. 第一号第三トレンチS.R. I



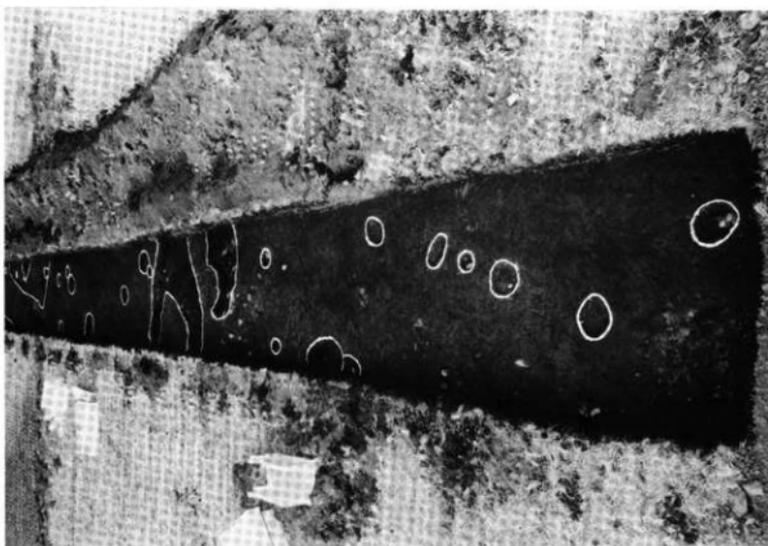
7. 第1号第4トレンチSB0401



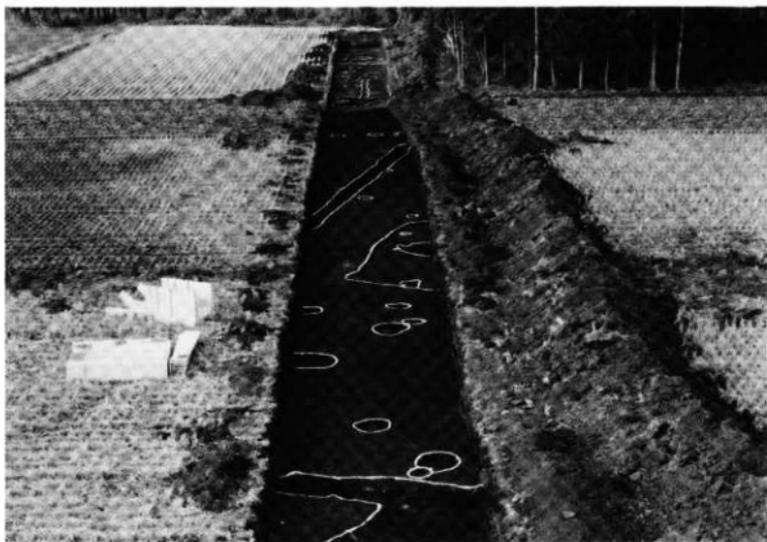
8. 同遺物出土状況



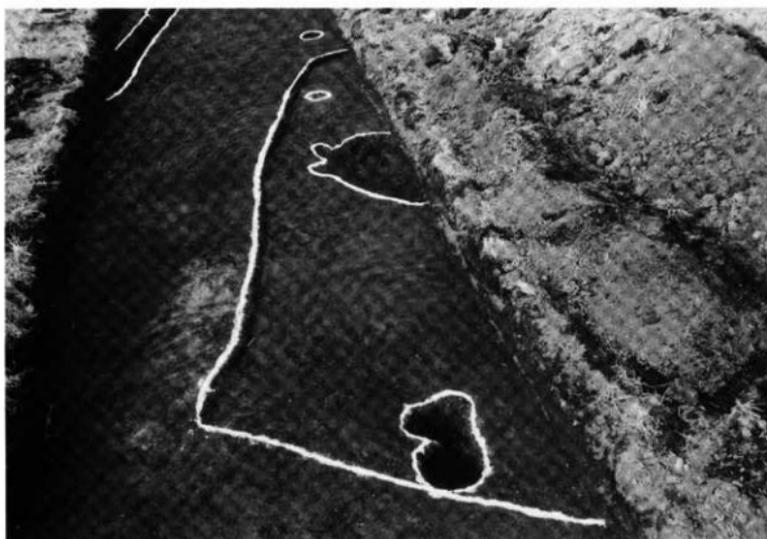
9. 第一号竈のトレンチ (北から)



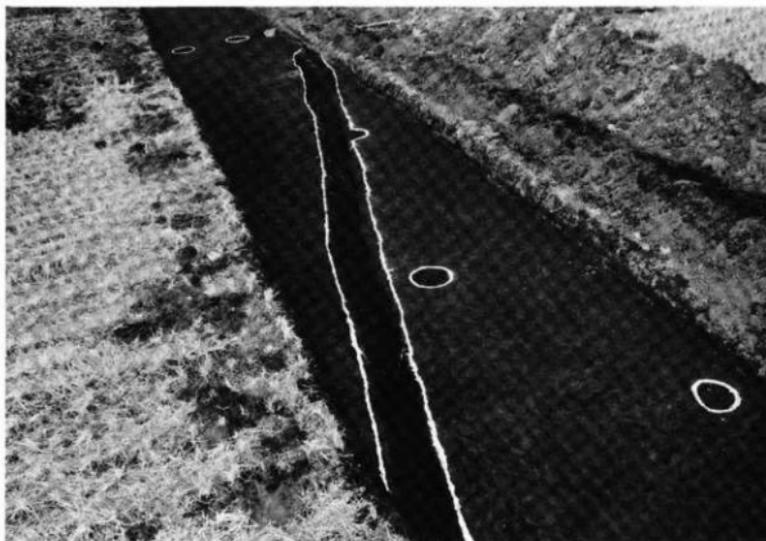
10. 第一号竈のトレンチ南半 (南から)



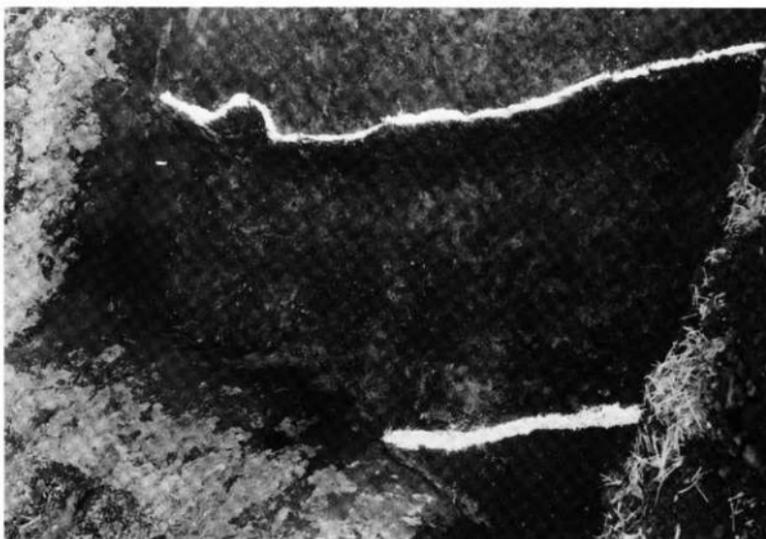
11. 第1号第6トレンチ北半 (南から)



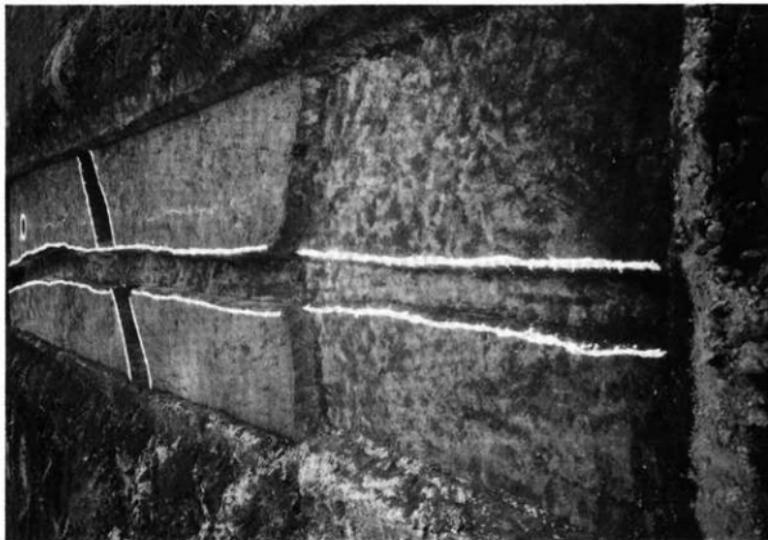
12. 第1号第6トレンチSB0601



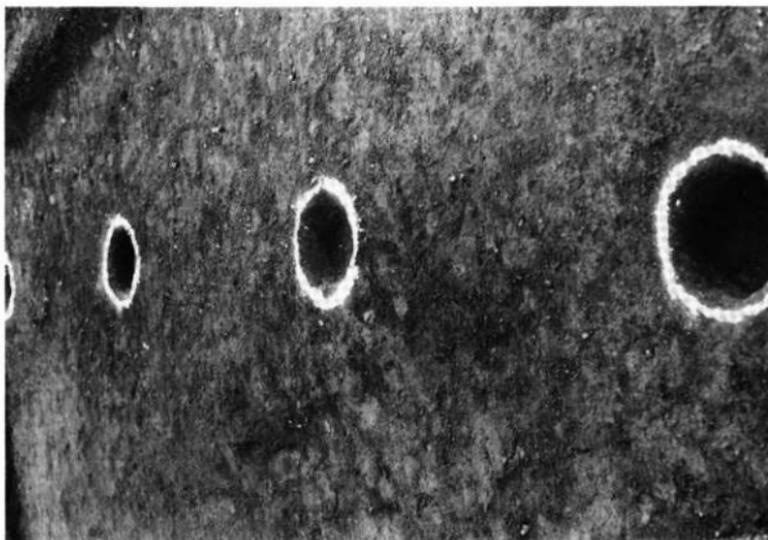
13. 第1号第6トレンチSD0601



14. 第1号第4トレンチSD0604



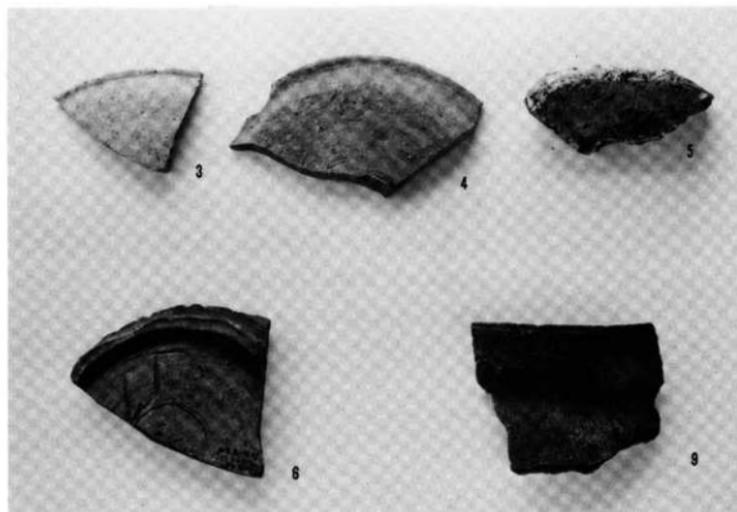
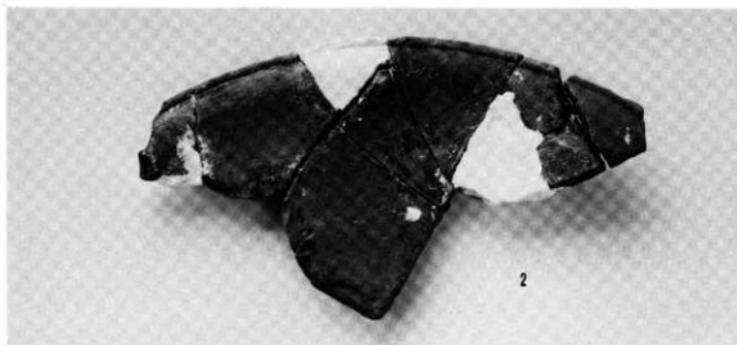
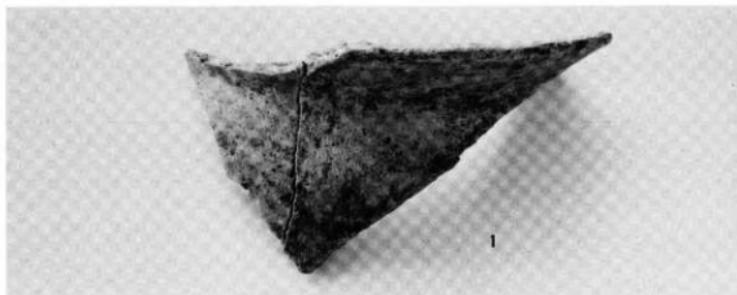
14. 常街道跡の断面図



15. 常街道跡の断面図



17. 第2号第10トレンチSR・2



昭和60年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告XII-3

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社

大津市札の辻4-20